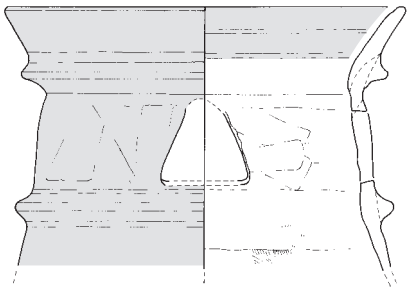
三重県埋蔵文化財調査報告３５５

飛塚古墳発掘調査報告



２０１５（平成27）年２月

三重県埋蔵文化財センター

飛塚古墳全景（南東から）

飛塚古墳出土家形埴輪・円筒埴輪

例　　言

1．　本書は、三重県三重郡菰野町大強原に所在する飛塚古墳の発掘調査報告書である。

2．　調査は、平成24～26年度一般国道477号四日市湯の山道路国補道路改築事業に伴って実施した。

3．　調査の体制等は次の通りである。

調査主体　三重県教育委員会

調査機関　三重県埋蔵文化財センター

【第１次調査】　調査担当　調査研究１課　技師　相場さやか

調査面積　Ａ区　736㎡

調査期間　平成24年５月22日～８月31日

【第２次調査】　調査担当　調査研究１課　主幹　伊藤　裕偉

調査面積　Ｂ・Ｃ区　191㎡

調査期間　平成25年８月28・29日・10月22日

【第３次調査】　調査担当　調査研究１課　主幹　伊藤　裕偉

調査面積　Ｄ区　13㎡

調査期間　平成26年４月15日

4．　調査にあたっては、菰野町教育委員会、四日市市教育委員会の協力を得た。

5．　当報告書の作成業務は調査研究１課が行った。遺物の撮影は田中久生と相場が行った。本書の執筆・編集は相場が行った。

6．　自然科学分析は、間渕創氏（三重県立博物館）にご協力を頂いた。

7．　現地調査および報告書作成にあたっては、菰野町大強原地区・吉澤地区の方々をはじめ、次の諸氏からご指導・ご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略・順不同）

赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）、早野浩二（同）、伊藤久美子（岡崎市美術博物館）

8．　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用頂きたい。

凡　　例

1．　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の１:50,000 地形図「桑名」「御在所」「四日市」「亀山」、県共有デジタル地図（平成 19 年測図）等を基にしている。三重県共有デジタル地図 2006 は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号：三総合地第 93 号）。

2．　調査区の座標は、新座標第Ⅵ系に基づくものである。挿図の方位は第Ⅵ座標系の座標北で示した。

3．　本書で用いた遺構略号は以下の通りである。

　　ＳＤ：溝　　ＳＨ：竪穴住居　　ＳＲ：自然流路　　ｐｉｔ：柱穴・小穴

4．　土層図は、層の区分を実線で表し、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の線よりも太い線で表現した。

5．　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行、1967 年初版、2003 年第 23 版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。

6．　遺物実測図の縮尺は以下の通りである。

　　埴輪（１：４）　土器（１：４）

7．　遺物観察表の凡例は以下の通りである。

　　報告番号……出土遺物実測図掲載番号である。

　　実測番号……実測段階の登録番号である。

　　器種・質等……埴輪・土器などの区分とその器種を記した。

　　壺形埴輪・円筒埴輪の場合は、第 15 図で示した分類名を記した。

　　区……Ａ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区の大地区を記した。

　　地点……Ａ区調査時に設定したアルファベットと数字の組み合わせによるグリッド名を記した。

　　遺構……遺物の出土した遺構名や層名を記した。

　　法量……遺物の規格を記す。埴輪の口縁部径は、実測段階での接地面である。

　　調整・技法の特徴……内外面の特徴を記した。「Ａ→Ｂ」は、Ａの後にＢが施されたことを示す。

　　胎土……小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

　　残存度……指示部位を 12 分割した際の残存度を示した。

　　特記事項……遺物の特徴となる事項を記した。

8．　埴輪に用いたスクリーントーンは以下の通りである。

　　赤彩

9．　遺物写真図版の番号は、遺物実測図の番号と対応している。遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

目　　次

Ⅰ　前言

1　調査に至る経緯……1

2　発掘調査の経過……1

3　文化財保護法に関する諸手続き……4

4　発掘調査の方法……4

5　整理作業の方法……4

6　看板の設置……6

7　工事に伴う墳丘の掘削……6

Ⅱ　位置と環境

1　調査前の飛塚古墳……8

2　地理的環境……8

3　歴史的環境……8

Ⅲ　遺構

1　範囲確認調査……12

2　飛塚古墳の墳丘……12

3　調査区の概要と基本層序……12

4　検出された遺構……15

Ⅳ　遺物

1　概要……19

2　弥生時代の遺物……19

3　飛塚古墳に伴う遺物……20

4　古墳時代の遺物……32

5　中世の遺物……32

Ⅴ　自然科学分析

1　赤色顔料同定の経緯……40

2　赤色顔料同定の結果……40

3　他遺跡との比較……40

Ⅵ　調査のまとめ

1　飛塚古墳とその周辺の変遷……41

2　飛塚古墳の復元……41

3　飛塚古墳の埴輪……44

4　飛塚古墳の位置付け……48

5　今後の課題……51

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡周辺地形図 ……3
第 2 図　調査区・範囲確認調査坑位置図 ……3
第 3 図　調査前墳丘測量図 ……5
第 4 図　調査区グリッド図 ……5
第 5 図　遺跡位置図 ……9
第 6 図　墳丘測量図・調査区平面図 ……13
第 7 図　Ａ区土層断面図 ……14
第 8 図　Ｂ区土層断面図 ……15
第 9 図　ＳＨ５平面・断面図 ……17
第 10 図　ＳＤ４出土状況平面図 ……18
第 11 図　出土遺物実測図（１）……19
第 12 図　家形埴輪模式図 ……21
第 13 図　出土遺物実測図（２）……21
第 14 図　埴輪の復元模式図 ……23
第 15 図　埴輪の口縁部分類 ……23
第 16 図　出土遺物実測図（３）……25
第 17 図　出土遺物実測図（４）……27
第 18 図　出土遺物実測図（５）……28
第 19 図　出土遺物実測図（６）……29
第 20 図　出土遺物実測図（７）……30
第 21 図　出土遺物実測図（８）……31
第 22 図　出土遺物実測図（９）……33
第 23 図　出土遺物実測図（10）……34
第 24 図　墳丘復元図 ……43
第 25 図　伊勢湾沿岸地域の特色ある埴輪群 ……47
第 26 図　伊勢・志摩主要古墳編年表 ……49
第 27 図　北勢における前期末から中期前半の古墳 ……50

表　目　次

第 1 表　遺構一覧表 ……16
第 2 ～ 6 表　出土遺物観察表（１）～（５）……35
第 7 表　蛍光Ｘ線分析結果一覧表 ……40

写　真　図　版　目　次

巻 頭 図 版　飛塚古墳全景
飛塚古墳出土埴輪
表　　紙　飛塚古墳とＡ区 ……53
写真図版 1　伐採前・Ａ区調査前風景 ……55
写真図版 2　草刈り後近景・遠景 ……56
写真図版 3　Ａ区全景 ……57
写真図版 4　Ａ区墳丘裾部（１）……58
写真図版 5　Ａ区墳丘裾部（２）……59
写真図版 6　ＳＤ４古墳周溝 ……60
写真図版 7　埴輪出土状況 ……61
写真図版 8　伐採後風景・Ｂ区調査前風景 ……62
写真図版 9　Ｂ・Ｃ区全景 ……63
写真図版 10　ＳＨ５ ……64
写真図版 11　墳丘土層断面・Ｄ区調査前風景 ……65
写真図版 12　Ｄ区全景 ……66
写真図版 13　出土遺物（１）……67
写真図版 14　出土遺物（２）……68
写真図版 15　出土遺物（３）……69
写真図版 16　出土遺物（４）……70
写真図版 17　出土遺物（５）……71
写真図版 18　出土遺物（６）……72
写真図版 19　出土遺物（７）……73
写真図版 20　出土遺物（８）……74

写　真　目　次

写真 1　現地説明会のようす ……2
写真 2　鵜の里まつりのようす ……2
写真 3　看板設置状況 ……7
写真 4　ｂ地点の基礎工事状況 ……7
写真 5　ｂ地点の橋脚施工後 ……7
写真 6　ａ地点の削平状況 ……7
写真 7　ａ地点の養生状況 ……7
写真 8　高架施工後 ……7
写真 9　剥離した突帯の内側 ……32
写真 10　墳丘裾部北側 ……42
写真 11　墳丘北側のキツネの巣穴 ……42

Ⅰ　前　　言

1　調査に至る経緯

（1）概要

飛塚古墳は三重郡菰野町大強原にある円墳で、海蔵川の支流にあたる竹谷川の北岸に位置する。菰野町で最も大きな古墳のひとつで、築造時期は古墳時代前期末から中期初頭である。

第１次調査では、飛塚古墳の周溝を検出し、墳形や規模が確認された。また、古墳を削平した自然流路内から赤彩を施した家形埴輪のほか、壺形埴輪・円筒埴輪が多数出土し、古墳の築造時期が明確になった。発掘調査と同時に墳丘の測量調査を行った。

第２次調査では、墳丘の南東側を掘削し、墳丘盛土の下で弥生時代後期の竪穴住居１棟を確認した。

第３次調査では、墳丘の西側を掘削し、墳丘南西を巡る周溝の一部を確認した。

（2）範囲確認調査と事前協議

飛塚古墳は、地域のなかで守られてきた古墳である。国道 477 号線の建設路線上に位置していたが、道を高架にして墳丘の上を跨ぐことによって、墳丘を削平せずに道路を完成させる手法が採られた。なお、国道 477 号線建設に伴って、古墳およびその周辺は県有地となっている。

国道 477 号線にかかる飛塚古墳の協議は、四日市建設事務所（以下、「四日市建設」）と三重県埋蔵文化財センター（以下、「当センター」）で平成 17 年度から開始された。平成 18 年３月９日、橋脚建設予定である墳丘南西側（Ｂ・Ｃ区周辺）の範囲確認調査を行い、自然流路が検出され遺物は認められなかったため、橋脚部分については施工可とした。

道路建設予定地（Ａ区）の範囲確認調査は、平成 23 年 10 月 19 日に当センターが実施した。事業予定地のうち 6,400 ㎡に対して調査を行い、調査坑７ヶ所のうち、古墳周辺の２ヶ所から口縁部片などの遺物を確認した。これを受けて、当センターは工事施工にあたって保護措置が必要であると回答し、発掘調査が実施されることとなった。

2　発掘調査の経過

（1）第１～３次調査と工事立会調査の経過

第１次調査（Ａ区）　第１次調査は、平成 24 年６月から８月に、本調査の形で実施された。発掘調査業務（土工監理）を橋本技術株式会社に委託し、あわせて墳丘の測量図を作成した。

第２次調査（Ｂ・Ｃ区）　第１次調査の結果、平成 17 年度範囲確認調査を実施した範囲も遺物が出土する可能性が高くなったことから、一度施工可とした橋脚予定地が工事立会調査の対象となった。

Ｂ・Ｃ区は、平成 25 年８月 28 日・29 日に工事立会調査を行った。その後、実際に橋脚建設工事を行う際に、墳丘削平範囲がさらに広がるという四日市建設の報告を受け、平成 25 年 10 月 22 日にＢ区北西側を拡張する形で調査を実施した。第２次調査は四日市建設による労務提供で、株式会社院南組が土工部門の監理を行った。

なお、墳丘上の木は、平成 25 年夏に工事の進捗に伴って找採された。

第２次調査（Ｄ区）　県道 140 号線（ミルクロード）の両側に建設された橋脚２つをつなぐ工事において、県道沿いに仮設の作業スペースを確保することとなり、平成 26 年４月 15 日に工事立会調査を実施した。第３次調査は四日市建設による労務提供で、株式会社院南組が土工部門の監理を行った。

その他の調査　３次に渡る調査のほか、平成 25 年度には、墳丘周辺で工事立会調査を２回実施しているが、いずれも遺構は確認されず、遺物は出土していない。以下にその概要を記す。

平成 25 年２月 20 日、飛塚古墳の旧看板撤去および新看板の設置を行い、当センターが工事立会調査を行った。この際、現地表面から 60 ㎝程掘削したが、地山は認められなかった。

平成 25 年 11 月 15 日には、墳丘と県道の間にあった電柱を撤去するため、菰野町教育委員会が工事立会調査を実施した。この調査では、県道に沿って攪乱が確認された。

（２）調査日誌

【第１次調査】平成 24 年（2012 年）　Ａ区

6 月 11 日　墳丘南側に掘られた巣穴付近で子狐２匹を目撃。親狐もいたようであるが、調査・工事に伴い転居したようである。

6 月 15 日　調査前風景撮影。

6 月 18 日　重機掘削開始。鎌倉時代～現代の流路を確認。埴輪の口縁部片出土。

6 月 19 日～22 日　開始早々台風襲来、排水作業。

6 月 25 日～28 日　重機掘削再開。周溝想定位置から赤彩された埴輪がまとまって出土。

6 月 29 日　人力掘削開始。家形埴輪片出土。

7 月 4 日　自然流路底で昭和の大規模な木組みの堰を検出。

7 月 5 日～９日　人力掘削・人力掘削と併行して、墳丘の草刈（高さ３ｍの竹藪）。

7 月 11 日　墳丘測量実施。

7 月 17 日～24 日　重機・人力掘削を進める。暑い。

7 月 25 日　古墳の周溝が一部残っていることを確認（ＳＤ４）。家形埴輪片２点目出土。ＳＤ４遺物出土状況図作成。

7 月 26 日　赤塚次郎氏、早野浩二氏来訪。

7 月 27～28 日　清掃、全景写真撮影。

7 月 31 日　四日市市役所にて報道提供。

8 月 1 日　土層断面図作成、平面図デジタル測量。

8 月 4 日　現地説明会、快晴。参加者 133 名。

8 月 10 日～22 日　調査区埋戻し。

【第２次調査】平成 25 年（2013 年）　Ｂ・Ｃ区

8 月 28 日　Ｂ区重機掘削、人力掘削。ＳＤ４・ＳＨ５・ＳＲ８を検出。ＳＨ５の遺物出土状況写真撮影・図化作業（伊藤・相場）。

8 月 29 日　ＳＨ５周辺のピット掘削。Ｃ区ＳＲ８掘削。全景写真撮影。菰野町教委２名来訪。

10 月 22 日　Ｂ区墳丘側削平のため立会。断面図作成。

【第３次調査】平成 26 年（2014 年）　Ｄ区

4 月 15 日　Ｄ区重機掘削、人力掘削。古墳の周溝に相当するＳＤ９を検出。全景写真撮影・図化。

（３）類例調査

平成 26 年３月５日、岡崎市美術博物館所蔵の甲山１号墳・於新造古墳出土埴輪の資料調査を実施した。

（４）発掘調査の普及・公開

・三重県埋蔵文化財センターＨＰにおいて、発掘調査情報を提供した。

・2012 年８月４日、現地説明会を実施、遺構の説明と遺物の展示を行った（参加者 133 名）（写真１）。

・2012 年 10 月 21 日、鵜川原小学校を会場に行われた地域の文化祭「第 21 回鵜の里まつり」で、調査成果のポスター発表および出土遺物の展示を行った（見学者約 800 名）（写真２）。

・2013 年３月９日、「おもろいもん出ましたんやわ@三重 2012」で古墳出土遺物の展示を行った（参加者 33 名）。

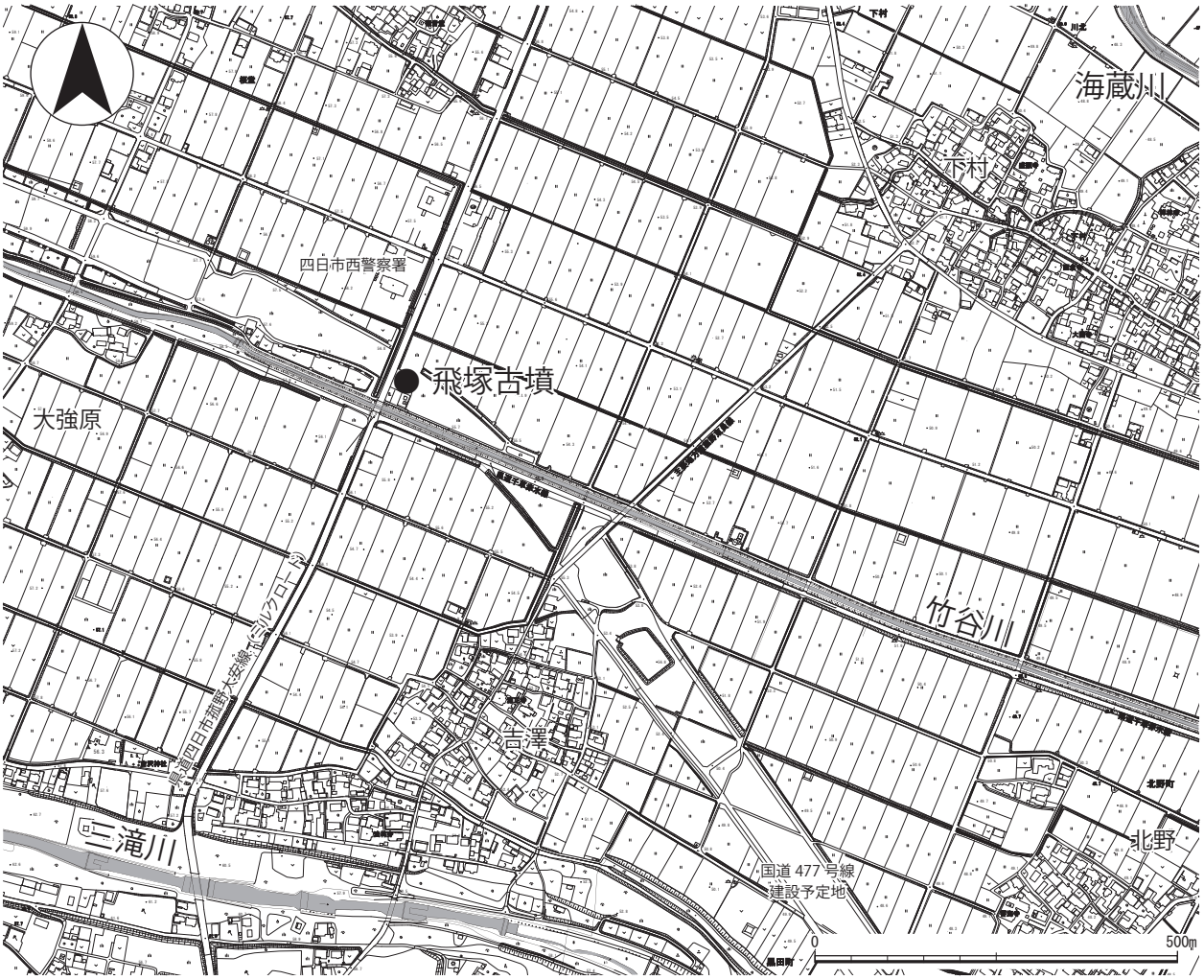
・2013 年５月 18 日、菰野町役場「よもやま歴史教室」で講演・遺物の展示を行った（参加者約 100 名）。

・2013 年に２組、2014 年に２組の小・中学生に夏休み自由研究の対応を行った。

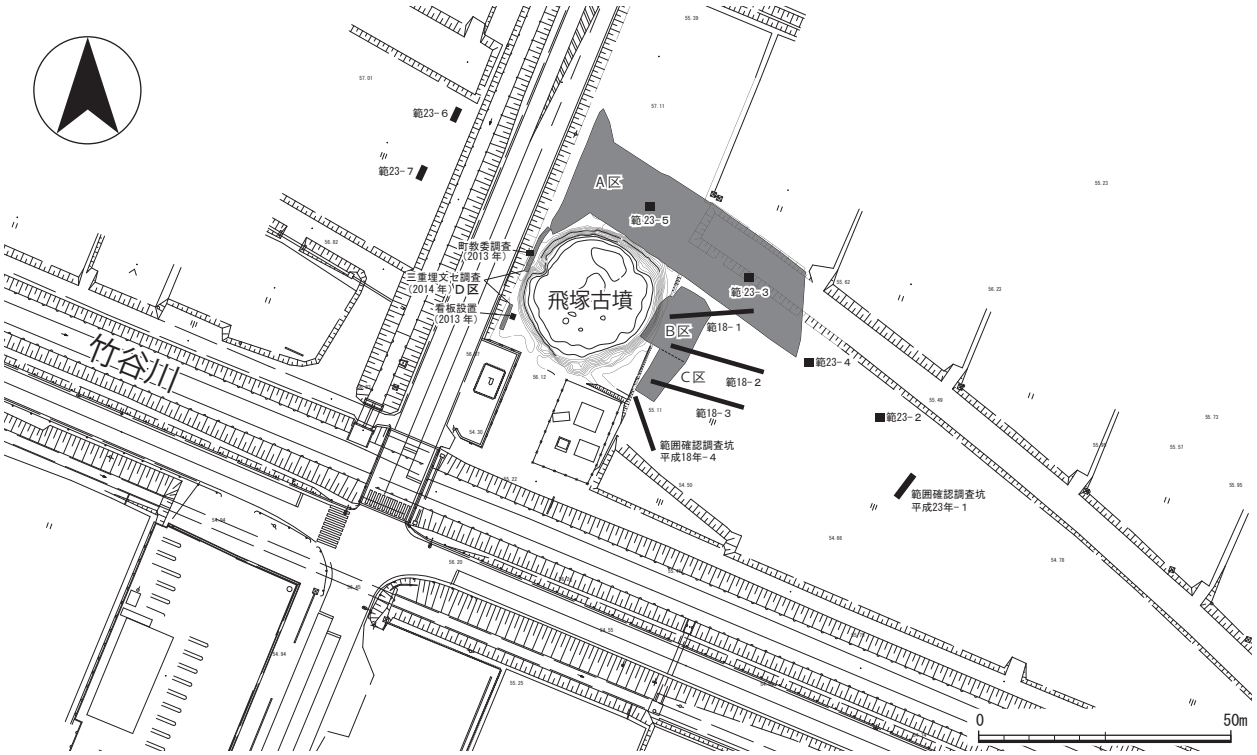
・2014 年３月 15 日、「おもろいもん出ましたんやわ@三重 2013」でＳＨ５出土遺物の展示を行った（参加者 72 名）。

写真１　現地説明会のようす

写真２　鵜の里まつりのようす



第１図　遺跡周辺地形図（1：10,000）



第２図　調査区・範囲確認調査坑位置図（1：1,500）

3　文化財保護法に関する諸手続き

・文化財保護法に基づく三重県埋蔵文化財保護条例第48条第１項：平成23年７月21日付（四建第381号）県教育長あて県知事通知「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」
・文化財保護法第99条第１項：平成24年５月22日付（教埋第50号）県教育長あて県埋文センター所長報告「埋蔵文化財発掘調査の報告について」
・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知
平成24年９月10日付（教委第12－4410号）
四日市西警察署長あて県教育長通知
・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知
平成25年９月25日付（教委第12－4409号）
四日市西警察署長あて県教育長通知
・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知
平成26年６月19日付（教委第12－4414号）
四日市西警察署長あて県教育長通知

4　発掘調査の方法

（１）掘削の方法

第１次調査は、調査区の大部分が自然流路にあたり、現代の遺物が多く混入していたため、流路埋土は重機で除去していった。古墳の周溝が巡っていたと想定される位置からは埴輪が出土したため、この付近を中心に人力掘削を行った。

（２）調査区の設定と略測図

平成24年度の本調査区をＡ区、平成25年度の工事立会調査区をＢ区・Ｃ区、平成26年度の工事立会調査区をＤ区と設定した（第２図）。

第１次調査では、１/40略測図（遺構カード）用の４ｍ×４ｍグリッド単位の杭を現地に打ったが、検出された遺構が溝ばかりであったため、実際には遺構カードは作成せず、１/100略測図を用いた。

調査区内のグリッド分割方法は、Ｘ＝-108,840、Ｙ＝48,820を基準として、４ｍ四方の小地区に分割し、東西方向に１→15、南北方向にａ→ｎを使用した。

第２・３次調査は工事立会調査で、早急な対応が求められたため、グリッド設定は行わず、適宜略図を作成して遺構の把握に努めた。

（３）遺構番号

遺構番号は、遺構の種類に関わらず、１から順に通番で番号を付与し、番号の前に遺構の性格を表すＳＤなどの略称を冠した。当センターでは、ピットはグリッドごとに通し番号をつけることとしているが、Ａ区ではピットは検出されなかった。

工事立会調査のＢ・Ｃ・Ｄ区はグリッドを設定しなかったため、遺物が出たピットについては、遺構番号と一連で番号を付与している（第１表）。

（４）実測・測量

調査区の土層断面図は１/20縮尺、遺物出土状況図は１/10縮尺で手描き実測した。調査区の平面図は、橋本技術株式会社による電子平板で作成した。

墳丘の草刈りおよび測量は、発掘調査業務委託の一環として、橋本技術株式会社が行った。墳丘測量面積は865㎡である。測量は電子平板で行い、調査区平面図とともに納品された。測量成果は図面アルバムに添付して収蔵した。

（５）遺構写真撮影

第１次調査では、調査区全景写真は６×７判で撮影した。調査の進捗状況を中心とした細かな記録は35㎜判を撮影し、適宜デジタルカメラも使用した。第２次調査は工事立会調査であったため、デジタルカメラでのみ撮影されたデータが複数枚存在する（写真図版11など）。第３次調査では、35㎜判とデジタルカメラを併用して撮影した。

5　整理作業の方法

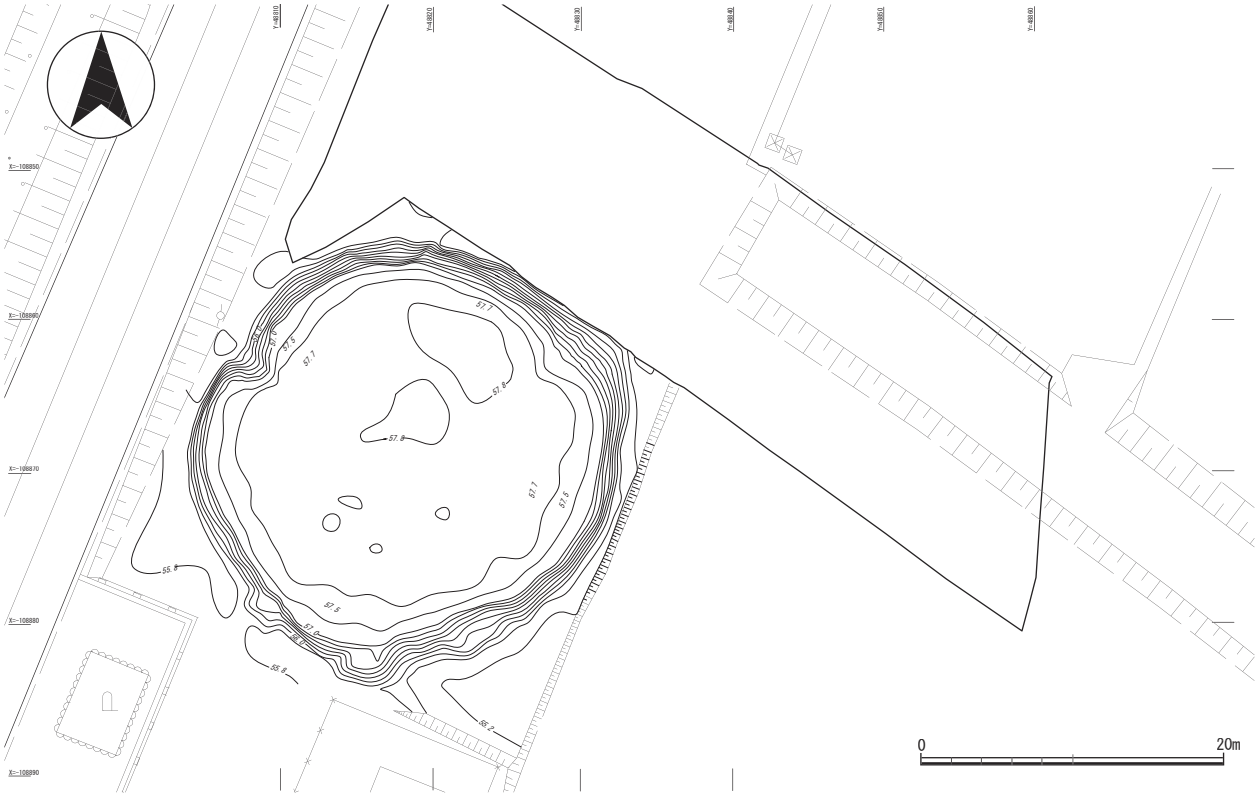
（１）出土遺物

調査担当者が、報告書掲載遺物（Ａ遺物）と未掲載遺物（Ｂ遺物）に区分した。

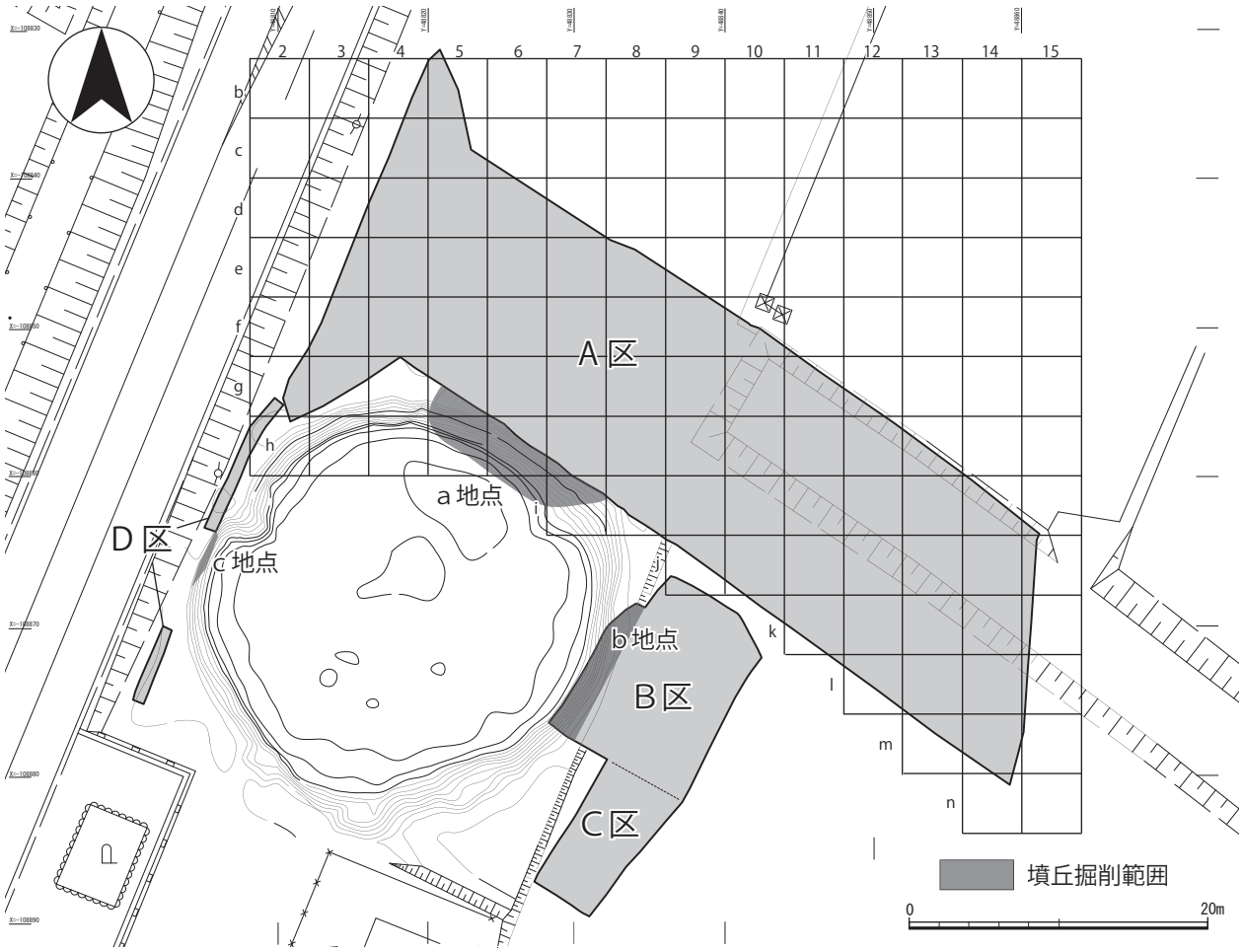
円筒埴輪の胴部片については、突帯（もしくは突帯の剥離痕跡）が明瞭に残る個体はすべて実測し報告書に掲載した。突帯のみられない胴部片や、剥離した突帯は、実測図を掲載したもの以外にも複数存在し、これらはＢ遺物とした。

（２）遺物写真撮影

報告書掲載遺物から任意に選択し、デジタルカメラ



第３図　調査前墳丘測量図（1：500）



第４図　調査区グリッド図（1：500）

（ＮｉｃｏｎＤ300）で撮影を行い、デジタルデータで入稿した。巻頭図版の遺物集合写真は、４×５判とデジタル一眼レフカメラで撮影した。

6　看板の設置

（１）経緯

飛塚古墳には既に看板が設置されていたが、老朽化し倒壊していたため、調査と同一の事業で旧看板の撤去および新看板の設置を行った。

看板の作成・設置は、３社以上から参考見積もりを取った上、一般競争入札（オープンカウンタ）で株式会社アイブレーンに委託した。設置に伴う文書処理は、四日市建設と協議の上、当センターが行い、設置工事に伴う掘削は当センターの工事立会調査とした。設置日は平成25年２月20日である。

（２）文化財保護法・道路占有許可届に関する手続

・道路占有許可申請書
　平成24年12月28日付（教埋380号）埋文センター所長から四日市建設事務所長あて
　「飛塚古墳看板設置に伴う道路占有許可申請書」
・文化財保護法に基づく三重県埋蔵文化財保護条例第48条第１項：平成25年１月３日付（教埋第422号）県教育長あて県教育長通知「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」
・道路承認工事・着手届
　平成25年１月24日付、埋文センター所長から県知事あて「道路承認工事着手届」
　平成25年２月20日付、埋文センター所長から県知事あて「道路承認工事完成届」

（３）看板の構造

作図　四日市建設と協議の上、作図とデザインは当センターが行い、データは調査日誌に添付して収蔵した。色彩の経年劣化を考慮し、赤色は使用せずすべてモノクロで作成した。

構造と素材　看板のパネルと支柱は金具で取り付けているため、パネルが破損した際は、パネルのみ取り替えることが可能である。

パネルはアルミ板（横120㎝×縦90㎝×厚さ２㎜）である。印字および貼り付けは、大型インクジェットプリンター出力貼り＋ＵＶカットフィルム貼りである。支柱はアルミ材で、長さは230㎝である。

看板取付金具は高リブ式（４本リブ）および標識用金具８セットで、埋め込み材料は生コンクリート（間口40㎝×深さ50㎝）巻きである。

（４）道路占有許可申請書の更新

平成24年12月28日付文書で、道路占有許可申請書を提出した。この文書は５年で期限が切れるため、平成29年以降、５年毎に、四日市建設から当センターに更新手続きの文書が届く予定である。更新手続きは、ハガキの返送によって行う必要がある。

7　工事に伴う墳丘の掘削

（１）経緯

工事計画当初、墳丘は削平されずに残る方針であったが、作業スペース確保のため、工事中に３ヶ所が削平された（第４図ａ～ｃ地点）。

Ｂ区側（同ｂ地点）は、第２次調査において工事立会調査を行った。この際、墳丘盛土を削平したことから、土層断面図を作成し報告書に掲載した。Ｄ区側（同ｃ地点）は、削平範囲が表土内におさまっており、図化は行っていない。

Ａ区側（同ａ地点）は、平成25年８月22日に工事の進入路施工に伴い、東西約12ｍ、高さ約２ｍが掘削され、墳丘の盛土が露出した。この範囲は、当センターに事前連絡がないまま削平されたため、工事立会調査を行うことができなかった。８月28日に当センター職員が破壊の事実を確認し、同日、四日市建設の担当者に状況を通知した。８月29日、当センターと四日市建設の担当者、現場工事の受注業者で現地協議を行った。これを受けて、９月３日に県文化財保護課によるヒアリングが実施され、四日市建設と県教育委員会で文書を取り交わし、以後このような事態が起こらないよう対応の確認を行った。

（２）問題点

ａ地点削平における問題点は、文化財保護協議のなかで実施されてきた「古墳の保護」という内容が、事業部局のなかで周知徹底されていなかった点、受託業者への周知が徹底されていなかった点である。

（３）墳丘の養生

露出した墳丘盛土は非常に脆弱で、県道に面していたため法面の養生を行った。使用材料は養生シート（ダブルロンケットアナコンダ）で、素材の中に種実が織り込まれている（写真７）。

養生工の作業日は平成 25 年９月 10 日・13 日で、センター職員立会いのもと行われた。

（４）法的措置

・平成 25 年９月 19 日付（四建第 559 号）県教育長あて三重県四日市建設事務所所長報告
「一般国道 477 号四日市湯の山道路・道路改良事業における埋蔵文化財の取り扱いについて」

・平成 25 年 10 月３日付（教委 12-378 号）県土整備部道路建設課長あて県教育長通知「埋蔵文化財保護にかかる取扱いについて」

写真３　看板設置状況（北西から）

写真６　ａ地点の削平状況（東から）

写真４　ｂ地点の基礎工事状況（北東から）

写真７　ａ地点の養生状況（東から）

写真５　ｂ地点の橋脚施工後（北東から）

写真８　高架施工後（北東から）

Ⅱ　位置と環境

1　調査前の飛塚古墳

飛塚古墳（1）は三重郡菰野町大字大強原に所在する。海蔵川の支流にあたる竹谷川に隣接するこの地点は、大強原地区と吉澤地区の境界となっている。

『菰野町史』には、古墳時代後期に築造された直径31ｍの円墳で、独立墳としては最も大きな古墳の１つであると記載される。別名は遠見塚・柳ヶ塚・首人塚で、のろし台や物見台に使用されたことが伝わっている。

墳丘　水田面からの比高差は約2.7ｍで、平面形は約20ｍ四方の略方形を呈している。第１次調査時点では墳丘測量図は無く、木と笹竹が覆い茂る状態で、墳頂部の形状を見ることはできなかった。約50年前は草刈り等の維持管理がなされていたようで、墳頂部まで登ることができたとされる。墳丘の南側斜面には小規模なテラス状の平坦面が３ヶ所認められるが、これは狐の巣穴で、墳丘盛土が掘り込まれ、穴の中の土が外に排出されてテラス状を呈している。

出土遺物　既往の調査は無いが、『菰野町史』や『菰野町遺跡地図』によると、明治末頃に墳頂部に１本の松が生えており、発掘したところ、鉄刀・銅鏡・勾玉・管玉などが出土したとされる。なお、これら出土遺物の現在の所在はわかっていない。

2　地理的環境

菰野町は、南北に長い三重県の北部にあり、この地域は旧伊勢国の北部にあたることから北勢地域と呼称されることが多い。西は鈴鹿山脈を分水領として滋賀県と接し、北はいなべ市、西は四日市市に隣接する。土地の利用は、鈴鹿山脈東麓の山岳地と、扇状地状の緩やかな丘陵地と、周囲を丘陵地に囲まれた平野部に大別される。広く平坦な窪地は、町内を流れる三滝川・朝明川の砂礫が流れ込んで形成された氾濫原である。朝明川・三滝川の間を海蔵川が流れており、いずれも四日市市を経由して伊勢湾に注いでいる。

今回調査した飛塚古墳は、竹谷川の北岸に立地し、海抜は55ｍである。古墳自体は沖積層の氾濫平野に立地し、周囲の居住域は中位段丘や三滝川の自然堤防上に形成される。

竹谷川は海蔵川の支流で、全長7,450ｍである。竹谷川の起点は菰野町音羽と潤田の接点付近で、飛塚古墳のある大強原と吉澤の境界を通り、四日市市赤坂付近で海蔵川に合流する。その流れは昭和の耕地整理事業によって整備されており、現在は直線的なものとなっているが、整備前は古墳周辺を蛇行していたことが推測される。

3　歴史的環境

旧石器時代　菰野町域および海蔵川中流域の御館野低台地には、旧石器時代の遺跡は認められない。菰野町の山麓部や朝明川左岸では多数の石器が見つかっており、その周辺に遺跡がある可能性が高い。

縄文時代　菰野町域では、石器や土器などの遺物が、小高い丘陵部で採集される。東北山Ａ・Ｂ遺跡（2）・高原遺跡（3）・前野遺跡・西江野遺跡では土器や石器が採集される。六谷遺跡（4）・大久保遺跡（5）では、調査によって縄文時代後期の遺物が採集されている。鈴山遺跡（6）は石鏃・剥片が濃密に散布し、後期～晩期頃の集落と推測されている。

朝明川流域では、中野山遺跡（7）で早期の煙道付炉穴や集石炉が多数見つかっており、やや時期は開くものの中期末の竪穴住居や土坑も検出されている。小牧南遺跡（8）では、中期末の掘立柱建物・竪穴住居や埋甕が見つかっている。

四日市市域の海蔵川中流域では、大池遺跡（9）から有茎尖頭器と石鏃が、落河原遺跡（10）から凹石が出土しているが、明確な集落跡は認められない。

弥生時代　六谷遺跡から中期の土器片・石斧が出土している。尾高高原に位置する夏至花遺跡（11）では後期の土器片が採集されている。

三滝川中流域では、永井遺跡（12）で前期から後期まで継続して集落が営まれ、多量の遺物が出土している。永井遺跡と隣接する上畑遺跡（13）では後期の住居７棟が確認される。

第５図　遺跡位置図（1：60,000）〔国土地理院「御在所」「桑名」「四日市」「亀山」1：50,000 より〕

朝明川左岸では北山城跡（14）、小牧北遺跡（15）、中野山遺跡で後期の竪穴住居・掘立柱建物方形周溝墓が見つかり、この集落は古墳時代初頭まで継続する。

古墳時代　朝明川右岸の小牧南遺跡で、初頭から前期にかけた竪穴住居・掘立柱建物が見つかっている。

菰野町域では、古墳時代の集落は現時点で見つかっておらず、飛塚古墳が築造された時期の当地の様相は不明瞭である。竹谷川流域、飛塚古墳の上流に位置する大久保遺跡の範囲確認調査では、周囲から流れ込んだとみられる弥生時代から古墳時代初頭の壺片が見つかっており、飛塚古墳よりさらに上流部に当該期の集落があった可能性がある。

中期には、朝明川左岸台地上の北山Ｃ遺跡（16）・広古墳群で５世紀代の方墳が複数築造される。

後期には当該地にも多くの後期古墳が見られるが、その多くは朝明川流域に集中し、菰野町域では58基中57基が上流域丘陵部に集中する。なお、菰野町では、飛塚古墳を除いたすべての古墳が６世紀末から７世紀前半の築造とされ、墳形はすべて円墳で、前方後円墳は存在しない。また、古墳群に対応し得るような集落跡の発掘調査事例はない。

朝明川上流域の河岸段丘上には、横穴式石室を用いた後期古墳が、10基前後の群集墳として存在する。姫塚古墳（17）・耳塚古墳（18）、火塚古墳（19）があるが、これらは既に破壊されており墳丘の一部を残すのみで詳細は不明である。さらに上流域には、西畑古墳（20）・一色古墳群（21）・江平高塚古墳群（22）・長者屋敷古墳（23）がある。尾高高原には、黒石原古墳群（24）・三岡高塚古墳群（25）がある。高塚古墳群の円墳は直径が10ｍから36ｍまで大小様々で、横穴式石室が確認される。朝明川右岸には、奥郷浦古墳群（26）・奥郷七ツ塚古墳群（27）といった群集墳のほか、円墳の竹成一ッ塚古墳（28）がみられる。奥郷浦古墳群は昭和29年に発掘調査が行われ、金環や須恵器などが出土しており、なかでも奥郷浦１号墳からミニチュアの炊飯具が出土したことが特筆される。

海蔵川流域には、飛塚古墳と同じ大強原地区に狐塚古墳（29）が所在する。直径11ｍの小円墳で、「御飯さん山」と呼ばれており、未調査であるが後期古墳とされる。若狭屋敷遺跡（30）は、古墳のような高まりが認められ、付近には数基の古墳があったと伝わっているが、詳細は不明である。

朝明川中流域にあたる四日市市では、段丘上に横穴式石室を伴う古墳群が点在する。筆ヶ崎古墳群（31）では、６世紀末から７世紀前半の古墳群と集落が確認され、製鉄に伴う鍛冶炉や鉄滓が見つかっている。そのほか、左岸に若宮古墳群（32）・門ノ上古墳群（33）・居林古墳群（14）、右岸に鎧塚古墳（34）・高山古墳（35）・大沢古墳（36）・持光寺山古墳群（37）・鶯谷古墳群（38）がみられる。公事出遺跡・公事出古墳群（39）は、７世紀半ばから後半の横穴式石室や竪穴住居、掘立柱建物などが見つかっている。

同じく四日市市域にあたる海蔵川中流域は、古墳時代後期の遺跡が数多く確認され、北勢地域における重要な地域のひとつである。集落跡には御館野遺跡（40）・貝野遺跡（41）、落川原遺跡などがある。御館野遺跡は７世紀前後の竪穴住居が１棟検出される。貝野遺跡は７世紀から８世紀にかけての集落で、竪穴住居と掘立柱建物が多数検出される。落河原遺跡では土器焼成坑と思われる土坑が確認されている。群集墳も集中し、御池古墳群（42）・地蔵堀古墳（43）・藤池古墳群（44）・山添古墳（45）・狐塚古墳群（46）・二ッ塚古墳群（47）・大日山古墳群（48）など、いずれも横穴式石室を伴うものである。なお、御池古墳群には御館大塚と呼ばれる前方後円墳と十数基の円墳があったと伝わっている。

古代　平安時代頃の地名が記された『倭名類聚抄』によると、四日市市西部と菰野町は朝明郡と三重郡の領域とされ、このうち菰野町には田光郷と杖部郷を含む朝明郡と、刑部郷と葦田郷を含む三重郡が認められる。久留倍官衙遺跡は７世紀から８世紀の正庁・正倉を備えていることから朝明官衙に比定される。三重郡の郡衙は四日市市采女町、もしくは海蔵川中流域の西坂部周辺が推定される。飛塚古墳は三重郡内に位置し、刑部郷と葦田郷の境界にあたる。

海蔵川流域の椋ノ木遺跡（49）からは、７世紀の竪穴住居が発見される。

朝明川上流域の下江平遺跡（50）は、奈良時代前期・中世の集落跡で、８世紀前半の竪穴住居からは墨書土器「五十戸口」「倭家」「財・交」「中」が出

土し、朝明郡田光郷に関わる里長クラスの在地豪族層の居宅である可能性が指摘される。六谷遺跡は奈良時代前半・中世の集落跡で、竪穴住居・掘立柱建物群からは、畿内の要素を持つ暗文土師器や、近江の影響が認められる土師器長胴甕など、他地域との交流が伺われる遺物が出土している。朝明川中流域では、中野山遺跡・筆ヶ崎古墳群で飛鳥・奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物が多数見つかっており、鉄滓などの鍛冶関連遺物が出土している。

寺院跡は、三滝川流域に智積廃寺（51）がある。時期は奈良時代で、東西約 150 m×南北約 170 mの範囲に金堂・講堂・僧坊・南門跡が検出される。

窯跡は、海蔵川流域に飛鳥時代の北浦古窯跡群（52）、海蔵川流域に奈良時代の岡山古窯跡群（53）が確認され、北浦古窯跡は智積廃寺と供給関係にあった可能性が指摘される。

平安時代後期～中・近世　朝明郡は寛仁元年（1017）、三重郡は応和２年（962）に伊勢神宮の神郡として寄進されており、神領の御厨・御薗が数多くみられ、菰野町域には潤田をはじめ御厨 11ヶ所、御園１ヶ所が認められる。調査例は少なく集落の様相は不明瞭であるが、飛塚古墳の所在する大強原地区は伊勢神宮領の大強原御厨に比定され、『建久三年皇太神宮年中行事』によれば内宮の別宮小朝熊神社の饗料所とされる。大強原御厨は、神宮領としては天正 11 年（1583）頃まで存続したことが推測される。

海蔵川中流域の落河原遺跡では、灰釉陶器・石帯・砥石など見つかり、郡衙や郷との関わりが指摘される。同じ海蔵川流域の土丹遺跡（51）では、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている。

朝明川上流域では六谷遺跡、下江平遺跡で鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物が確認されている。下江平遺跡では、平安時代後半から鎌倉時代にかけての掘立柱建物や土坑が検出される。三滝川流域では、大久保遺跡で鎌倉時代後半から室町時代にかけての掘立柱建物や井戸が見つかっている。なお、飛塚古墳の１㎞西には鎌倉時代の円墳とされる宿禰塚遺跡（54）があるが、詳細は不明である。

杉谷地区には、県下屈指の中世墓群である杉谷中世墓（55）がある。約 200 基の五輪塔や石仏があり、蔵骨器には瀬戸窯産四耳壺をはじめ瀬戸・美濃・常滑など 12 世紀末～16 世紀前半の陶器類が用いられているが、大部分は 13～14 世紀のものである。観音寺跡（56）は、対岸に位置する杉谷中世墓との関連が考えられている。また、竹成地区の大日堂には、文明 11 年（1479）と文明 13 年（1481）の胎内墨書がみられる木彫大日如来坐像が２軀残されている。

中世城館　中世城館は、丘陵部には空濠や土塁が残る田光城跡（57）、杉谷城跡（58）、千種城跡（59）、向城跡（60）、金ヶ原城跡（61）がある。このうち、千種城跡、向城跡、金ヶ原城跡は非常に近い位置に関係にあり、その関係性が指摘される。

沖積地には、菰野町中心部周辺に宿野城跡（62）・福村館跡（63）・宿野西城跡（64）・力尾城跡（65）がある。力尾城跡は天正年間頃に菰野城と呼ばれ、織田信雄の部下にあたる土方雄久が天正 11 年から同 18 年まで城主であったことが文献から推測されている。菰野城跡（66）は、調査によって 19 世紀後半の石垣が検出されたことから、時期は近世である。

海蔵川～三滝川の間の段丘上には、平尾城跡（67）・百合谷城跡（68）・坂部城跡（69）・高角城跡（70）・曽井城跡（71）がある。

朝明川中流域には、河川の南岸に近世八風道が通り、段丘上に北山城跡をはじめ中上城跡（72）・善正寺城跡（73）・市場城跡（74）・保々西城（75）・中野城跡（76）・源治山城跡（77）が点在する。

〔参考文献〕

・菰野町教育委員会 1987『菰野町史』（上巻）
・菰野町教育委員会 1988『下江平遺跡発掘調査報告Ⅱ』
・菰野町教育委員会 1990『菰野町遺跡地図』
・菰野町教育委員会 2003『菰野城跡第２次発掘調査報告』
・四日市市 1988『四日市市史』第２巻　史料編　考古Ⅰ
・四日市市 1993『四日市市史』第３巻　史料編　考古Ⅱ
・四日市市 1995『四日市市史』第 16 巻　通史編古代・中世
・平松令三監修 1983『三重県の地名』日本歴史地名体系 24 平凡社
・三重県 2005『三重県史』資料編考古１
・三重県 2008『三重県史』資料編考古２
・三重県教育委員会 1983『三重県埋蔵文化財年報 13　昭和 56 年度』
・三重県埋蔵文化財センター2013『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』
・三重県埋蔵文化財センター2014『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』
・三重県埋蔵文化財センター2014『椋ノ木遺跡（第２次）現地説明会資料』

Ⅲ　遺　　構

1　範囲確認調査

今回の調査にかかる範囲確認調査は、平成19年度と平成23年度に実施された。（第２図）

平成19年度の調査では、橋脚建設予定地に範囲確認調査坑を３本設定し、自然流路が検出された。

平成23年度の調査では、道路建設予定地に範囲確認調査坑を７箇所設定した。調査坑１・２では、地表下約60～70㎝に黒色土（黒ボク土）が堆積し、その下には褐色系粘土層が見られた。調査坑３・５は第１次調査区の範囲内で、溝埋土上層からは中世と思われる土師器片が出土した。県道140号線（通称ミルクロード）を挟んで西側の調査坑６・７からは、黒色粘土層内から平安時代末期の山茶碗片が出土したものの、全体として沼状を呈する地であることが確認された。

2　飛塚古墳の墳丘

墳形（第６図）　今回検出した周溝から、墳丘径は35.0ｍと考えられる。墳丘の形はおそらく円墳で、その復元については第Ⅵ章で詳述する。

Ｂ区の墳丘直下で検出した細長い溝は近現代のものであるため、墳丘裾部は少なくとも近現代の段階で垂直に近い状態まで掘削されたことがわかる。

墳丘の層序（第８図）　Ａ区では、墳丘の掘削が表土の範囲内におさまったため、盛土の土層断面を確認することはできなかった。Ｂ区では、墳丘の南東斜面を一部削平したため、盛土と地山の関係が明らかになった。

地山はにぶい黄褐色シルト質細砂（第８図27層）で、その上に弥生時代の遺構面である暗褐色シルト層（同24層）と、いわゆる黒ボク土の黒色土（同20層）が堆積する。竪穴住居ＳＨ５を覆う黒ボク土（同14・20層）の厚みは約50㎝で、この層の下半部10㎝程度は古墳時代の遺構検出面と考えられる。

墳丘の盛土は、弥生時代～古墳時代の地山にあたる暗褐色シルト質細砂と黒ボク土を交互に用いている（同16～20層）。最も基盤にあたる黒ボク土（同20層）の上半40㎝程度は人工的な盛土と考えられるが、古墳時代の地山と同一の土を用いているため、地山と盛土の境界を区別することはできなかった。墳丘盛土の最上層（同15層）はオリーブ褐色シルトで、その上に近現代の表土が堆積する。

墳丘の高さ　現在見てとれる墳丘の標高は、Ｂ区の地表面が54.8ｍで、墳頂の平坦面が約57.7ｍで、比高差は2.9ｍである。

Ｂ区土層断面で確認された墳丘盛土の高さは1.4ｍである。古墳時代の遺構検出面の標高（54.6ｍ）と、現況の墳頂の標高（57.8ｍ）の比高差は3.2ｍであるが、土層断面で確認された通り近現代の表土が約0.4ｍ堆積していると仮定すると、現在残っている墳丘盛土の高さは約2.8ｍ（＝推定標高57.4ｍ）である。

外部施設　周溝は幅2.2ｍである。詳細はＳＤ４の項目で後述する。現地表面において埴輪片は採集されず、埴輪配列の復元は不可能であった。

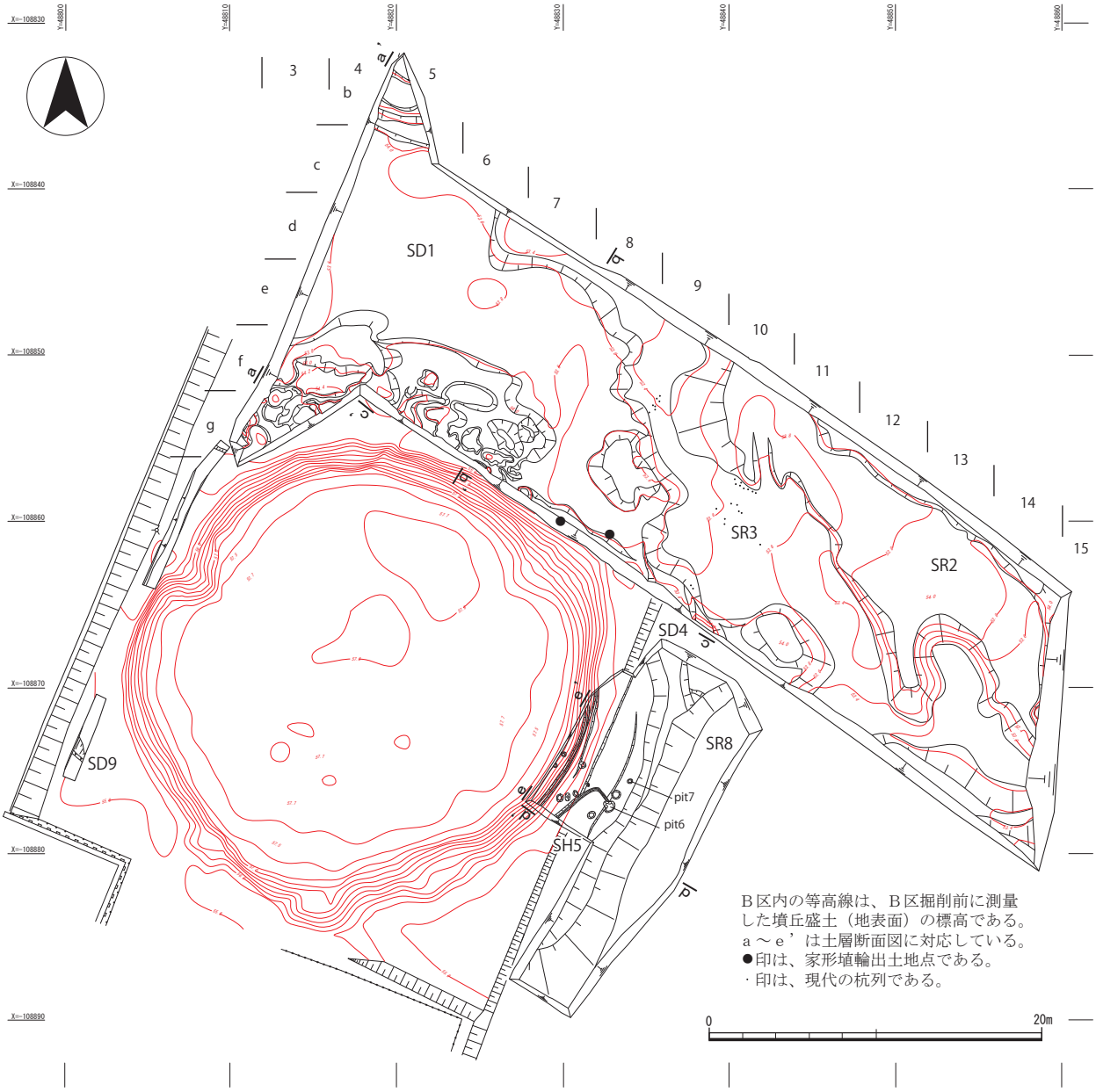
葺石は現地表面では見られず、墳丘下をピンポールで確認しても石状のものには当たらなかった。また、調査区内でも転落した川原石などは認められなかったことから、飛塚古墳には葺石は伴わなかった可能性が高い。

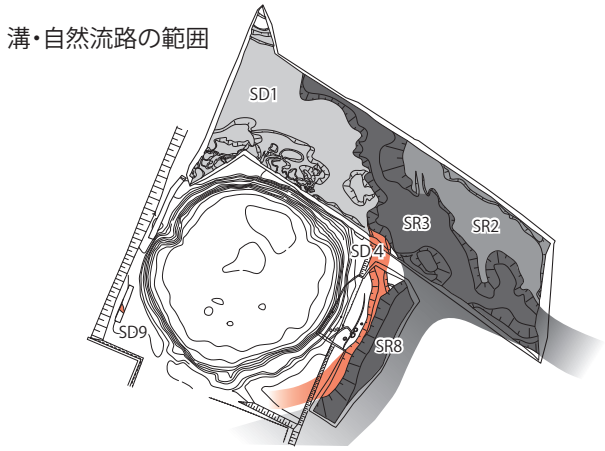
3　調査区の概要と基本層序

Ａ区の概要　調査地は、用地買収前は水田であった。発掘調査によって水田以前は自然流路であったことが確認され、昭和のほ場整備で耕地化されたものと考えられる。調査区のほぼ全面が鎌倉時代から現代の自然流路域であった。古墳の周溝は、調査区内で全長１ｍ程度残存していた。

Ｂ区・Ｃ区の概要　北側がＢ区、南側がＣ区で、２つの調査区の間で土層断面図（ｄ－ｄ’）を作成したのち、セクションを取り払って平面図を作成した。竪穴住居ＳＨ５・古墳周溝ＳＤ４を検出した。飛塚古墳墳丘を削平する複数の小規模な溝の時期は、近現代と考えられる。

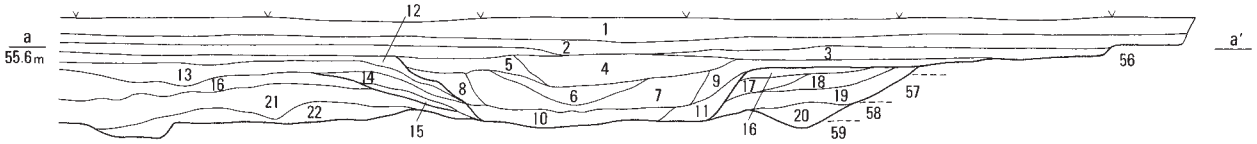
Ｄ区の概要　墳丘の南西を巡る周溝ＳＤ９を検出し



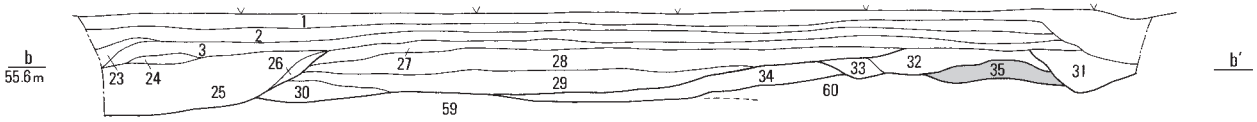


第６図　墳丘測量図・調査区平面図（1：400）

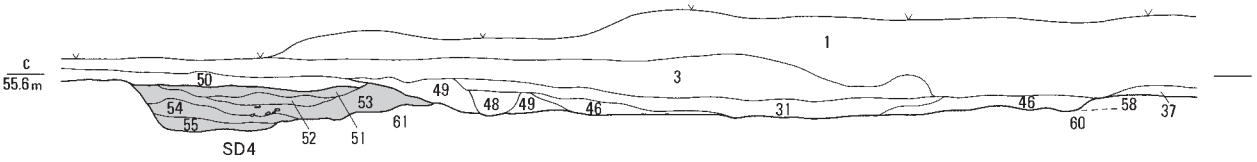
Ａ区　西壁土層断面

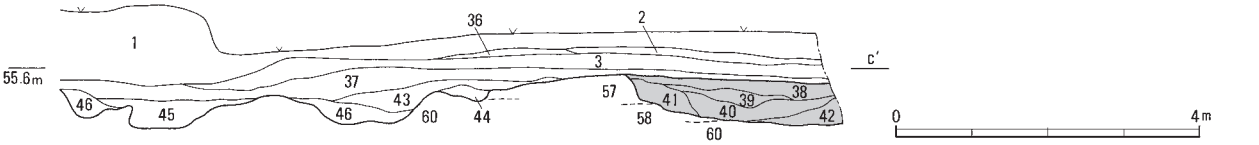


Ａ区　南北土層断面

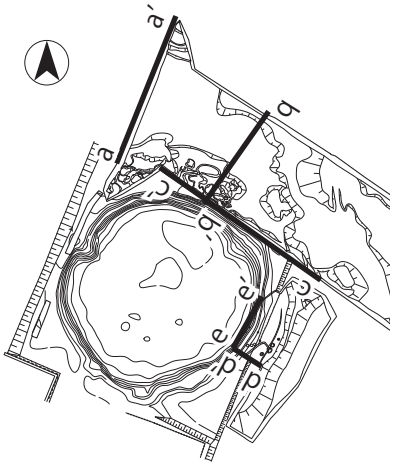


Ａ区　東壁土層断面





1 2.5Y5/1黄灰色シルト質土（しまりなし）　〔現代耕作土〕
2 5Y4/1　灰色シルト質土（橙色砂ブロック7%含む）〔床土〕
3 7.5Y5/1灰色砂質土
4 2.5Y4/3にぶい黄褐色シルト質土
5 10YR5/2灰黄褐色土
6 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂混じりシルト
7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土
8 10YR4/2灰黄褐色土
9 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質土
10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土
11 10YR4/2灰黄褐色シルト
〔ＳＲ３〕
12 10YR5/2灰黄褐色シルト質土
13 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
14 10YR4/1褐灰色土
15 10YR2/1黒色土（しまりあり）
16 10YR5/2灰黄褐色シルト質土
17 10YR5/1褐灰色砂質土
18 7.5YR4/2灰褐色シルト
19 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
20 10YR3/1黒褐色粘質土
21 10YR3/1黒褐色粘質土
22 10YR2/1黒色粘質土（中粒砂混じり）
23 5Y4/1　灰色粘質土（ベースブロック30%含む）
24 5Y5/1　灰色粘質土
25 5Y3/2　オリーブ黒色粘土
26 10YR5/2灰黄褐色砂質土（礫多く含む）
〔ＳＲ３〕
27 10YR6/4にぶい黄橙色土
28 10YR4/1褐灰色土（やや砂質）
29 10YR4/1褐灰色粘土
30 10YR4/2灰黄褐色砂質土（礫多く含む）
〔ＳＲ２〕
31 5Y5/2　灰オリーブ色土
32 5Y4/1　灰色土（しまりあり）
33 5Y3/1　オリーブ黒色土
34 2.5Y5/4黄褐色細砂（埴輪片多く出土）
〔ＳＤ１〕
35 5Y5/2　灰オリーブ色砂質土（ベースブロック40%）〔周溝埋土の一部か〕
36 5Y5/2　灰オリーブ色土
37 10YR5/2灰黄褐色シルト質土（極粗粒砂混じり）
38 10YR4/1褐灰色土（灰白色細粒砂混じり）
39 10YR3/1黒褐色粘質土
40 10YR2/1黒色粘土（埴輪片多く出土）
41 10YR4/1褐灰色粘質土（ベースブロック40%）
42 10YR4/1褐灰色細質土（ベースブロック7%）
〔ＳＤ１〕
周溝埋土の一部か
43 2.5Y6/2灰黄色砂質土
44 2.5Y5/1黄灰色砂質土
45 5Y6/1　灰色シルト質土
46 2.5Y7/3浅黄色細粒砂
47 5Y6/1　灰色シルト質土
48 2.5Y7/3浅黄色細粒砂
49 5Y5/3　灰オリーブ色シルト質土
〔ＳＤ１〕
風倒木
50 5Y5/2　灰オリーブ色シルト
51 2.5Y6/1黄灰色粘質土
52 2.5Y4/1黄灰色粘質土
53 2.5Y3/1黒褐色土（やや粘性）
54 10YR4/1褐灰色土
55 10YR5/3にぶい黄褐色土
（細粒砂・礫やや含む）
〔ＳＤ４〕
周溝
56 2.5Y6/1黄灰色シルト質土
57 2.5Y6/6明黄褐色細粒砂
58 10YR6/8明黄褐色極細粒砂
59 2.5Y5/6黄褐色細粒砂
（細粒砂多く含む）
60 5Y7/2　灰白色細粒砂
61 5Y6/2　灰オリーブ色砂質土
〔ベース〕



第７図　Ａ区土層断面図（1：100）

た。現地表面から1.06ｍで地山に達するが、墳丘の盛土は既に削平されていた。

基本層序　まず現代耕作土が約20㎝あり、その下に耕作に伴う床土が５～20㎝堆積する。調査区のほとんどが自然流路域であるが、Ａ区北端は本来のベースの高さが残る。ベースは、検出面はにぶい黄灰～黄褐色細砂シルト（第７図56層）で、現地表面から約80㎝下で明黄褐色細粒砂（同57層）となり、自然流路底で灰白色細粒砂（同60層）となる。

4　検出された遺構

（１）竪穴住居

ＳＨ５（第９図）　Ｂ区で検出した竪穴住居で、調査区内では北端隅を確認した。時期は弥生時代後期後半である。重複関係はＳＨ５→飛塚古墳墳丘・飛塚古墳周溝ＳＤ４→ＳＲ８で、竪穴住居が埋没したのち飛塚古墳が築造されている。

住居は、長さ3.4ｍ、幅2.2ｍ、深さ0.24ｍが残存するが、正確な規模は不明で、時期的に正方形を呈するプランと考えられる。埋土はにぶい黄褐色シルトで、わずかながら黄褐色土の貼床を確認した。壁周溝[(1)]は幅10～30㎝で、住居の隅では幅が狭く、外側が垂直に立ち上がる。主柱穴は長径50㎝、短径44㎝、深さは40㎝で、北側にテラス状の段がある。

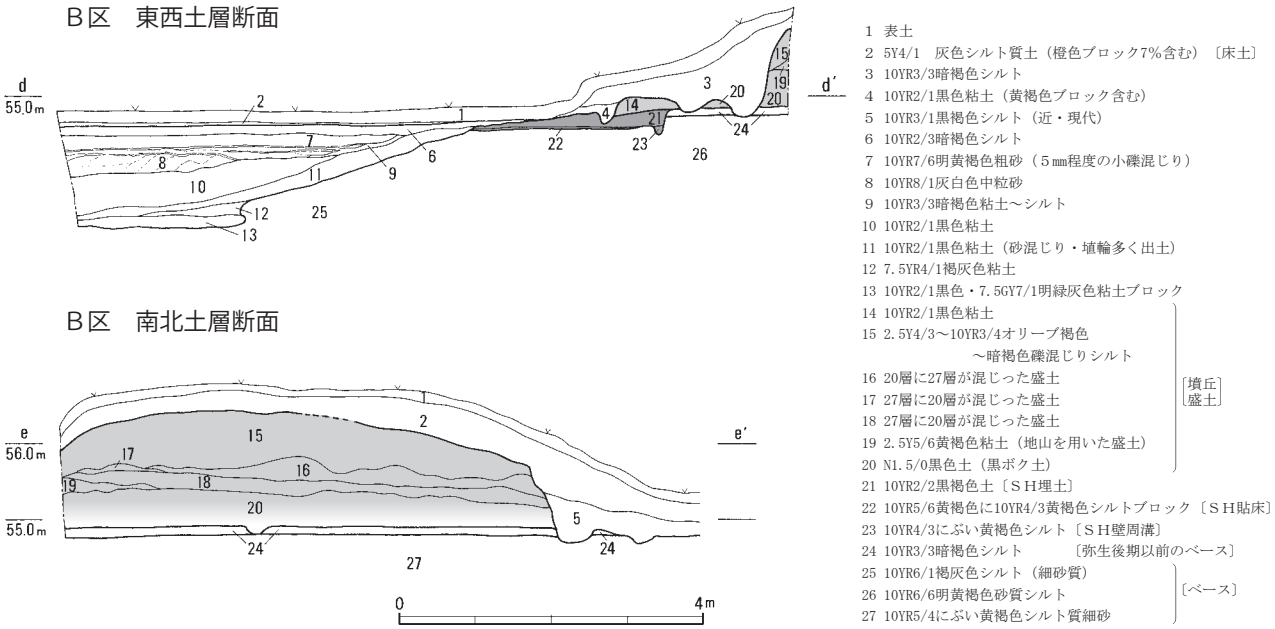
遺物は、住居の床面直上から長脚高坏坏部、ワイングラス形高坏、近江系甕が出土した。主柱穴直上から高坏脚柱部が出土した。高坏類はいずれも残りが良く、時期は山中Ⅱ式併行期[(2)]である。

（２）古墳周溝

ＳＤ４（第10図）　飛塚古墳の周溝で、時期は古墳時代前期末頃である。Ａ区では壺形埴輪（第16図21・24）、底部穿孔壺（第16図28）が出土し、Ｂ・Ｃ区では多数の円筒埴輪が出土した。ＳＤ４付近で家形埴輪片（第13図８）が出土した。

幅は2.2ｍ、深さは0.6ｍで、Ａ～Ｃ区あわせて約25ｍを確認した。Ａ区では、そのほとんどが自然流路ＳＲ１に削平されているが、墳丘裾部周辺からは多くの埴輪が出土しており、これを周溝の想定ラインと捉えることができるため、古墳北側で検出されたテラス状に残る平坦面は墳丘の裾部である可能性が高い。したがって、周溝は現地表面で見ることのできる墳丘裾部から４～５ｍ程外側を想定ラインとみることができよう。

埋土は、上層が黄灰色粘質土、中層が黒褐色土（黒ボク土）、下層が褐灰色～にぶい黄褐色土である（第７図51～55層）。多くの埴輪は中層から出土しており、墳丘盛土の黒ボク土が崩落した際に埴輪も転落したと考えられる。ＳＤ４埋土には、山茶碗や土師器片など中世の遺物が含まれないことから、墳丘が崩落し周溝が埋没した時期は、おそらく古墳時代の範疇でおさまるものと思われる。



第８図　Ｂ区土層断面図（1：100）

ＳＤ９　飛塚古墳の周溝で、Ｄ区で北側法面のみ検出した。幅0.6ｍ、深さ0.21ｍが残存し、南側は現代の攪乱によって削平される。埋土はＳＤ４と同じ黒褐色粗砂シルトで、指先ほどの大きさの埴輪片が４点出土した。

（３）自然流路

ＳＤ１　Ａ区を縦断する溝で、重複関係はＳＤ４→ＳＤ１→ＳＲ２→ＳＲ３である。ＳＤ１・ＳＲ２・ＳＲ３は、ほぼ同一の位置を流れる流路であるが、ＳＤ１は自然流路か溝か判別がつかないため、遺構番号はＳＤ（溝）とした。ＳＤ１は墳丘裾を４ｍほど削り、周溝と重複するように西から東へと流れている。ＳＤ１の時期は、出土した山茶碗や土師器皿から鎌倉時代と考えられ、遅くともこの時期には墳丘裾部が削り込まれたことがわかる。

ＳＤ４の項目で前述したとおり、調査区内でテラス状の平坦面を確認した。これは墳丘の裾部である可能性が高いが、風倒木による凹凸が激しく、墳丘状の傾斜は確認することができなかった。

古墳の裾を流れるＳＤ１は、調査区のほぼ全域を流れるＳＲ２によって削平されているため、堆積は不明瞭であるが、埋土は概ね褐灰色土で、上層は灰色土（第７図31～33層）である。ＳＤ１は古墳周溝ＳＤ４と重複し、周溝推定位置からは多くの埴輪が出土した。特に、調査区南西隅の黒褐色粘質土～黒色粘土（第７図39・40層）と、調査区南辺周辺（第７図34）では多くの埴輪がまとまって出土した。

ＳＲ２　Ａ区で検出した自然流路で、調査区のほぼ全域を縦断する。機能時期は不明であるが、ＳＤ１同様中世である可能性が高い。

ＳＲ３　Ａ区で検出した自然流路で、調査区を縦断する。ＳＲ２と重複し、ＳＲ８と同一の流路である可能性が高い。時期は最も新しく、ほ場整備以前の約50年前に機能していたようである。調査区北辺では丸太を用いた大型の集水枡のような施設を確認した。また、調査区内の各所で丸杭を用いた堰を検出した。

ＳＲ８　Ｂ区を縦断する自然流路である。ＳＲ３と同一の流路である可能性が高いが、ＳＲ３のような現代遺物が出土しなかったことから、ＳＲ８付近は中世に埋没した可能性が高い。多くの埴輪片が出土し、比較的大きい破片は溝の底付近に集中していた。

ｐｉｔ　Ａ区ではピットを検出しなかった。Ｂ区ｐｉｔ６は竪穴住居ＳＨ５と重複しているが、時期は不明である。Ｂ区西壁付近で検出されたピット群は、遺物は出土しなかったものの形状は良好で、竪穴住居ＳＨ５と同時期である可能性がある。

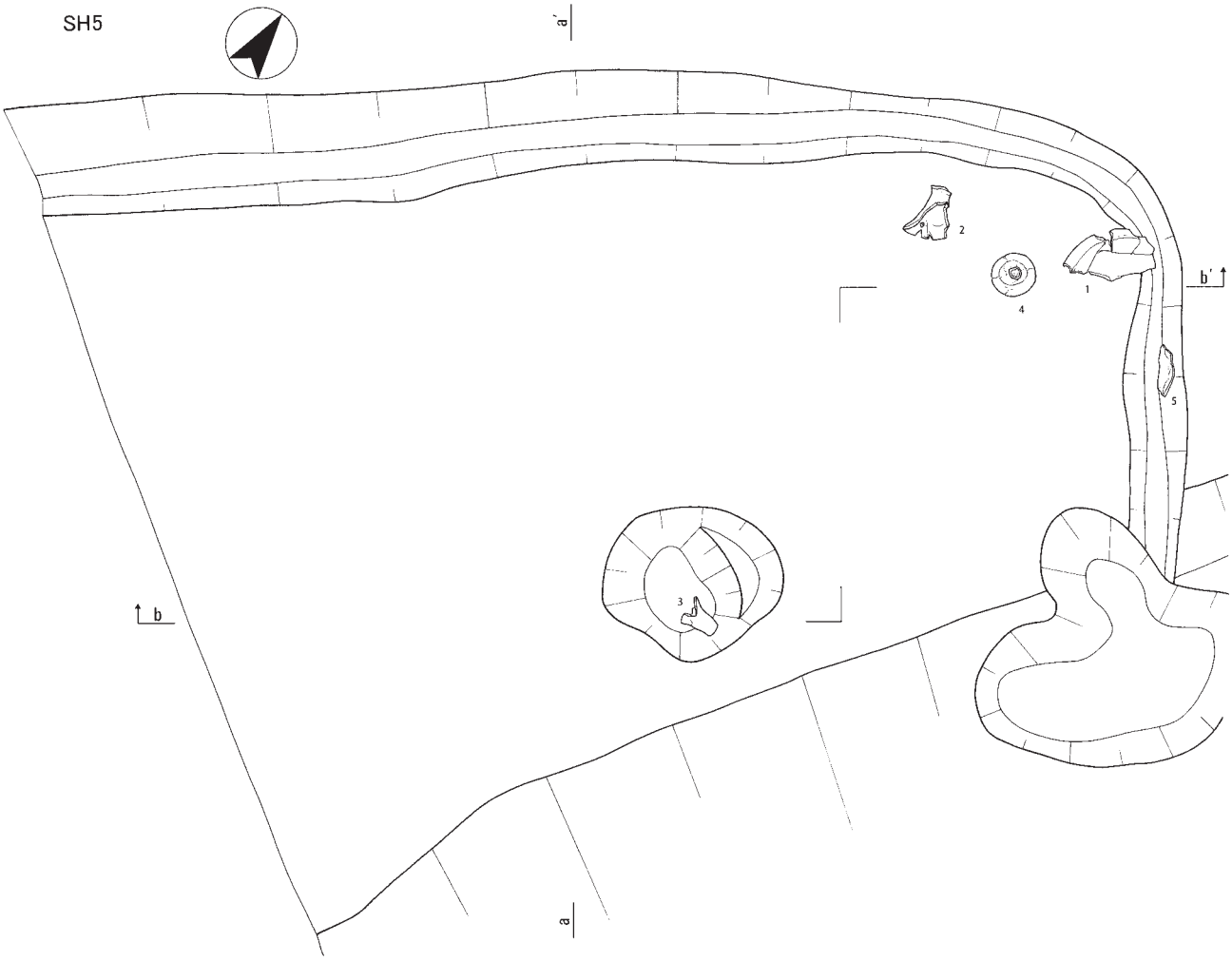
〔 註 〕

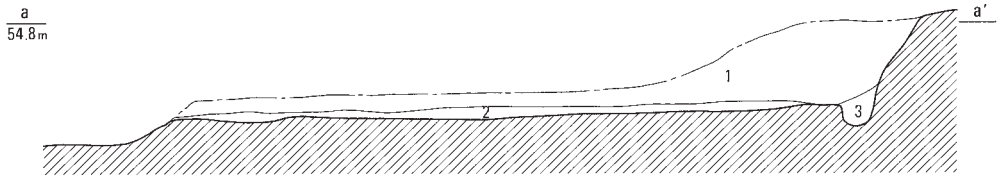
（１）壁際溝、壁溝、壁周溝等の用語があるが（文化庁文化財部記念物課監修・独立行政法人国立文化機構奈良文化財研究所編2010『発掘調査のてびき』同成社）、本報告では壁周溝の用語を用いた。

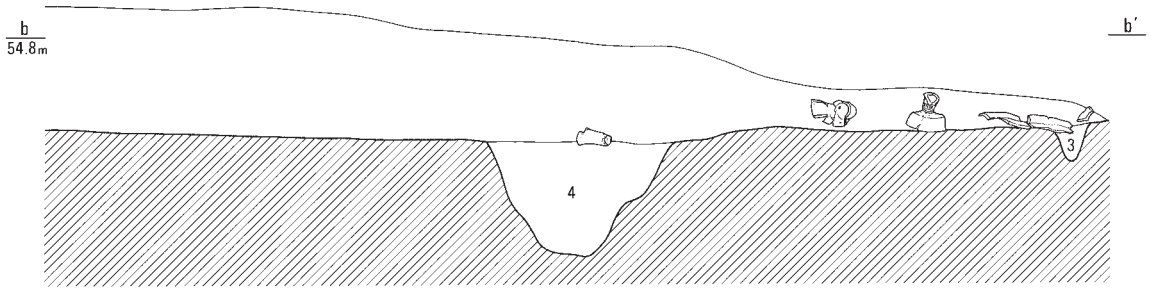
（２）弥生時代の時期区分は以下の文献による。
- 赤塚次郎2001「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 上村安生2002「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社

第１表　遺構一覧表

遺構名	形態	地区	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	時期	備考
ＳＤ１	自然流路	Ａ区	30.0～	15.0～	1.00～	鎌倉時代	飛塚古墳の墳丘裾および周溝を削平する。墳丘裾付近から埴輪出土。重複関係はＳＤ４→ＳＤ１→ＳＲ２→ＳＲ３。
ＳＲ２	自然流路	Ａ区	30.0～	14.0～	0.70～	鎌倉時代	重複関係はＳＤ４→ＳＤ１→ＳＲ２→ＳＲ３。
ＳＲ３	自然流路	Ａ区	50.0～	14.0～	0.80～	鎌倉時代～現代	重複関係はＳＤ４→ＳＤ１→ＳＲ２→ＳＲ３。ＳＲ８と同一か。
ＳＤ４	古墳周溝	Ａ区	25.0～	2.20	0.60	古墳時代前期末	飛塚古墳周溝。
ＳＨ５	竪穴住居	Ｂ区	3.4～	2.2～	0.24	弥生時代後期後半	山中式併行期の土器群出土。重複関係はＳＨ５→ＳＤ４・飛塚墳丘→ＳＲ８。
pit 6	ピット	Ｂ区	0.80	0.74	0.06	弥生時代後期後半？	ＳＨ５と重複する。土器片出土。
pit 7	ピット	Ｂ区	0.30	0.30	0.16	鎌倉時代？	ＳＲ８と同時期のピットか。埴輪片出土。
ＳＲ８	自然流路	Ｂ・Ｃ区	22.0～	4.50～	1.40	鎌倉時代～現代？	ＳＲ３と同一の可能性が高いが、埋没時期は中世か。
ＳＤ９	古墳周溝	Ｄ区	-	0.60～	0.21～	古墳時代前期末	飛塚古墳周溝。







1　10YR2/2 にぶい黄褐色シルト　〔埋土〕
2　10YR5/6 黄褐色土（10YR4/3 黄褐色シルトブロック含む）　〔貼床〕
3　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　〔壁周溝〕
4　10YR3/3 暗褐色シルト　〔主柱穴〕

0　1m

第９図　ＳＨ５平面・断面図（1：20）

第10図　ＳＤ４出土状況平面図（1：20）

Ⅳ　遺　　物

1　概要

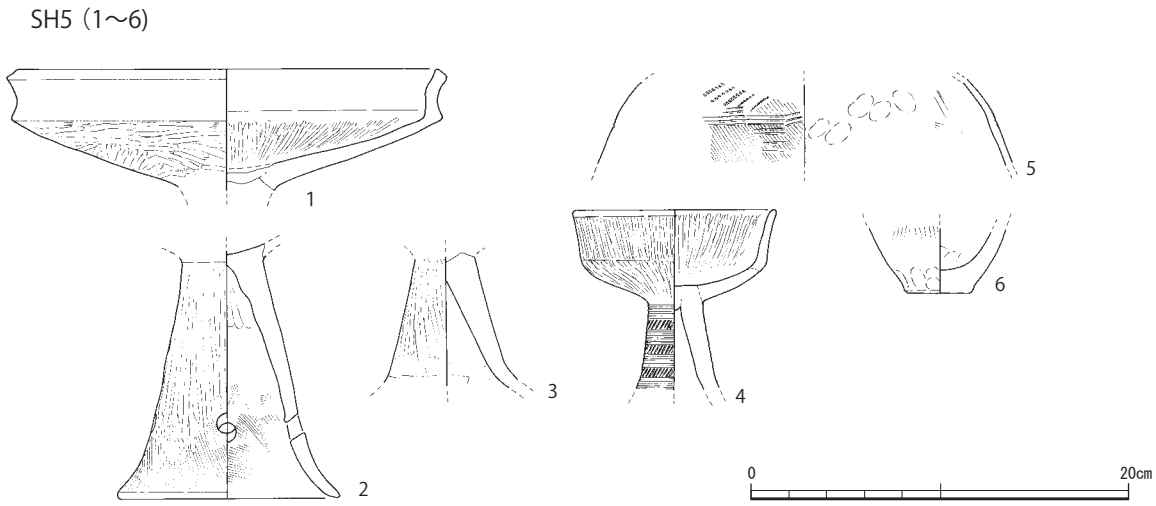
第１次調査（Ａ区）で出土した遺物量はコンテナケース10箱分、第２次調査（Ｂ・Ｃ区）で出土した遺物量は同４箱分、重量は合わせて39.25 kgである。

出土した遺物の大半は飛塚古墳に伴う埴輪類であるが、原位置を保つものはなく、すべて墳丘から崩落したものと考えられる。また、その他の遺物も、ＳＨ５以外はすべて中世から現代の流路から出土しているため、遺構に伴うものは少ない。したがって、ＳＨ５以外の出土遺物は、次数や調査区に関わらず時代と器種によって分類して報告書に掲載した。

2　弥生時代の遺物

ＳＨ５出土遺物（第11図１～６）　１～３は有稜高坏で、すべて別個体である。１は坏部で、上段は短く外反し、口縁端部に明瞭な面をもつ。坏部下段の内外面はハケメのち細かなミガキが施され、内面と外面でミガキの方向が異なる点が特筆されるが、坏部上段はハケメのち強いヨコナデによって成形されておりミガキはみられない。２は主柱穴埋土の上層から出土した。長い脚柱部に短い裾部がつくもので、端部は丸くおさめられる。この時期に特徴的な櫛描直線文はなく、外面は細かいハケメのちミガキ調整で、内面にも同一の工具と思われるハケメが観察される。透孔は比較的小さく、４方向のうち２ヶ所残存している。３は２に比べ脚柱部が短く、外面はハケメのち粗いミガキ調整で、屈曲部に板状工具の当たり痕が確認される。４はワイングラス形の高坏であるが、坏部は浅く緩やかに外反して、口縁端部はヨコナデによって丸くおさめる。坏部の調整は、内外面ともにタテ方向の細かいミガキ調整で、脚柱部までミガキが施される。脚柱部には、櫛状工具による刺突と、４～５本を１単位とした櫛描直線文が４条残存しており、文様帯の施文順は刺突文→直線文である。５は近江系甕の体部片で、器壁は非常に薄く、おそらく受口状の口縁部を有するもの。体部外面は煤が付着し、ハケメのち、肩部に横方向の直線文と、櫛状工具による列点文が施される。６は壺か鉢の底部。内面は板ナデによって成形する。外面は粗いハケメで、底部付近にはオサエが確認できる。

ＳＨ５の時期は、弥生時代後期後半の山中式併行期である[(1)]。坏部の浅い高坏（１）は山中Ⅰ式期の特徴を示すが、高坏脚柱部（３）は屈曲までの長さが短く、やや新しい様相を示している。また、甕の体部片（５）は廻間式併行期に登場するＳ字状口縁台付甕のような薄い器壁であるため、竪穴住居の廃絶時期は山中Ⅱ式併行期を想定しておきたい。



第11図　出土遺物実測図（１）（1：4）

3　飛塚古墳に伴う遺物

（１）埴輪の概要と分類

時期　今回出土した埴輪はすべて土師質で、いずれも破片資料のため、全体像を復元できる完形品はない。

朝顔形埴輪１点（199）以外は、いわゆる野焼きによる焼成である。朝顔形埴輪と、野焼きの埴輪群は、焼成や調整が大きく異なるため、時期差のある別々の古墳に伴っていた可能性が高い。このうち、飛塚古墳に伴うと考えられる野焼きの埴輪群の時期は古墳時代前期末頃である。一方、朝顔形埴輪の時期は古墳時代中期である。

以下では、まず飛塚古墳出土埴輪全体の概要を説明したのち、次項から器種ごとに分類と詳細を述べる。なお、壺形埴輪と円筒埴輪は、全体像を復元できないことから口縁部形態を基本として分類した。

器種　飛塚古墳出土埴輪の種類は、大きく形象埴輪・壺形埴輪・円筒埴輪に分類され、前期後葉の埴輪様式を象徴する鰭付円筒埴輪は認められない。形象埴輪の種類は家形埴輪で、破片が３点のみである。

円筒埴輪の口縁部は壺のような形状を呈し、胴部は樽のようにやや丸みを帯びている。このような形状と、外面を板ナデする調整技法は埴輪というよりも土器に近い作りであることから、「土器工人が作った埴輪」である可能性が高く、これが飛塚古墳出土円筒埴輪の最大の特徴といえる。したがって、畿内でみられるような、古墳の築造を契機として膨大な量を生産する専門工人集団の存在は推測されず、畿内系埴輪の系譜上に位置付けることは難しい。

焼成　飛塚古墳に伴う埴輪は、すべて野焼き焼成の埴輪であるが、黒斑はほとんどみられない。黒斑は、中期中葉に野焼きから窯焼きへ移行するなかで消失することが指摘されるが[(2)]、飛塚古墳の埴輪に黒斑がみられない理由は、前述の通り土器作りと同様の製作技法と焼成法を用いている点にあると考える。

赤色顔料　飛塚古墳出土埴輪は、家形埴輪も含め、その大多数に赤彩が認められる。赤彩は、家形埴輪・壺形埴輪・円筒埴輪のすべての器種で観察され、器種による差は見られない。

埴輪の出土状況によっては残存度が低く、器壁が風化・剥離している個体があるが、飛塚古墳に伴う埴輪は、元々すべての個体に赤彩が施されていたとみるほうが妥当であろう。なお、一般的に赤彩を塗布することが少ない円筒埴輪最下段は、飛塚古墳の出土資料でも顔料が観察されなかった。

顔料はベンガラと考えられる。円筒埴輪の場合、透孔切り込み断面に塗布が確認され、突帯が剥離した箇所には塗布が見られない。したがって、赤彩を施すタイミングは、突帯を貼り付けて透孔を穿つ工程の後、焼成工程の前ということがわかる。

出土状況　埴輪のほとんどが周溝を削平する自然流路から出土しており、原位置を保った資料はない。周溝ＳＤ４出土資料（第 10 図）も、ある段階で墳丘から転落した状態であるとみられる。

（２）家形埴輪

概要　７～９は、形象埴輪の家形埴輪片で、３点とも破片である。８・９は墳丘北東裾部およびＳＤ４付近から出土した（第６図）。基部や屋根などは出土していないため、詳細な復元はできない。

焼成は良好で、黒斑は見られない。胎土は石英・金雲母等の砂粒を多く含んでおり、粘土質の円筒埴輪や土器に比べ胎土は粗雑で、変形しないよう混和材を入れている点は他の古墳出土資料と共通する。３点とも外面にはベンガラが塗布されており、特に８・９表面の彩色は残存状況が良い。

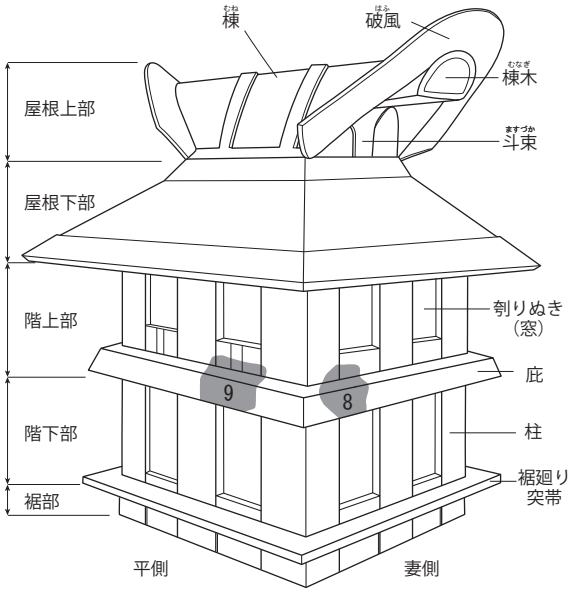
壁もしくは屋根（第 13 図７）　７の外面調整はハケメのちナデで、最終的に板ナデによって表面を整える。内面調整はハケメのちナデ調整である。内面の一辺に工具による縦方向のケズリがみられることから、住居の隅に相当する壁体片と思われる。ただし、７の外面に装飾された強弱の異なる縦方向の沈線２条は、線と線の間隔が 8.8 ㎝で、一方９の階上部に施された線間は 6.6 ㎝と間隔が狭いことから、９と同じ階上部とは考え難い。また、外面調整が８・９のような装飾性の高いタテハケではなく板ナデである点から、壁体片ではなく屋根下部の一部である可能性もあり、いずれにしても天地は不明である。

庇片（第 13 図８・９）　８・９は階上部と階下部の間にある刳りぬき（窓）の庇部分。９は階下部の刳りぬき上端が残存しており、一辺 17.7 ㎝である。９は階上部中央に縦方向の線刻が２本あり、これは８

にはみられないことから、８と９は並列するものではない可能性が高い（第 12 図）。８は内面に屈曲が確認でき、住居の隅部分に相当すると考えられ、窓が左右に２つ取り付くタイプの家形埴輪であれば向かって左側の窓となる。庇部分は厚み 1〜1.5 ㎝で、1.7 ㎝ほど前方に張り出したのち、約３㎝垂下する。外面調整は丁寧なタテハケで、庇部分をナデによって貼り付けたのち、家の装飾にあたる縦方向の沈線が施される。内面調整はハケメのちオサエである。赤彩は外からは見えない庇の内側や、刳りぬき断面にも非常に丁寧に塗布されており、９の内面には、刳りぬきの断面に塗った際に飛び散ったと考えられる赤彩が点々と付着している。

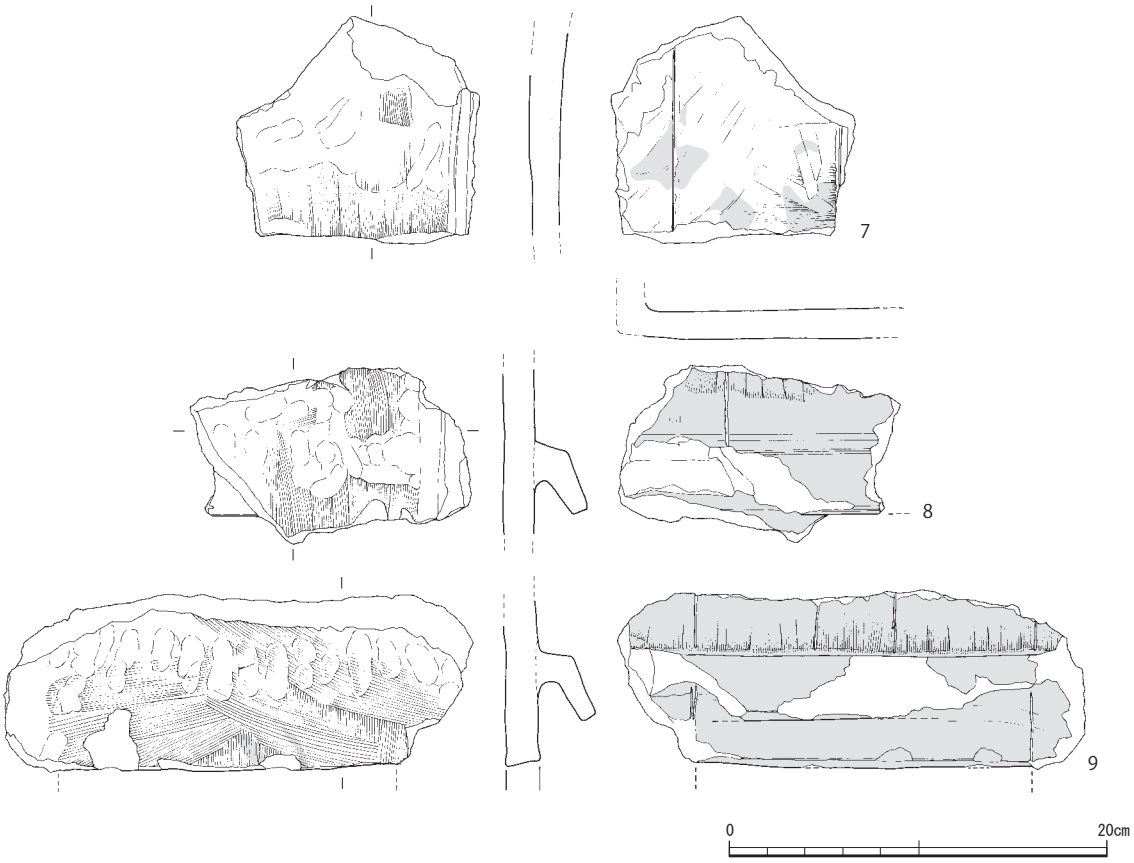
庇の形状および規模から、おそらく大阪府八尾市美園古墳（４世紀末）[3]や松阪市宝塚１号墳（５世紀前半）[4]で出土しているような、入母屋造形式の高床建物になると推測される。

宮本長二郎氏によると、高床建物を模した家形埴



松阪市教育委員会2001『松阪宝塚１号墳調査概報』より引用・一部改変。８・９はどちらが平側・妻側となるか不明であるが、模式図では縦方向の線刻が複数ある９を平側とし、線刻のない８を妻側とした。

第 12 図　家形埴輪模式図



第 13 図　出土遺物実測図（２）（1：4）

輪は、４世紀後半から５世紀初頭に家形埴輪全体（高床建物・平屋建物・伏屋状建物）の37.5%を占めるが、５世紀前～中期には23.8%、５世紀後期～６世紀中期には５％と減少していくことが指摘される。[5] 飛塚古墳出土家形埴輪の時期は、共伴する円筒埴輪の形状から４世紀末頃と考えられ、宮本氏の指摘する高床建物形式が最も多い時期と合致する。なお、家形埴輪を複数棟用意して配置する屋敷構成型配置の場合、当該期の平屋建物は主殿や副屋、高床建物は祭殿や倉などを表現し、屋根形式は主殿や祭殿に入母屋造と寄棟造を、副屋や倉には切妻造を採用する例が多いとされることから、飛塚古墳の家形埴輪は祭殿を模している可能性がある。[6]

（３）壺・壺形埴輪

【概要】

形態　壺、もしくは壺形埴輪の口縁部を４類に分類した。底部は２点出土している。口縁部片の点数に対して底部片や胴部片が少ないため、壺状の口縁部に伴う体部の形状は、球体だけでなく、円筒埴輪と同じような樽状を呈するものが一定量含まれていると思われる。したがって、第21・22図で円筒埴輪Ｃ・Ｄ類の底部として分類・掲載した一群のなかには、壺状の口縁に伴う体部・底部片が一定量含まれる可能性が高い。

【分類】（第15図）

壺形埴輪Ａ１類　大・中型の複合口縁壺もしくは壺形埴輪で、口縁部が頸部から外反する。一次口縁の端部を拡張し、二次口縁端部は上方に摘み上げる。いわゆる伊勢型二重口縁壺である。胴部は球体もしくは樽状を呈する。

壺形埴輪Ａ２類　大・中型の複合口縁をもつ。壺形埴輪Ａ１類に比べ器壁が厚く、二次口縁端部を緩やかに成形するもので、樽状の胴部を呈する可能性が高い。

壺形埴輪Ｂ１類　口縁部が頸部から外反し、二次口縁が直線的に屈曲する。Ｂ１類は、二次口縁の屈曲部外面に突帯を貼り付けるもの。

壺形埴輪Ｂ２類　壺形埴輪Ｂ１類と基本的には同じ形態をとるが、二次口縁の屈曲部外面に突帯を貼り付けないもの。

【各分類の詳細】

壺形埴輪Ａ１類（第16図10～20）　口縁部が頸部から外反する複合口縁壺で、いわゆる伊勢型二重口縁壺である。分類上埴輪としたが器形は壺で、壺形埴輪Ａ２類と比べて器壁が薄く、口縁端部を丁寧に成形している。なかでも13・16は胎土が精良であるため、埴輪ではなく壺である可能性が高い。

10～17は二次口縁である。10～14の口縁端部は、強いヨコナデによって上方に突出している。それに比べ、15～17はヨコナデがやや弱く、口縁端部は緩やかに上方に摘み上げられている。18～20は一次口縁である。18は、擬口縁の外側に二次口縁が張り出すような形で接合しているが、19は一次口縁の端部を外側に大きく拡張したのち、その内側に接して二次口縁を積み上げていることがわかる。20は、一次口縁の外面に二次口縁を貼り付けた際の粘土片がわずかに残存しており、手法は18と同一である。

赤彩の施される部位は主に外面であるが、Ａ１類の場合は口縁部内面にも赤彩が確認される。

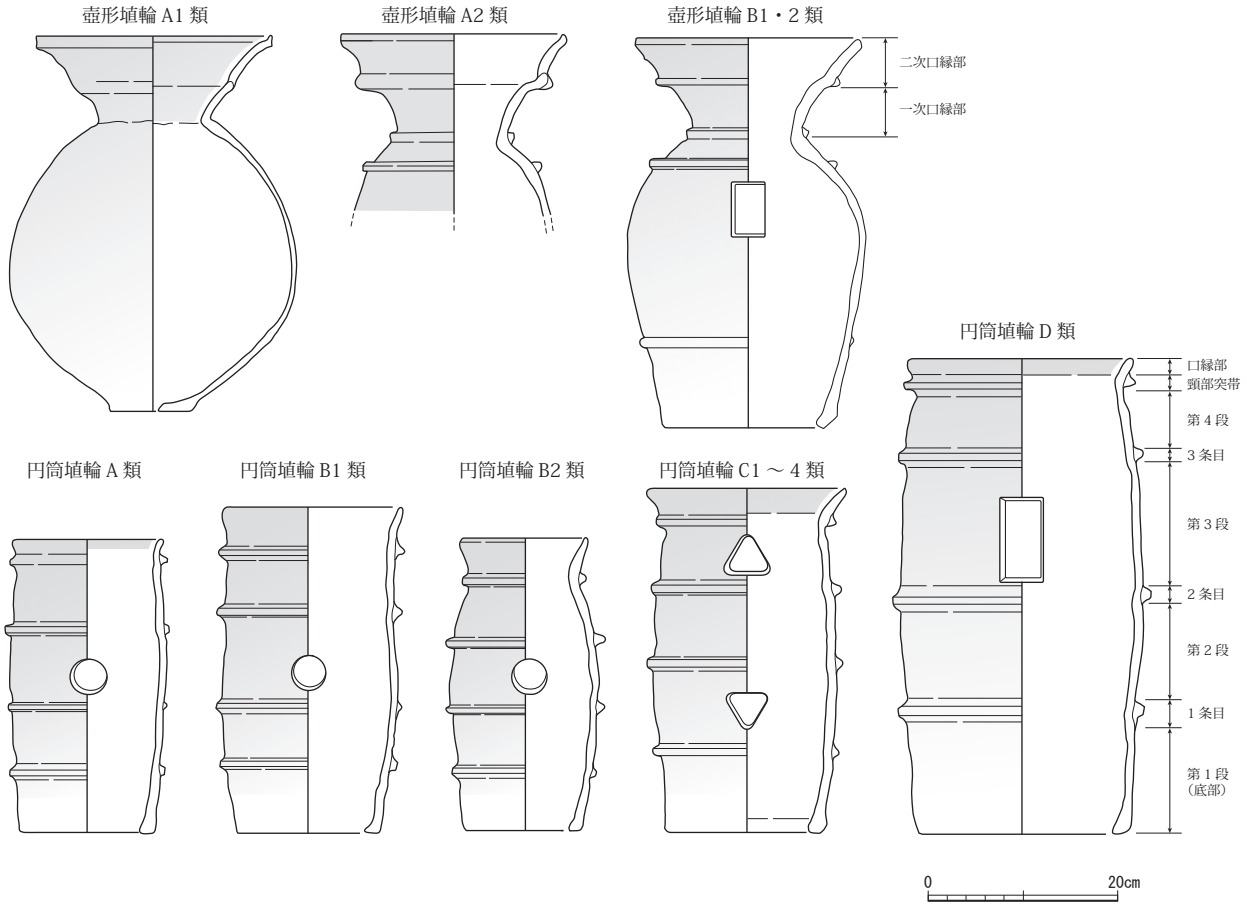
壺形埴輪Ａ２類（第16図21～23）　樽状の胴部をもつ可能性が高い一群で、Ａ１類に比べて白っぽい胎土で器壁が厚い。口縁端部の形態も、Ａ１類と比べてヨコナデが甘く、立ち上がりの屈曲が緩やかである。21は一次口縁と二次口縁の接合部が残存するが接合痕は不明瞭で、屈曲部外面に剥離痕が認められることから、突帯状の拡張部が貼り付けられていたと考えられる。外面は磨滅が激しく、調整や赤彩は観察できない。

22は、二次口縁を擬口縁の内側に接して積み上げている。23は口縁端部の形態から口縁部と判断したが、破片であるため全体像は不明で、壺形埴輪Ａ１類・円筒埴輪Ｃ３類となる可能性もあろう。

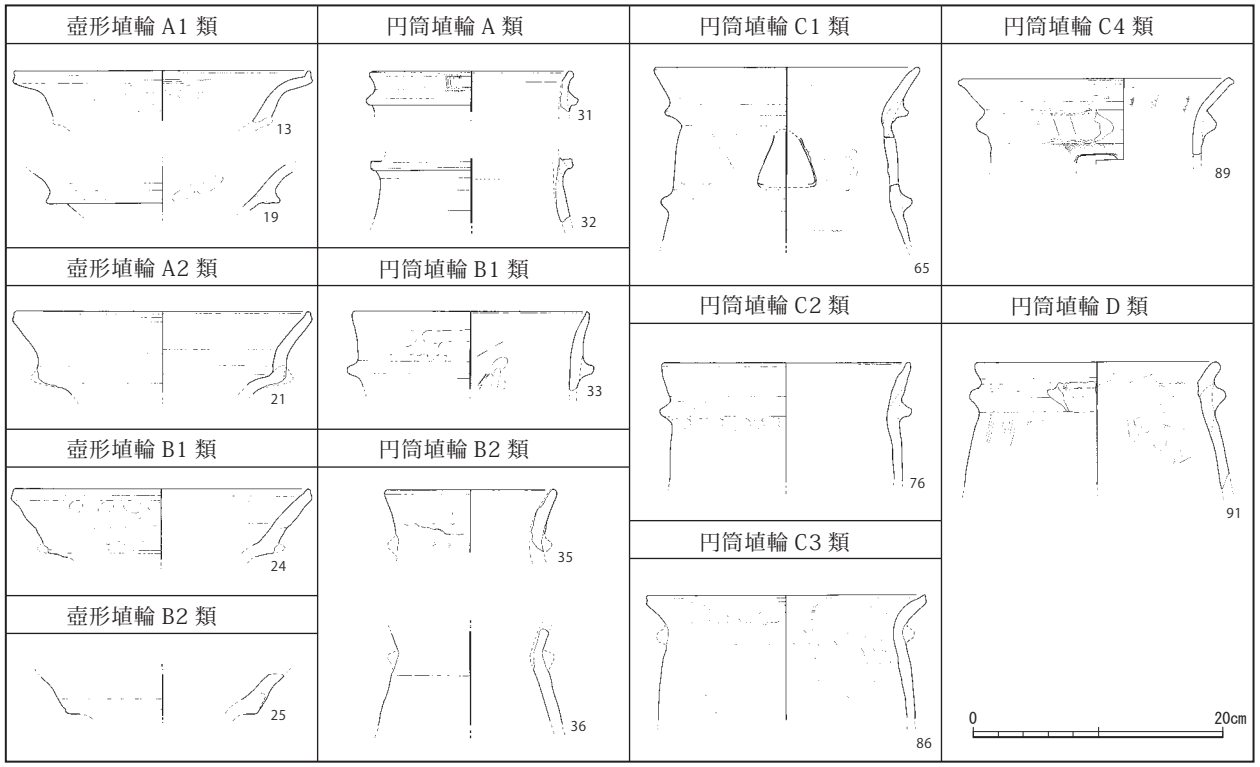
壺形埴輪Ｂ１類（第16図24）　直線的な口縁部で、口縁端部の外面に面をもつ。屈曲部外面に剥離痕が認められ、突帯が貼り付けられていたことが推測される。

壺形埴輪Ｂ２類（第16図25）　25は、24と同様の形態をとり、接合部外面に突帯が貼り付かないタイプである。屈曲は明瞭で、口縁端部は欠損する。

壺形埴輪肩部・胴部（第16図26・27）　26は肩部である。朝顔形埴輪のような形状で、突帯が１条剥



第 14 図　埴輪の復元模式図（1：8）



第 15 図　埴輪の口縁部分類（1：6）

離している。比較的径が小さいことから、小型の口縁部に伴うものと考えられる。松阪市堀田遺跡出土の朝顔形埴輪[7]は、頸部と突帯の間に三角形の透孔が４方に巡るが、26の場合は頸部と突帯の間隔が狭いことから、この間に透孔はない可能性が高い。27は胴部で、上方に方形の透孔がある。透孔は縦4.0㎝、横3.0㎝が残存するが、欠損しているため法量の復元はできない。胴部片が縦方向に長く残存するにも関わらず突帯が１条もみられない点と、器壁が薄く胎土が白っぽい点から、円筒埴輪ではなく壺形埴輪の胴部と判断した。

壺底部（第16図28・29）　28は底部に穿孔が認められる。29も穿孔されていた可能性があるが、断面が摩耗しているため断定はできない。壺形埴輪Ａ１類に伴う可能性があるが、底部径は小さく器壁が薄いため、やや疑問が残る。

（４）円筒埴輪

【概要】

全体の形状　飛塚古墳出土円筒埴輪は、通常畿内で出土する円筒埴輪とは様相が異なり、形態や製作技法は土器に近く、調整も板状工具を主体としている。いずれの円筒埴輪も頸部に突帯が巡る。胴部と底部の形状は樽のような形をとるものと考えられ、肩部から胴部にかけた上半部で最も径が膨れ、底部に向かって窄まっていく。

口縁部　口径と口縁部・口縁端部の形状から８類に分類した（第15図）。割合はＣ１類が13点と最も多く、これと形態が類似するＣ２類が10点、Ｃ３類が３点、Ｃ４類が２点で、Ｃ１～Ｃ４類合わせて口縁部全体の約４割を占める。そのほかの口縁部の点数は、Ａ類２点、Ｂ１類１点、Ｂ２類１点、Ｄ類９点である。

底部・径　成形は、粘土帯を巻いて基部を作っている。底面に板状工具の当たり痕跡が残る底部片（56）があり、これは成形や乾燥の過程でついたものと思われる。

径が復元可能できる個体は43点である。底部の形状は、厚みが薄く直立する９点（60～62・131～136）と、厚く丸みを帯びた34点（54～59・137～153・163～173）に分けられ、後者は畿内で一般的な円筒埴輪に近い形状であるが、意識して作られた差であるかは不明である。したがって、胴部と底部の形態は第15図の分類には加味せず、報告書掲載時には径や器壁の厚みが合う口縁部と近い位置に配置した。なお、底部径は以下の３つのまとまりがあるが、中型・大型に関しては法量による規格性はなく、底部径で便宜的に分けたものである。

小型　底部径15～16㎝程度、突帯３～４条か
　　円筒埴輪Ａ類・Ｂ１類・Ｂ２類が相当
中型　底部径16～20㎝程度、突帯４条か
　　円筒埴輪Ｃ１～４類・Ｄ類が相当
大型　底部径20㎝以上、突帯４条か
　　円筒埴輪Ｃ１～４類・Ｄ類が相当

透孔　透孔の形状は、円形・小孔・三角形・逆三角形・方形がある。それぞれ確認された数は、円形８点、小孔４点、三角形２点、逆三角形１点、方形14点で、方形が最も多い。円形もしくは小孔が穿たれた破片はいずれも胴部径が小さくなることから、これらの透孔は小型の円筒埴輪Ａ～Ｂ類に伴う可能性が高い。一方、方形は大型の胴部に伴うものが多く、三角形は中型の胴部に多くみられる傾向があるようである。

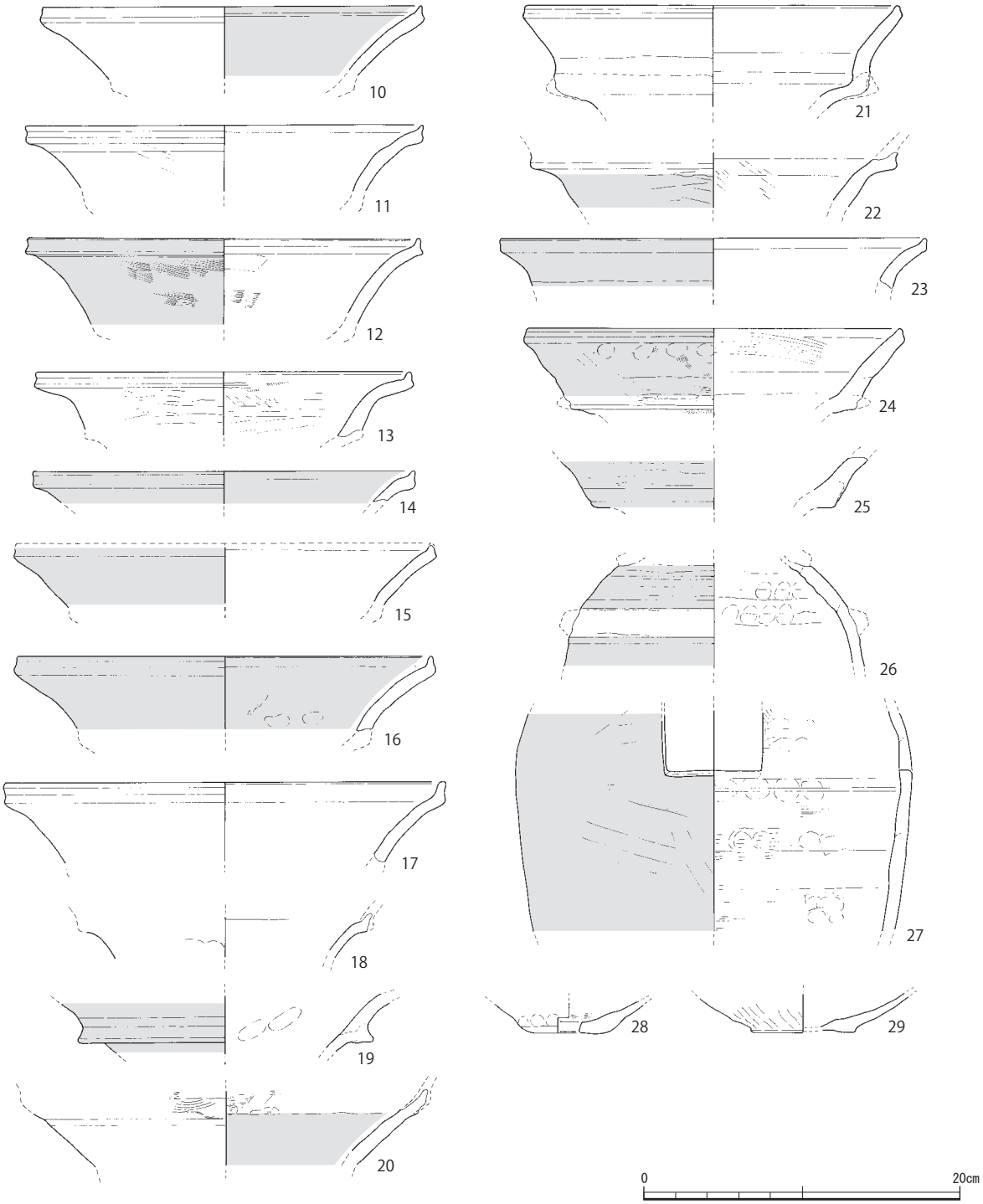
透孔の大きさは、円形は約3.0㎝である。小孔は、竹管のような大きさの工具で穿孔したもので、径は高坏脚柱部の穿孔とほぼ同じである。三角形は、一辺約4.0～5.0㎝である。方形は、短辺が約3.0～4.4㎝で、長辺は残存するものから推測して最短でも4.0㎝以上である。

透孔の形状は、川西編年によると三角形・逆三角形・方形は第Ⅰ・Ⅱ期に分布し、円形はⅡ期後半から出現することが指摘されている[8]。飛塚古墳出土円筒埴輪の製作技法は通常の円筒埴輪と異なっているものの、装飾性の高い透孔は他と同じ傾向を示すものと考えられ、透孔の形状から川西編年の第Ⅱ期後半頃と位置付けられよう。ただし、透孔が２方向２箇所以上残存する個体はないため、組み合わせや方向は不明で、これによる時期の判別はつけることができない。なお、方形の透孔が最下段に穿たれる個体（61）があることが特筆される。

突帯　いずれの埴輪も頸部突帯１条＋胴部突帯３条であったと思われるが、突帯間隔がわかる資料が１

点しかないため明確ではない。円筒埴輪Ｃ１類の65は、唯一突帯が２条残存する個体で、突帯間隔は先端から先端までの幅で約７㎝である。しかしながら、１段目が同程度残存する63はこの間隔に突帯はみられないため、一律に７㎝が適応されたわけではないようである。

突帯の断面形は、基本的に三角形ないしは緩やかな方形である。一般的な円筒埴輪の突帯断面形は方形～台形状を呈し、特に前期古墳に伴う川西編年Ⅰ～Ⅱ期のものはM字状をなすものが主体であるが、[9] 飛塚古墳出土円筒埴輪の突帯は、埴輪のそれよりも壺の頸部を巡る突帯に近い。円筒埴輪Ａ・Ｂ類など



第16図　出土遺物実測図（３）（1：4）

の小型品に関しては、Ｃ類と比べてより小さい突帯が用いられる傾向にあり、胴部の規格に対応した突帯であったようである。剥離した突帯の下には、突帯間隔を設定する際の痕跡（凹線や刺突など）が認められる場合が多いが、飛塚古墳出土資料のなかにそれを見出すことはできなかった。

記号・線刻　１点の胴部（159）に記号が認められた。記号はヘラ描きによるもので、縦方向の２本の沈線が上方で交わっている。このうち１本は、方形の透孔に沿うように描かれる。沈線の長さは2.2㎝で、破片資料であるため全体像は不明である。

器面調整　外面調整は、板ナデによる一次調整が基本で、板状工具の側面で削り取るように器面を整えている。内外面ともに粗いハケメが施されるものも一定量存在し、斉一的な規格はない。

底部外面は板ナデによって器面が整えられるが、小型品の中には60のように工具の当たり痕を明瞭に残すものもみられる。

赤色顔料　赤彩は、内外面ともに認められる。外面の赤彩部位は口縁部から胴部にかけてで、据え付ける際に見えなくなる下半部から底部には塗布されていない。外面については、現在観察できない個体も含め、元々はすべての埴輪に彩色が施されていたと思われる。内面は、口縁部内面のみに赤彩が観察される場合が多いが、すべての個体に塗布されていたわけではないようである。

【分類】

円筒埴輪Ａ類　小型で器壁は薄い。口縁部は短く、わずかに内湾しながら直立する。頸部を巡る突帯は円筒埴輪Ｃ類に比べ小さく、断面形が四角形を呈するものがある。

円筒埴輪Ｂ１類　小型で器壁はやや薄い。口縁部は長く、わずかに内湾しながら直立し、口縁端部を丸くおさめる。

円筒埴輪Ｂ２類　小型で器壁は厚い。口縁部は長く、直立する。口縁端部はヨコナデによって面を取る。

円筒埴輪Ｃ１類　中型で器壁は厚い。口縁部は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。

円筒埴輪Ｃ２類　中型で器壁は厚い。基本的な形状は円筒埴輪Ｃ１類と同様であるが、口縁端部が強いヨコナデによってわずかに内湾するもの。

円筒埴輪Ｃ３類　中型で器壁は厚い。基本的な形状は円筒埴輪Ｃ１類と同様であるが、口縁端部を上方に摘み上げるもの。

円筒埴輪Ｃ４類　中型で器壁は厚い。基本的な形状は円筒埴輪Ｃ１類と同様であるが、口縁端部の面を明瞭に取るもの。

円筒埴輪Ｄ類　大型で器壁は厚い。口縁部は直線的で短く、口縁端部を丸くおさめる。全体的に口縁部径が広い個体が多いことから、大型の底部を伴う可能性が高い。

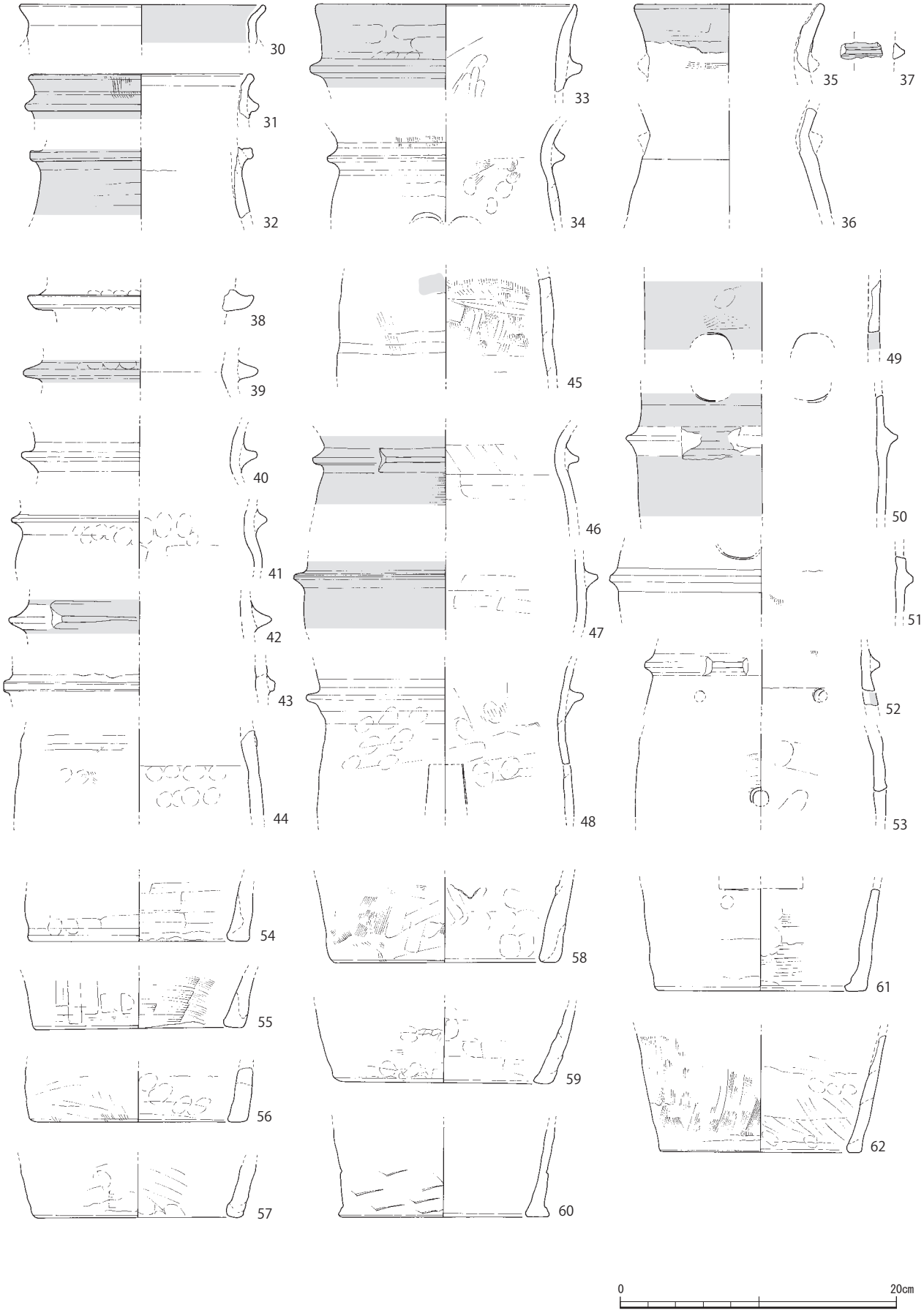
【各分類の詳細　円筒埴輪口縁部】

円筒埴輪Ａ類（第17図30～32）　30は短小な口縁部で、ヨコナデによってわずかに内湾する。頸部外面に突帯を貼り付けた痕跡がみられる。赤彩は口縁部内面にのみ観察されるが、外面にも元々は塗布されていたと思われる。31の口縁部は、30に比べてやや直立するが、短い口縁部を有するという点からＡ類に分類した。32は胴部で、Ｂ１・Ｂ２類に伴う可能性もあるが、突帯の断面形と器壁の薄さ、胴部径の狭さからＡ類として掲載した。

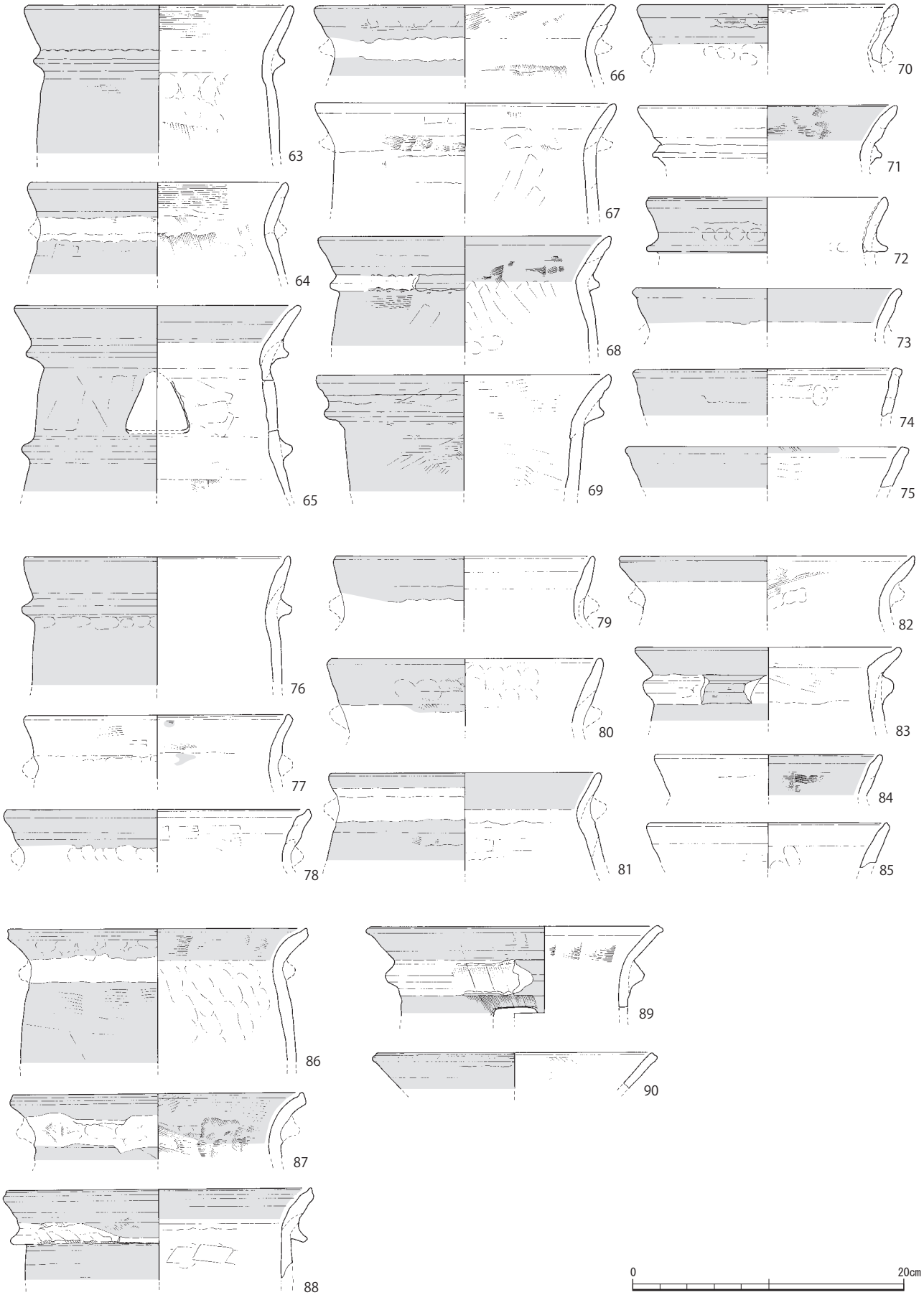
円筒埴輪Ｂ１類（第17図33・34）　33は口縁部が直立し、今回出土した円筒埴輪のなかで最も長い口縁部をもつ。口縁端部はわずかに内湾する。頸部外面には突帯が巡るが、他の円筒埴輪と比べて頸部に明確な屈曲がないことから、樽状ではなく直線的な胴部を伴うのかもしれない。34は口縁端部が欠損しており、円形の透孔が一部残存している。径と器壁の厚さからＢ１類として掲載したが、Ａ・Ｂ１・Ｂ２類のいずれにも対応する可能性がある。

円筒埴輪Ｂ２類（第17図35～37）　35は器壁が厚く、直立する口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめるもの。36は、35と同じく器壁が厚い。やや樽状を呈する胴部になることが想定されるが、円筒埴輪Ｃ類と比較するとその屈曲は堅く直線的である。37は剥離した突帯で、小型円筒埴輪のＡ１・Ｂ１～２類の頸部に貼り付く可能性が高い。

円筒埴輪Ａ・Ｂ類胴部（第17図38～62）　器壁が薄く、底部径が概ね16㎝以下の一群、もしくは円形の透孔をもつ一群である。38・39は突帯が残る胴部で、他の突帯に比べて明瞭に摘み出していることから、部位は頸部と思われる。40～44も突帯が残存し



第 17 図　出土遺物実測図（4）（1：4）



第 18 図　出土遺物実測図（５）（1：4）

ているが、43・44 は突帯というよりも粘土紐状の帯が貼り付くもの。45〜47 は比較的器壁の薄い胴部で、円筒埴輪Ｃ類に伴う可能性があるものを含む。48〜53 は透孔をもつ一群である。48 は方形の透孔が残存するが、一辺の長さは不明である。49〜51 は直径約３㎝の円形透孔が残存するもの。51 は、径は広く大型品と捉えられるが、円形の透孔は円筒埴輪Ａ・Ｂ類に伴う可能性が高いため、ここでは小型品とともに掲載した。52・53 は直径約１㎝の小孔が残存するもので、竹管状の工具で穿孔されたことが想定される。54〜62 は底部で、赤彩は見られない。底部は、器壁が厚ぼったく一般的な円筒埴輪と同じような形状を呈する 54〜58 と、器壁が薄く直立傾向にある 59〜62 に大別される。この差が、乾燥工程が不十分であるため自重によって沈んだものであるのか、あるいは前者が一般的な円筒埴輪を意識して製作されたものであるのかはわからない。ただし、両者の調整技法や工具に違いはみられない。61 は方形の透孔が残存しており、最下段にまで透孔があったことがわかる。

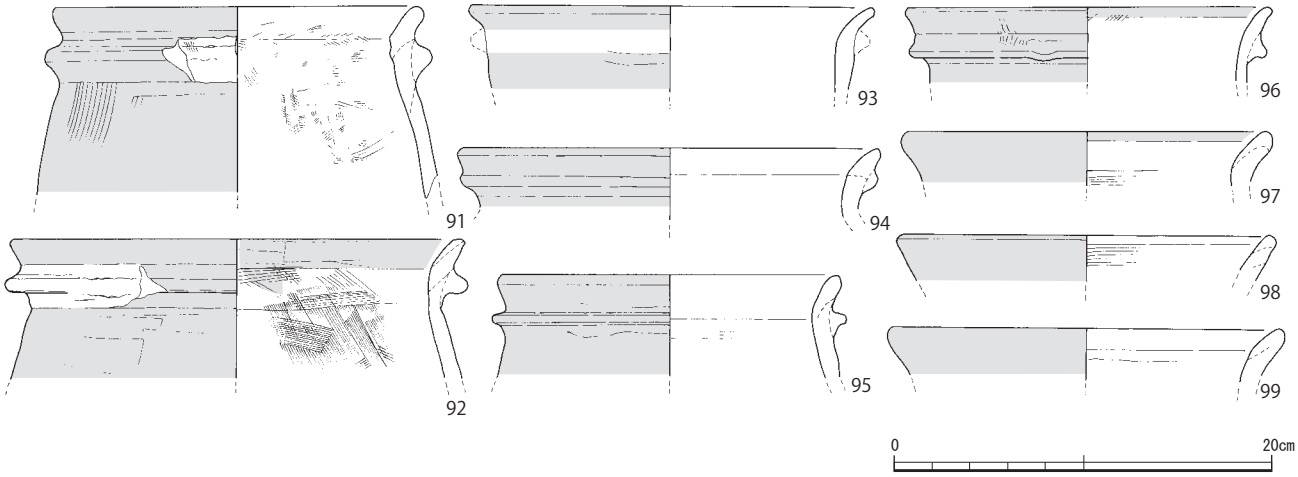
円筒埴輪Ｃ１類（第 18 図 63〜75）　飛塚古墳出土円筒埴輪のなかで、最も主体をなす一群である。口縁部は直線的で、口縁端部は概ね丸い。頸部は緩やかに屈曲し、樽状の胴部をもつ。65 は、今回の出土資料のなかで唯一突帯が２条残る個体で、三角形の透孔があり、三角形の一辺は 5.0 ㎝と復元できる。68 は、突帯を貼り付ける際に用いた棒状工具の圧痕が明瞭に残る。また、突帯剥離面には、乾燥および焼成時に生じたと考えられる亀裂が観察され、これは突帯を貼り付けた部位と頸部粘土紐の収縮が異なることが原因と推測される。69 の胴部は逆ハの字状に立ち上がる。73〜75 は、口縁部がやや垂直気味に立ち上がるもの。

円筒埴輪Ｃ２類（第 18 図 76〜85）　基本的な形状はＣ１類と同様であるが、口縁端部が強いヨコナデによってわずかに内湾する一群である。78 は口縁部径が広いことから、大型の底部に伴う可能性がある。

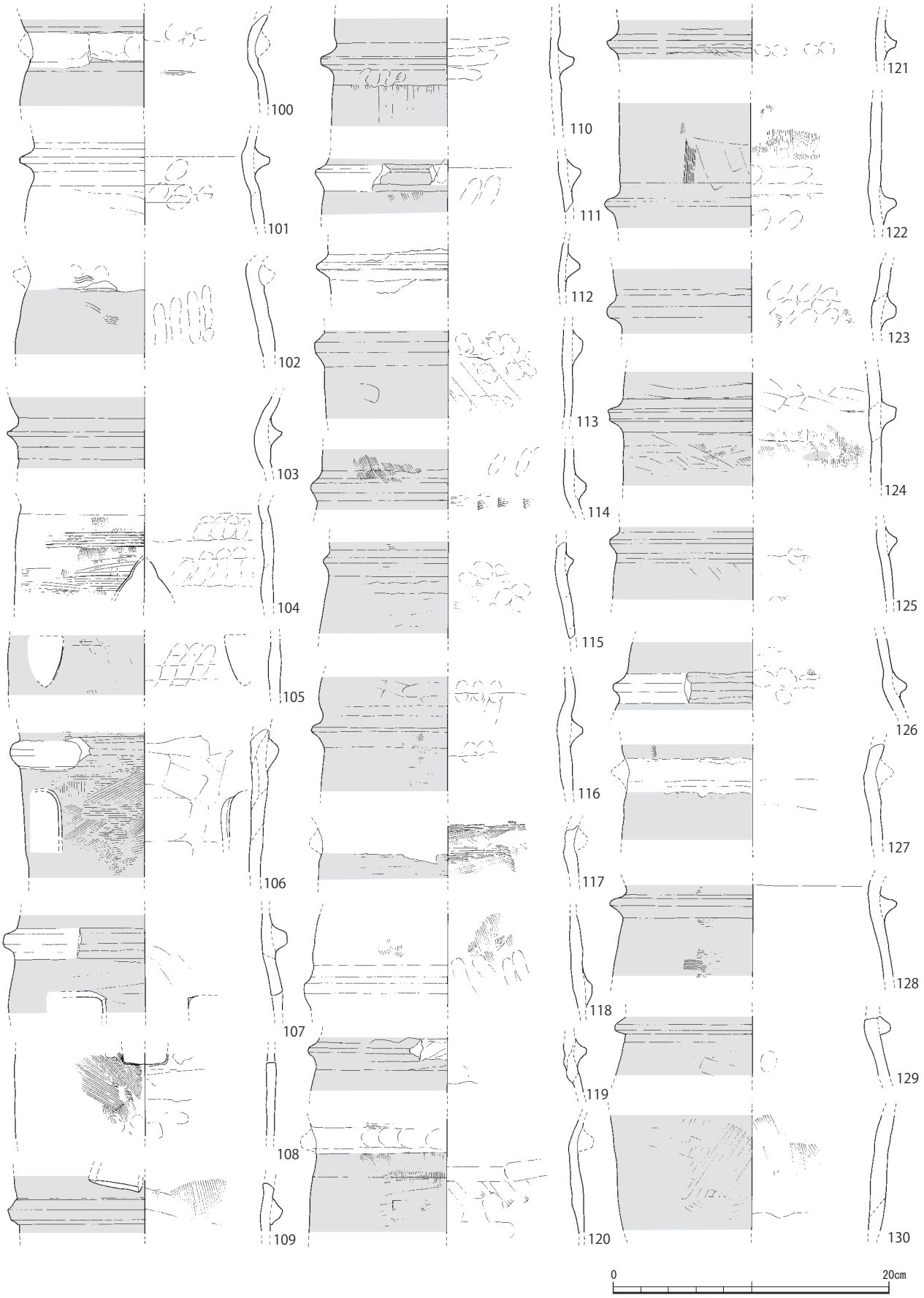
円筒埴輪Ｃ３類（第 18 図 86〜88）　基本的な形状はＣ１類と同様であるが、口縁端部を上方に摘み上げる一群である。Ｃ３類すべての口縁部内面に赤彩が認められる。87 は口縁部内面の頸部付近まで赤彩が観察されるが、86・88 の赤彩は口縁部内面の上半部のみである。なお、88 の頸部外面には、突帯剥離面に 68 と同じ亀裂が残っている。

円筒埴輪Ｃ４類（第 18 図 89・90）　基本的な形状はＣ１類と同様で、口縁端部に平坦面をもつものである。89 は、Ｃ１〜３類に比べて頸部の屈曲が緩やかで、胴部はやや直線的で、一辺３㎝の方形透孔が１ヶ所残存する。

円筒埴輪Ｄ類（第 19 図 91〜99）　全体的に器壁が厚く、直線的で短い口縁部をもつ一群で、円筒埴輪Ａ１類と基本的な形状は類似する。口縁部径が広い個体が多いことから、大型品の底部と接合する可能性が高い。91 は体部外面に縦方向の粗いハケメがみられる。93 は短く外反する口縁部で、頸部の屈曲はない。98・99 は口縁端部のみ残存するが、器壁の厚



第 19 図　出土遺物実測図（６）（1：4）



第 20 図　出土遺物実測図（7）（1：4）

さから円筒埴輪Ｄ類に分類した。

【各分類の詳細　円筒埴輪胴部・底部】

円筒埴輪Ｂ～Ｃ類（中型）（第 20・21 図 100～153）100～102 は、肩部の第４段に相当する。100 は口縁端部が欠損している。104～109 は透孔が残存しており、104 は三角形、105 は逆三角形、106～108 は方形、109 は三角形もしくは方形である。いずれの透孔も完形ではないため全体の大きさはわからないが、108 は底辺が残存しており一辺 3.2 ㎝である。方形の透孔は、突帯の下に穿たれていることから第２～４段であることがわかる。110～130 は胴部片、131～153 は底部片である。底部片は、小型品と同じく２種類に大別され、器壁が薄く、直立気味に立ち上がる 131～136 と、器壁が厚ぼったい 137～153 に大別される。外面調整は粗い板ナデが主体で、赤彩は見られない。

円筒埴輪Ｂ～Ｃ類（大型）（第 22 図 154～173）　底部径が 20 ㎝以上のものを大型品としたが、中型品との形態的な差異は見出すことができない。156 は胴部内面にも赤彩が付着する。159～161 は方形の透孔

第 21 図　出土遺物実測図（８）（1：4）

をもつもので、大型の円筒埴輪には方形の透孔が伴うようである。159 は唯一ヘラ記号をもつ埴輪で、記号の下部は欠損しているが、方形の透孔に接するように記されている。160 の透孔は底辺が残存しており、一辺 4.4 ㎝である。162～173 は底部片で、赤彩は認められない。底辺は概ね器壁が厚く、内外面ともに板ナデ調整が観察される。

【各分類の詳細　円筒埴輪　その他】

円筒埴輪その他（第 23 図 174～190）　174～182 は透孔をもつ破片。174～176 は方形で、隅もしくは方形の一辺が残存している。177～180 は円形で、概ね直径３㎝である。181・182 は小孔で、竹管状の工具で穿孔したことが想定され、小型の円筒埴輪に伴う可能性が高い。176～178 は、透孔の断面にも赤彩が認められ、丁寧に塗布されていたことがわかる。

182～184 は埴輪の胴部と突帯、185～190 は剥離した突帯で、実測図を掲載したもの以外にも多くの突帯が出土している。断面形は方形に近いが、明確に稜をもつものではなく、緩やかに摘み上げられている。188 や 189 の突帯内面にはヨコナデによって上下を押圧した痕跡が認められる（写真９）。

（５）古式土師器

古式土師器（第 23 図 192～198）　192～198 は、飛塚古墳に伴う可能性が高い遺物であるが、断定はできない。

192～195 は高坏の脚柱部である。脚柱部は計５点出土しており、このうち４点の実測図を掲載した。いずれも脚柱部のみで、坏部と裾部は欠損している。外面調整は磨滅しているが、192・194 はわずかにタテハケが残存している。比較的残りのいい 194・195 は脚柱部がわずかに膨らむ屈折脚高坏で、松河戸Ⅰ式に併行する。[10] 196 は小型丸底壺の底部片で、内外面ともにナデ調整である。197 は壺もしくは甕で、口縁部は直線的に立ち上がり、内面に板ナデの痕跡が観察される。198 は、口縁部の形態は円筒埴輪Ｃ３類と類似するが、頸部に突帯が巡らない点と口縁部径が小さい点から土器として掲載した。赤彩が塗布されているため、飛塚古墳に伴っていた可能性が非常に高い。

写真９　剥離した突帯の内側

４　古墳時代の遺物

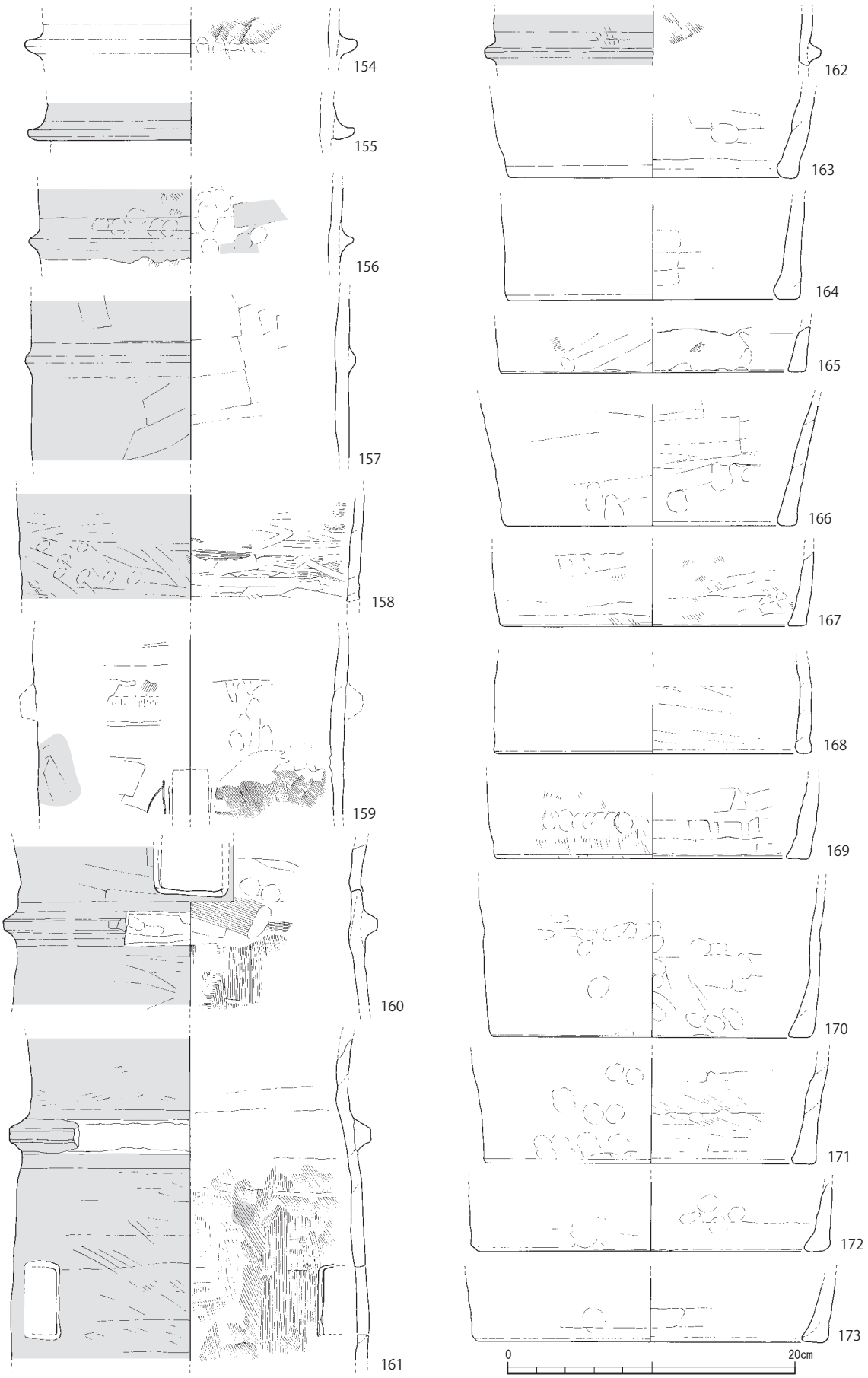
朝顔形円筒埴輪（第 23 図 198）　窯で焼成されたとみられる朝顔形埴輪が１点のみ出土した。飛塚古墳の埴輪群と比べて規格・調整・赤彩などに大きく相違が認められ、窯による焼成は４世紀代まで遡らせることが厳しいことから、この１点は飛塚古墳に伴っていた埴輪ではないと判断した。外面は細かいタテハケで、内面にも外面と同一の原体によるヨコハケが認められる。突帯はロクロ成形で貼り付けられ、窯による焼成であることから川西編[11]年のⅣ～Ⅴ期に相当し、時期は古墳時代中期と考えられる。

５　中世の遺物

ＳＤ１ほか出土遺物（第 23 図 200～217）　ＳＤ１や包含層、範囲確認調査出土資料である。いずれも流路出土資料で、遺構に伴うものではないため、ここでは器種ごとにまとめて掲載した。

200～202 は土師器小皿、203 は土師器皿である。土師器小皿は中・北勢土師器の伊藤編[12]年Ⅱａ期に相当し、時期は 13 世紀前半頃である。

204～216 は山茶碗である。204 は最も古く、高台の形状から尾張型の藤澤編[13]年第３～４型式と考えられ、底部外面に籾殻圧痕はみられない。205・206 は渥美型の口縁部片か。207～216 は尾張型で、207・208 はいわゆる山皿、209～216 は椀である。207～212 は概ね第５型式、213～215 は第６型式、216 は第８型式である。このうち、210・211・213 は底部外面に籾殻圧痕が観察される。217 は青磁碗で、大宰府編[14]年の龍泉窯Ⅰ－１期に相当し、時期は 12 世紀頃である。



第 22 図　出土遺物実測図（9）（1：4）

〔 註 〕

（1）弥生時代後期の土器編年や時期的変遷について、下記の文献を参考とした。
・上村安生 2002「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
・赤塚次郎 2001「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡　考察編』愛知県埋蔵文化財センター

（2）川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 号第２巻 日本考古学会

（3）財団法人大阪文化財センター1985『美園』

（4）松阪市教育委員会・松阪市文化財センター2005『史跡 宝塚古墳』

（5）宮本長二郎 1995「建築史としての家形埴輪」『日本の美術 家形はにわ』No. 348 至文堂

（6）前掲註（5）に同じ。

（7）三重県埋蔵文化財センター2002『堀田第３～５次調査』

（8）前掲註（2）に同じ。

（9）前掲註（2）に同じ。

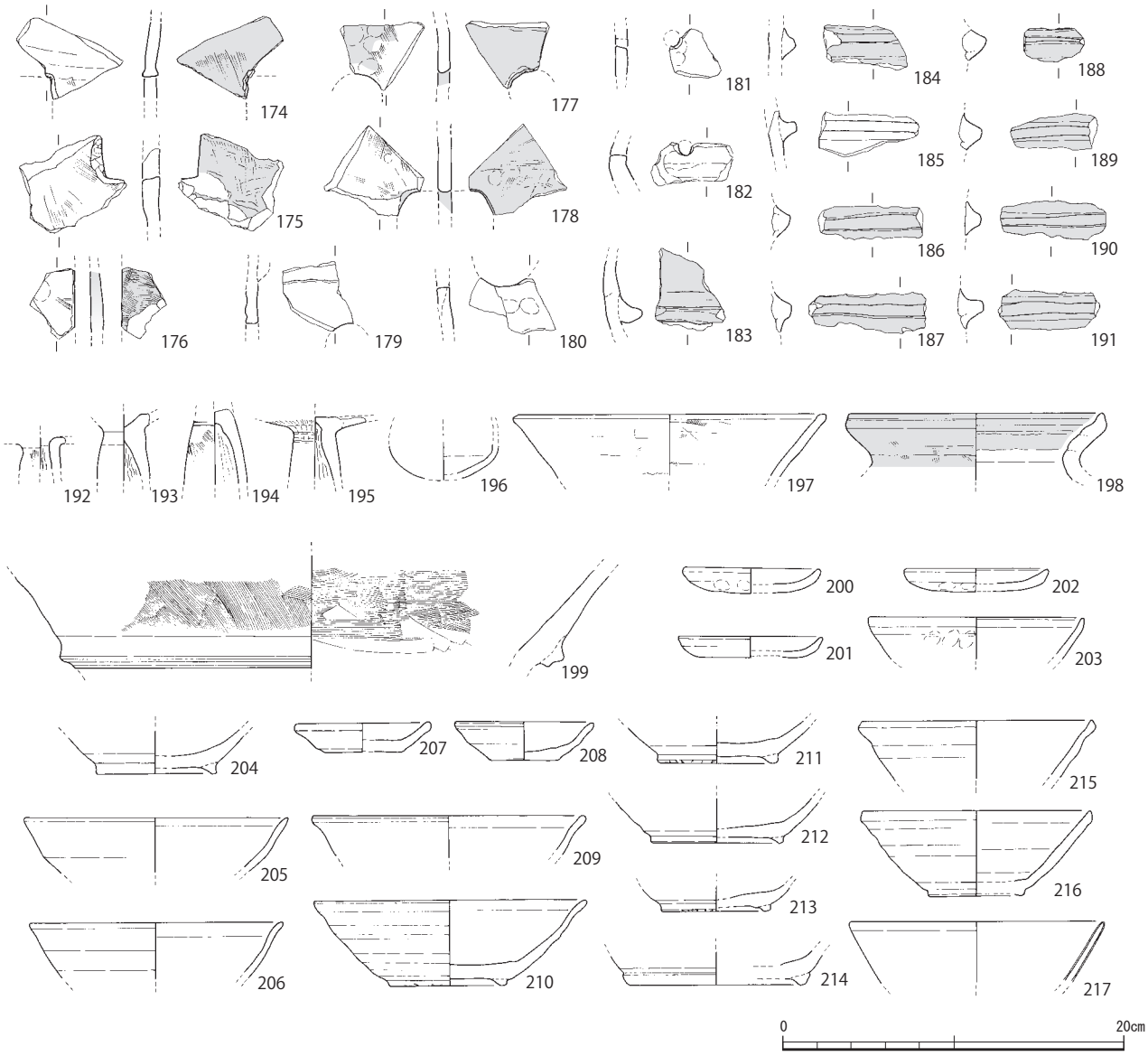
(10) 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第２号（財）愛知県埋蔵文化財センター

(11) 前掲註（2）に同じ

(12) 伊藤裕偉 2008「中北勢地域の中世土器」『三重県史』資料編 考古２

(13) 藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号 三重県埋蔵文化財センター

(14) 横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』４九州歴史資料館／太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－』



第 23 図　出土遺物実測図（10）（1：4）

第２表　出土遺物観察表（１）

報告番号	実測番号	器種・質・分類等		区	地点	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	031 -01	弥生土器	高坏	Ｂ区	－	SH5	(口)23.2	外:ハケメ→ミガキ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→ミガキ→口縁部ヨコナデ	密	外:10YR6/6明黄褐 内:7.5YR6/6橙	口縁部 3/12	
2	031 -02	弥生土器	高坏	Ｂ区	－	SH5	(脚柱)4.3 (底)11.7	外:ハケメ→ミガキ 内:ハケメ→シボリメ	密	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	脚柱部 12/12	四方スカシ(径約1.1cm)２ヵ所残存 裾部残存3/12
3	031 -04	弥生土器	高坏	Ｂ区	－	SH5	(脚柱)3.2	外:ハケメ→ミガキ 内:板ナデ→シボリメ	密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	基部 12/12	
4	031 -03	弥生土器	高坏	Ｂ区	－	SH5	(口)10.8 (脚柱)2.8	外:ミガキ→施文→口縁部ヨコナデ 内:ナデ・ミガキ→口縁部ヨコナデ	密	内外:10YR8/3浅黄橙	裾部 12/12	櫛描直線文４～５本単位、刺突文
5	046 -07	弥生土器	甕	Ｂ区	－	SH5	小片	外:ハケメ→櫛描直線文・列点文 内:オサエ・ナデ	密	外:10YR3/1黒褐 内:10YR7/2にぶい黄橙	肩部片	近江系か 外面に煤付着
6	031 -05	弥生土器	壺か	Ｂ区	－	SH5	(底)3.6	外:オサエ・ナデ→ハケメ 内:板ナデ	密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	底部 8/12	
7	003 -03	家形埴輪	壁	Ａ区	－	包含層	(幅)13.0 (高)12.1	外:タテハケ→ナデ→板ナデ 内:タテハケ→オサエ・ナデ→板ナデ	やや密	外:10YR8/3浅黄橙 内:2.5Y7/2灰黄	小片	外面に縦方向の線刻、厚み1.7cm 赤彩:外面全面
8	003 -02	家形埴輪	庇	Ａ区	h8	SD4付近	(幅)14.8 (高)9.4	外:タテハケ→ナデ 内:タテハケ→ヨコハケ→ナデ	やや密	外:10YR8/3浅黄橙 内:2.5Y7/2灰黄	小片	外面に縦方向の線刻、厚み1.6cm 赤彩:外面全面(庇内面含む)
9	003 -01	家形埴輪	庇	Ａ区	h7	包含層	(幅)24.8 (高)9.5	外:ハケメ→ナデ 内:タテハケ→ナナメハケ→オサエ・ナデ	やや密	外:7.5YR7/4にぶい黄橙 内:10YR8/4浅黄橙	小片	外面に縦方向の線刻、厚み1.7cm 赤彩:外面全面(庇内面含む)
10	038 -01	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ｂ区	－	SR8 北	(口)23.8	外:口縁部ヨコナデ 内:口縁部ヨコナデ	やや密	外:10YR8/6黄橙 内:7.5YR7/4にぶい橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部内面(外面磨滅？)
11	035 -04	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ｂ区	－	SR8 北	(口)25.0	外:板ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	内外:10YR7/2にぶい黄橙	口縁部 1/12	
12	040 -05	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)24.5	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:剥離	やや密	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部 2/12	赤彩:口縁部外面
13	006 -03	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ａ区	f3	SD1 暗灰色土	(口)23.5	外:板ナデ→口縁端部ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ	密	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR6/6橙	口縁部 1/12	
14	037 -05	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ｂ区	－	SR8 北	(口)24.0	外:口縁部ヨコナデ 内:口縁部ヨコナデ	密	内外:10YR8/3浅黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部内外面
15	036 -01	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ｂ区	－	SR8 北	(口)26.0	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ	やや密	内外:5YR7/6橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部外面
16	036 -02	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ｂ区	－	SR8 北	(口)26.0	外:ヨコナデ 内:風化	やや密	内外:7.5YR8/6浅黄橙	口縁部 2/12	赤彩:口縁部内外面
17	007 -01	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ａ区	h8	暗褐色 砂質土	(口)27.6	外:板ナデ→口縁端部ヨコナデ 内:ナデ	密	内外:7.5YR8/6浅黄橙	口縁部 1/12	
18	017 -05	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ａ区	g6	SD1 暗灰色土	(擬口縁) 18.0	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	内外:5YR7/4にぶい橙	胴部 1/12	
19	013 -02	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ａ区	g3	包含層	(胴)18.0	外:ヨコナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:7.5YR8/4浅黄橙 内:7.5YR8/6浅黄橙	胴部 1/12	赤彩:口縁部外面
20	042 -04	壺形埴輪	壺形Ａ１類	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)23.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや密	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 小片	赤彩:口縁部内面
21	006 -02	壺形埴輪	壺形Ａ２類	Ａ区	j9	SD4	(口)23.4	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ	密	外:7.5YR8/6浅黄橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部 1/12	
22	013 -01	壺形埴輪	壺形Ａ２類	Ａ区	g3	包含層	(擬口縁) 約20.0	外:板ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ナデ	密	外:5YR5/6明赤褐 内:7.5YR7/6橙	胴部 1/12	赤彩:口縁部外面
23	008 -01	壺形埴輪	壺形Ａ２類	Ａ区	g3	包含層	(口)26.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	内外:7.5YR7/4にぶい橙	口縁部 2/12	赤彩:口縁部外面
24	006 -04	壺形埴輪	壺形Ｂ１類	Ａ区	j9	SD4	(口)23.4	外:オサエ・ハケメ→板ナデ→口縁端部ヨコナデ 内:板ナデ	密	外:5YR7/6橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部 1/12	突帯剥離 赤彩:口縁部外面
25	009 -01	壺形埴輪	壺形Ｂ２類	Ａ区	－	SR2 上面	小片	外:ナデ 内:ナデ	密	内外:10YR8/4浅黄橙	口縁部 2/12	赤彩:口縁部外面
26	014 -01	壺形埴輪	壺形	Ａ区	SR2 上面	包含層	(胴)19.0	外:板ナデ・ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	密	内外:10YR8/4浅黄橙	胴部 2/12	突帯剥離 赤彩:胴部外面
27	024 -01	壺形埴輪	壺形	Ａ区	f3	SD1 暗灰色土	(胴)25.0	外:板ナデ 内:板ナデ→オサエ・ナデ	やや密	外:5YR7/6橙 内:7.5YR7/4にぶい橙	胴部 2/12	方形スカシ１ヵ所残存 赤彩:胴部外面
28	007 -02	壺形埴輪か 古式土師器	壺	Ａ区	j9	SD4	(底)4.0	外:オサエ・ナデ 内:ハケメ	密	外:2.5YR7/6橙 内:10YR8/4浅黄橙	底部 3/12	底部穿孔
29	007 -03	壺形埴輪か 古式土師器	壺	Ａ区	g6	SD1 暗灰色土	(底)6.3	外:ナデ 内:ナデ	密	内外:10YR8/4浅黄橙	底部 3/12	底部穿孔の可能性あり
30	015 -05	円筒埴輪	円筒Ａ類	Ａ区	g6	包含層	(口)17.5	外:突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:2.5YR7/8橙 内:10YR8/4浅黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部内面
31	015 -04	円筒埴輪	円筒Ａ類	Ａ区	g6	包含層	(口)15.6	外:突帯貼付後ナデ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:口縁部ヨコナデ	密	外:7.5YR7/6橙 内:7.5YR7/4にぶい橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部～胴部外面
32	046 -05	円筒埴輪	円筒Ａ類	Ｃ区	－	SR8 南	(胴)15.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:剥離	密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
33	008 -02	円筒埴輪	円筒Ｂ１類	Ａ区	g6	SD1 暗灰色土	(口)18.6	外:ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:5YR7/6橙 内:7.5YR7/6橙	口縁部 3/12	赤彩:口縁部～胴部外面
34	025 -01	円筒埴輪	円筒Ｂ１類	Ａ区	f5	SD1 暗灰色土	(胴)15.8	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・板ナデ	やや粗	内外:5YR7/6橙	胴部 2/12	円形スカシ１ヵ所残存
35	040 -06	円筒埴輪	円筒Ｂ２類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)13.0	外:板ナデ→ハケメ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ→ナデ	やや密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部外面
36	042 -01	円筒埴輪	円筒Ｂ２類	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)14.0	外:オサエ・ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:10YR7/2にぶい黄橙	胴部 1/12	突帯剥離
37	025 -06	円筒埴輪	円筒Ｂ２類	Ａ区	f4	暗灰色土	(幅)3.0 (高)1.2	外:ヨコナデ 内:－	やや粗	内外:10YR7/4にぶい黄橙	突帯 小片	赤彩:外面 厚み:0.8cm
38	017 -03	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	g3	SD1 暗灰色土	(突帯) 16.4	外:突帯貼付後ナデ 内:ナデ	やや密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	突帯 1/12	
39	026 -05	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	g3	SD1 暗灰色土	(突帯) 17.0	外:突帯貼付後ナデ 内:板ナデ？	やや密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	突帯 1/12	赤彩:胴部外面
40	041 -03	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)15.0	外:突帯貼付後ナデ 内:ナデ	やや密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 小片	赤彩:胴部外面
41	032 -03	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｂ区	－	表土	(胴)17.0	外:ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ	密	外:7.5YR6/6橙 内:5YR6/6橙	胴部 1/12	
42	044 -02	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)16.0	外:突帯貼付後ナデ 内:板ナデ	密	外:10YR8/4浅黄橙 内:7.5YR8/3浅黄橙	胴部 2/12	赤彩:外面
43	028 -06	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	h8	SD1 暗灰色土	(胴)18.4	外:突帯貼付後ナデ 内:ナデ	密	内外:7.5YR7/6橙	胴部 1/12	
44	020 -04	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	g3	SD1 暗灰色砂	(胴)17.0	外:オサエ・ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:7.5YR8/4浅黄橙	胴部 2/12	
45	028 -05	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	f5	SD1 暗灰色土	(胴)15.6	外:板ナデ 内:ハケメ→板ナデ	密	内外:7.5YR7/6橙	胴部 2/12	赤彩:胴部外面に僅かに残存

第３表　出土遺物観察表（２）

報告番号	実測番号	器種・質・分類等		区	地点	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
46	036 -03	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)18.4	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ	やや密	内外:7.5YR7/4にぶい橙	胴部 2/12	赤彩:口縁部外面
47	034 -03	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)20.4	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ	やや密	内外:5YR7/4にぶい橙	胴部 2/12	赤彩:胴部外面
48	029 -01	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	f5	墳丘裾	(胴)18.6	外:オサエ→ナデ→突帯貼付後ナデ 内:ハケメ→オサエ→ナデ	密	内外:7.5YR7/6橙	胴部 2/12	方形スカシ１ヶ所残存
49	021 -02	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	g6	SD1 暗灰色土	(胴)17.0	外:板ナデ 内:剥離	やや密	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 小片	円形スカシ１ヵ所残存 赤彩:胴部外面
50	034 -01	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)18.0	外:ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 1/12	円形スカシ１ヶ所残存 赤彩:胴部外面
51	043 -02	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)20.8	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:ハケメ	密	外:5YR7/6橙 内:2.5Y8/2灰白	胴部 1/12	円形スカシ１ヶ所残存
52	021 -03	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	f5	SD1 暗灰色土	(胴)15.8	外:オサエ・ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	外:10YR7/2にぶい黄橙 内:7.5YR7/4にぶい橙	胴部 小片	スカシ小孔(径約1cm) 赤彩:胴部外面
53	020 -05	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(胴)18.0	外:板ナデ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:2.5Y7/2灰黄 内:10YR7/2にぶい黄橙	胴部 1/12	スカシ小孔(径1.1～1.4cm)
54	016 -02	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	g2	SD1 暗灰色土	(底)15.7	外:オサエ・ナデ→板ナデ 内:板ナデ	やや密	外:2.5Y7/2灰黄 内:10YR6/3にぶい黄橙	底部 2/12	
55	019 -01	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	g3	SD1 暗灰色砂	(底)15.0	外:板ナデ 内:板ナデ	やや密	内外:10YR7/2にぶい黄橙	底部 2/12	底部にハケ状工具残る
56	012 -02	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	g2	SD1 暗灰色土	(底)15.4	外:ハケメ→板ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:10YR8/3浅黄橙 内:2.5Y6/3にぶい黄	底部 2/12	底部に板状工具痕残る
57	027 -03	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	－	包含層	(底)14.6	外:板ナデ内:板ナデ	やや粗	内外:10YR7/4にぶい黄橙	底部 1/12	
58	037 -03	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｂ区	－	SR8 南	(底)16.0	外:板ナデ・ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや粗	内外:10YR8/2灰白	底部 2/12	
59	024 -02	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	f3	SD1 暗灰色土	(底)14.9	外:オサエ・ナデ・板ナデ 内:オサエ・ナデ・板ナデ	粗	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	底部 2/12	
60	045 -01	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｃ区	－	SR8 北	(底)14.8	外:ナデ 内:板ナデ?	密	外:2.5Y7/2灰黄 内:10YR7/4にぶい黄橙	底部 2/12	
61	023 -03	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ａ区	g2	SD1 暗灰色土	(底)14.8	外:オサエ・ナデ 内:板ナデ	やや密	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:2.5Y7/3浅黄	底部 1/12	方形スカシ１ヵ所残存 底部に工具の当たり痕残る
62	045 -04	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｂ類	Ｃ区	－	SR8 北	(底)14.4	外:板ナデ→ハケメ 内:板ナデ	密	内外:10YR8/4浅黄橙	底部 3/12	
63	032 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ｂ区	－	表土	(口)19.5	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→ナデ→口縁部ヨコナデ	密	内外:7.5YR7/6橙	胴部 2/12	赤彩:口縁～胴部外面
64	026 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ａ区	－	SR3	(口)19.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや粗	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	突帯剥離 赤彩:胴部～口縁部外面
65	001 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ａ区	g3	包含層	(口)21.0	外:板ナデ→口縁部ヨコナデ→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ・ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:10YR6/3にぶい黄橙	口縁部 2/12	三角スカシ１ヶ所残存 赤彩:口縁部内外面、胴部外面
66	027 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ａ区	－	包含層	(口)21.6	外:突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→ナデ	やや粗	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:7.5YR7/6橙	口縁部 2/12	突帯剥離 赤彩:口縁部外面
67	025 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ａ区	f6	SD1 暗灰色土	(口)22.2	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→ハケメ	粗	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	突帯剥離
68	039 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)21.3	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや密	外:2.5Y7/3浅黄 内:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部内外面、胴部外面
69	004 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ａ区	g3	包含層	(口)21.5	外:ハケメ→板ナデ→口縁部板ナデ 内:板ナデ→口縁部板ナデ	密	外:5YR5/4にぶい赤褐 内:2.5Y8/3淡黄	口縁部 1/12	赤彩:口縁～胴部外面、内面にも僅かに付着
70	018 -05	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ａ区	g5	SD1 暗灰色土	(口)19.0	外:突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	内外:7.5YR7/3にぶい橙	口縁部 1/12	赤彩:胴部外面に僅かに残存
71	046 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)19.0	外:ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ	密	内外:10YR8/4浅黄橙	口縁部 1/12 以下	赤彩:口縁部内外面
72	025 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(口)17.4	外:突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:剥離	やや粗	内外:2.5YR7/4淡赤橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部外面
73	033 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ｂ区	－	SR8 南	(口)19.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	内外:10YR7/4にぶい黄橙 赤彩:5YR5/4にぶい赤褐	口縁部 1/12	突帯剥離 赤彩:口縁部内外面
74	013 -05	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ａ区	g3	包含層	(口)20.0	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:10YR8/3浅黄橙 内:10YR8/2灰白	口縁部 1/12	赤彩:口縁部外面
75	018 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ１類	Ａ区	g3	SD1 暗灰色砂	(口)19.2	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ・オサエ	やや密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部外面、 口縁部端部内面
76	032 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ｂ区	－	SD4	(口)19.6	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	内外:5YR6/6橙 赤彩:2.5YR5/6明赤褐	口縁部 2/12	赤彩:口縁～胴部外面
77	020 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ａ区	f5	SD1 暗灰色土	(口)19.6	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ→口縁部板ナデ 内:ナデ→板ナデ	やや密	内外:10YR7/3にぶい黄橙 赤彩:2.5YR5/4にぶい赤褐	口縁部 1/12	突帯剥離 赤彩:口縁部内面に僅かに残存
78	019 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ａ区	g5	SD1 暗灰色土	(口)22.6	外:突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや密	外:2.5Y5/1黄灰 内:7.5YR7/4にぶい橙	口縁部 1/12	突帯剥離 赤彩:口縁部外面
79	017 -06	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ａ区	g6	SD1 暗灰色土	(口)19.0	外:ヨコナデ 内:ナデ	やや粗	内外:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	突帯剥離 赤彩:口縁部外面
80	037 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ｂ区	－	SR8 北	(口)20.0	外:突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	内外:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 2/12	突帯剥離 赤彩:外面
81	036 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ｂ区	－	SR8 南	(口)20.0	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部 2/12	赤彩:口縁部内外面、胴部外面
82	010 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ａ区	j9	SD4	(口)21.8	外:ヨコナデ→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ・ハケメ→オサエ・ナデ	密	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:2.5Y7/2灰黄	口縁部 2/12	突帯剥離 赤彩:口縁部外面
83	033 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ｂ区	－	SR8 南	(口)19.4	外:突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁～胴部外面
84	015 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ａ区	g6	包含層	(口)16.5	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:7.5YR7/6橙	口縁部 2/12	赤彩:口縁部内面
85	040 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ２類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)17.4	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:2.5Y7/2灰黄 内:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	突帯剥離
86	032 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ３類	Ｂ区	－	SR8	(口)22.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→板ナデ	密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 3/12	突帯剥離 赤彩:口縁部内外面、胴部外面
87	001 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ３類	Ａ区	－	SD4	(口)21.4	外:口縁部ヨコナデ→突帯貼付後ナデ 内:ハケメ→口縁部板ナデ	やや密	内外:10YR7/3にぶい黄橙 赤彩:2.5YR5/4にぶい赤褐	口縁部 3/12	突帯剥離 赤彩:口縁部内外面、胴部外面
88	004 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ３類	Ａ区	g3	SD1 暗灰色土	(口)22.4	外:ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	内外:7.5YR7/4にぶい橙 赤彩:10R4/6	口縁部 2/12	赤彩:口縁部内外面、胴部外面
89	039 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ４類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)21.4	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや密	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	方形スカシ１ヵ所残存 赤彩:口縁部外面、胴部外面
90	045 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ４類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)20.5	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ	密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部外面

第４表　出土遺物観察表（３）

報告番号	実測番号	器種・質・分類等	区	地点	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
91	035 -05	円筒埴輪　円筒Ｄ類	Ｂ区	－	SR8 北	(口)19.2	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ	密	内外:10YR8/3浅黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部内外面、胴部外面
92	039 -02	円筒埴輪　円筒Ｄ類	Ｂ区	－	SR8 北	(口)23.6	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ→口縁部板ナデ	やや密	内外:10YR7/4にぶい黄橙 赤彩:2.5YR6/6橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部内外面・胴部外面
93	025 -03	円筒埴輪　円筒Ｄ類	Ａ区	f6	SD1 暗灰色土	(口)21.2	外:板ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ	やや粗	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:2.5Y7/2灰黄	口縁部 1/12	突帯剥離 赤彩:口縁～胴部外面
94	009 -02	円筒埴輪　円筒Ｄ類	Ａ区	g3	包含層	(口)21.8	外:ヨコナデ→突帯貼付後ナデ 内:ナデ	密	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部外面
95	018 -01	円筒埴輪　円筒Ｄ類	Ａ区	h8	SD1 暗灰色土	(口)17.8	外:ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ・ハケメ	やや粗	内外:10YR4/4褐	口縁部 1/12	赤彩:口縁～胴部外面
96	028 -03	円筒埴輪　円筒Ｄ類	Ａ区	試掘	№5	(口)19.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→ナデ	密	外:7.5YR8/6浅黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部内外面
97	040 -01	円筒埴輪　円筒Ｄ類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)18.8	外:板ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	内外:2.5Y7/2灰黄	口縁部 2/12	赤彩:口縁部内外面
98	040 -03	円筒埴輪　円筒Ｄ類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)19.0	外:板ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	内外:10YR8/3浅黄橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部内外面
99	040 -02	円筒埴輪　円筒Ｄ類	Ｃ区	－	SR8 北	(口)20.4	外:板ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	内外:10YR7/3にぶい黄橙 赤彩:5YR6/3にぶい橙	口縁部 1/12	赤彩:口縁部外面
100	042 -03	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)18.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 1/12	突帯剥離 赤彩:胴部外面
101	012 -05	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g3	包含層	(胴)16.0	外:ハケメ→板ナデ→口縁部板ナデ 内:板ナデ→オサエ	密	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:7.5YR8/6浅黄橙	胴部 2/12	
102	042 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)18.6	外:ハケメ→板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:2.5Y7/3浅黄	胴部 2/12	突帯剥離 赤彩:胴部外面
103	016 -03	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g2	SD1 灰色土	(胴)18.4	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ 内:ナデ	粗	内外:7.5YR7/4にぶい橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
104	014 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g3	包含層	(胴)18.8	外:ハケメ→板ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:7.5YR8/4浅黄橙 内:7.5YR7/6橙	胴部 3/12	三角スカシ１ヶ所残存
105	014 -04	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g3	包含層	(胴)19.8	外:ハケメ→ナデ 内:ナデ→板ナデ	密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 1/12	逆三角スカシ？１ヶ所残存 赤彩:胴部外面
106	033 -01	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｂ区	－	SR8 南	(胴)18.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ	密	外:7.5YR8/4浅黄橙 内:10YR8/3浅黄橙	胴部 2/12	方形スカシ１ヵ所残存 赤彩:胴部外面
107	038 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｂ区	－	SR8 南	(胴)19.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ	やや密	外:7.5YR8/4浅黄橙 内:10YR7/2にぶい黄橙	胴部 1/12	方形スカシ１ヵ所残存 赤彩:胴部外面
108	021 -01	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(胴)19.0	外:板ナデ→ハケメ 内:板ナデ→オサエ・ナデ	やや密	外:2.5Y7/3浅黄 内:2.5Y7/2灰黄	胴部 1/12	方形スカシ１ヵ所残存
109	011 -01	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	j9	暗褐色土	(胴)18.6	外:突帯貼付後ナデ 内:板ナデ→ハケメ	密	内外:10YR6/3にぶい黄橙	胴部 1/12 以下	方形スカシ１ヶ所残存 赤彩:胴部外面
110	010 -03	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g3	包含層	(胴)16.8	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 2/12	赤彩:胴部外面
111	044 -01	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)18.0	外:突帯貼付後ナデ 内:板ナデ	密	内外:7.5YR7/6橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
112	020 -03	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	f5	SD1 暗灰色土	(胴)17.0	外:突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:10YR8/3浅黄橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 2/12	
113	011 -03	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	j9	SD4	(胴)18.0	外:板ナデ？→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ→オサエ・ナデ	やや密	外:5YR7/6橙 内:7.5YR7/3にぶい橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
114	043 -01	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)18.4	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:10YR8/4浅黄橙 内:10YR8/3浅黄橙	胴部 2/12	赤彩:胴部外面
115	018 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g3	SD1 暗灰色土	(胴)18.6	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・板ナデ	やや粗	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:2.5Y7/1灰白	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
116	035 -03	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)18.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	内外:10YR8/4浅黄橙	胴部 2/12	赤彩:胴部外面
117	011 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	－	SD4	(胴)18.9	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:ハケメ・板ナデ	密	外:10YR7/2にぶい黄橙 内:10YR6/3にぶい黄橙	胴部 1/12	突帯剥離 赤彩:胴部外面
118	012 -04	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g3	包含層	(胴)19.6	外:ハケメ→ナデ→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ→ハケメ→ナデ	密	外:7.5YR8/6浅黄橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 1/12	
119	043 -03	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)19.0	外:ナデ→突帯貼付後ナデ 内:剥離	密	外:7.5YR8/6浅黄橙 内:7.5YR8/4浅黄橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
120	010 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g3	包含層	(胴)20.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 1/12	突帯剥離 赤彩:胴部外面
121	018 -04	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g3	SD1 暗灰色砂	(胴)19.4	外:突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	内外:10YR8/2灰白	胴部 2/12	赤彩:胴部外面
122	041 -01	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)19.0	外:突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR8/4浅黄橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
123	013 -03	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	－	包含層	(胴)19.8	外:突帯貼付後ナデ 内:ハケメ→オサエ→ナデ	密	外:10YR8/4浅黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
124	004 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	－	SD4	(胴)18.8	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:ハケメ→ナデ→板ナデ	密	外:2.5Y5/6赤 内:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 2/12	赤彩:胴部外面
125	026 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	－	SR2	(胴)20.2	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:ハケメ	やや粗	外:7.5YR8/3浅黄橙 内:5YR7/4にぶい橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
126	034 -04	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)19.6	外:ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・板ナデナデ	やや粗	内外:5YR7/6橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
127	020 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(胴)18.4	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:10YR7/2にぶい黄橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 1/12	突帯剥離 赤彩:胴部外面
128	034 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)19.0	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ 内:ナデ？	やや密	内外:10YR8/4浅黄橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
129	009 -03	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ａ区	g3	包含層	(胴)20.0	外:ナデ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
130	036 -05	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　胴部	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)20.0	外:ハケメ 内:ハケメ・板ナデ	やや密	外:7.5YR7/3にぶい橙 内:10YR7/2にぶい黄橙	胴部 2/12	赤彩:胴部外面
131	016 -01	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g2	SD1 暗灰色土	(底)17.8	外:オサエ・ナデ→板ナデ 内:板ナデ？	やや粗	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:2.5Y6/2灰黄	底部 1/12	底部に板状工具の当たり痕残る
132	023 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	f5	SD1 暗灰色土	(底)17.2	外:オサエ・ナデ→板ナデ 内:板ナデ(下から上方向)	やや密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	底部 1/12	
133	017 -04	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(底)18.0	外:板ナデ→オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや粗	外:7.5YR6/3にぶい褐 内:5YR7/4にぶい橙	底部 1/12	
134	015 -02	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g6	包含層	(底)17.9	外:オサエ→ハケメ→板ナデ 内:オサエ→板ナデ	密	内外:7.5YR7/6橙	底部 2/12	赤彩:底部
135	015 -01	円筒埴輪　円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g5	SD1 暗灰色土	(底)18.8	外:オサエ→ハケメ→板ナデ→ナデ 内:オサエ→板ナデ	密	外:2.5Y7/2灰黄 内:10YR7/3にぶい黄橙	底部 1/12	

第５表　出土遺物観察表（４）

報告番号	実測番号	器種・質・分類等		区	地点	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
136	019 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g5	SD1 暗灰色土	(底)18.0	外:オサエ→板ナデ 内:板ナデ	やや粗	外:7.5YR7/6橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	底部 1/12	底部に板状工具の当たり痕残る
137	037 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ｂ区	－	SR8 南	(底)19.0	外:板ナデ 内:オサエ・ナデ→板ナデ	やや粗	外:10YR8/3浅黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	底部 2/12	
138	017 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g3	SD1 暗灰色土	(底)19.6	外:板ナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや粗	外:7.5YR6/6橙 内:7.5YR5/4にぶい褐	底部 1/12	底部に板状工具の当たり痕残る
139	013 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g3	包含層	(底)16.0	外:ハケメ→ナデ 内:板ナデ→オサエ	密	外:2.5Y8/3淡黄 内:2.5Y7/3浅黄	底部 1/12	
140	012 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g3	包含層	(底)17.0	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:7.5YR8/6浅黄橙 内:10YR8/3浅黄橙	底部 1/12	
141	024 -05	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	f3	SD1 暗灰色土	(底)17.0	外:板ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	外:10YR7/2にぶい黄橙 内:7.5YR4/4褐	底部 2/12	
142	016 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g3	SD1 暗灰色土	(底)18.0	外:オサエ・ナデ→板ナデ 内:板ナデ	やや粗	外:5YR6/3にぶい橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	底部 1/12	底部に工具の当たり痕残る
143	025 -05	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g3	包含層	(底)17.0	外:オサエ・板ナデ 内:板ナデ	やや粗	内外:7.5YR7/6橙	底部 1/12	
144	023 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	f5	SD1 暗灰色土	(底)18.4	外:オサエ・ナデ 内:板ナデ→オサエ・ナデ	やや密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	底部 1/12	底部に工具の当たり痕残る
145	022 -05	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	F3	SD1 暗灰色土	(底)17.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:2.5Y7/3浅黄	底部 2/12	
146	017 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g3	SD1 暗灰色土	(胴)18.4	外:ハケメ・ナデ 内:板ナデ	やや粗	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR6/2灰黄褐	底部 1/12	
147	019 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g5	SD1 暗灰色土	(底)19.0	外:板ナデ 内:板ナデ	やや密	外:10YR7/2にぶい黄橙 内:5YR7/6橙	底部 1/12	方形スカシ１ヵ所残存
148	044 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ｃ区	－	SR8 北	(底)18.0	外:板ナデ 内:板ナデ	密	外:7.5YR7/6橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	底部 1/12	
149	027 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g2	SD1 暗灰色土	(底)19.0	外:オサエ・板ナデ 内:板ナデ	やや密	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	底部 1/12	
150	023 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	g2	SD1 暗灰色土	(底)18.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:2.5Y7/6明黄褐 内:10YR7/6明黄褐	底部 1/12	
151	022 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	f5	SD1 暗灰色土	(底)18.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:2.5Y7/2灰黄 内:10YR7/3にぶい黄橙	底部 1/12	
152	026 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ａ区	f6	墳丘裾	(底)18.6	外:板ナデ 内:板ナデ	やや密	内外:2.5Y7/2灰黄	底部 2/12	
153	035 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ類 中型　底部	Ｂ区	－	SR8 北	(底)20.0	外:オサエ・ナデ 内:板ナデ	やや粗	内外:10YR8/4浅黄橙	底部 1/12	
154	041 -05	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　胴部	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)20.4	外:突帯貼付後ナデ 内:ハケメ→オサエ	やや密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 2/12	
155	041 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　胴部	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)20.0	外:突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 小片	赤彩:胴部外面
156	016 -05	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　胴部	Ａ区	g3	SD1 暗灰色土	(胴)21.0	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ 内:オサエ→板ナデ	やや粗	内外:7.5YR8/4浅黄橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面に僅かに残存
157	041 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　胴部	Ｂ区	－	SR8 北	(胴)22.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ	やや密	内外:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 2/12	赤彩:胴部外面
158	006 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　胴部	Ａ区	j9	SD4	(胴)23.8	外:オサエ→板ナデ 内:ハケメ→板ナデ	密	外:10R6/4にぶい赤橙 内:10YR6/3にぶい黄橙	胴部 2/12	赤彩:胴部外面
159	002 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　胴部	Ａ区	北西端	包含層	(胴)約22.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:ハケメ→板ナデ→オサエ・ナデ	やや密	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 2/12	方形スカシ、ヘラ記号、突帯剥離 赤彩:胴部外面に僅かに残存
160	001 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　胴部	Ａ区	－	SD4	(胴)約24.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ 内:ハケメ→オサエ・ナデ	やや密	外:10YR7/2にぶい黄橙 内:10YR6/3にぶい黄橙	胴部 2/12	方形スカシ１ヶ所残存 赤彩:胴部外面
161	005 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　胴部	Ａ区	j9	SD4	(胴)25.0	外:板ナデ→突帯貼付後ナデ→ナデ 内:板ナデ→ハケメ→ナデ	密	外:10R5/6赤 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 2/12	方形スカシ１ヶ所残存 赤彩:胴部外面、内面僅かに残存
162	046 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　胴部	Ｃ区	－	SR8 北	(胴)22.0	外:ハケメ→突帯貼付後ナデ 内:板ナデ	密	外:10YR8/3浅黄橙 内:10YR8/4浅黄橙	胴部 1/12	赤彩:胴部外面
163	035 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ｂ区	－	SR8 北	(底)20.0	外:板ナデ 内:板ナデ	やや粗	内外:7.5YR7/6橙	底部 1/12	
164	034 -05	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ｂ区	－	SR8 北	(底)20.0	外:板ナデ 内:板ナデ	やや密	外:10YR5/2灰黄褐 内:10YR5/1褐灰	底部 1/12	
165	022 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(底)21.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:2.5Y7/3浅黄	底部 2/12	
166	008 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ａ区	g6, g3	SD1 暗灰色土	(底)19.8	外:オサエ・ナデ 内:板ナデ・オサエ	密	内外:7.5YR7/6橙	底部 1/12	
167	012 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(底)20.7	外:ハケメ→オサエ→ヨコナデ 内:ハケメ→オサエ→ヨコナデ	密	内外:5YR7/6橙	底部 3/12	
168	044 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ｃ区	－	SR8 北	(底)21.0	外:ナデ 内:板ナデ	密	外:10YR8/4浅黄橙 内:2.5Y7/3浅黄	底部 2/12	
169	018 -06	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ａ区	g3	SD1 暗灰色砂	(底)21.4	外:板ナデ→オサエ 内:オサエ→板ナデ	やや密	内外:5YR7/4にぶい橙	底部 2/12	
170	022 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ａ区	g3	包含層	(底)21.8	外:オサエ・ナデ 内:板ナデ	やや密	外:7.5YR8/4浅黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	底部 2/12	
171	037 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ｂ区	－	SR8 南	(底)22.5	外:オサエ・ナデ 内:板ナデ	やや密	内外:10YR8/3浅黄橙	底部 1/12	
172	022 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ａ区	g3	包含層	(底)23.8	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:7.5YR8/4浅黄橙 内:2.5Y8/2灰白	底部 1/12	
173	045 -03	円筒埴輪	円筒Ｃ類 大型　底部	Ｃ区	－	SR8 北	(底)24.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ・板ナデ	密	内外:10YR8/3浅黄橙	底部 1/12	
174	046 -01	円筒埴輪	円筒Ｃ類？	Ｃ区	－	SR8 北	小片	外:板ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:10YR8/3浅黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 小片	方形スカシ？ 赤彩:外面
175	046 -02	円筒埴輪	円筒Ｃ類？	Ｃ区	－	SR8 北	小片	外:ハケメ 内:ハケメ	密	内外:2.5Y7/2灰黄	胴部 小片	方形スカシ？ 赤彩:外面
176	021 -04	円筒埴輪	円筒Ｃ類？	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(幅)2.6 (高)4.2	外:ハケメ 内:板ナデ	やや密	外:10R6/6赤 内:2.5Y7/3浅黄	胴部 小片	方形スカシ 赤彩:胴部外面
177	021 -05	円筒埴輪	円筒 Ａ・Ｂ類？	Ａ区	g5	SD1 暗灰色土	(幅)4.9 (高)3.8	外:風化 内:ハケメ→オサエ	やや密	外:10YR8/4浅黄橙 内:7.5YR7/4にぶい橙	胴部 小片	円形スカシ(径約3cm) 赤彩:胴部内外面
178	038 -03	円筒埴輪	円筒 Ａ・Ｂ類？	Ｂ区	－	SR8 南	(幅)5.7 (高)5.3	外:板ナデ 内:板ナデ	やや密	外:10YR6/2灰黄褐 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 小片	円形スカシ？ 赤彩:胴部外面
179	021 -09	円筒埴輪	円筒 Ａ・Ｂ類？	Ａ区	f3	SD1 暗灰色土	(幅)4.2 (高)4.1	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 小片	突帯剥離 円形スカシ(径約2cm)
180	021 -07	円筒埴輪	円筒 Ａ・Ｂ類？	Ａ区	f6	SD1 暗灰色土	(幅)5.0 (高)3.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ→剥離	やや密	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/3にぶい黄橙	胴部 小片	円形スカシ(径約4cm)

第６表　出土遺物観察表（５）

報告番号	実測番号	器種・質・分類等		区	地点	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
181	021 -08	円筒埴輪	円筒 Ａ・Ｂ類？	Ａ区	g5	SD1 暗灰色土	(幅)2.8 (高)3.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	内外:7.5YR7/4にぶい橙	胴部 小片	小孔(径約0.6cm)
182	021 -06	円筒埴輪	円筒 Ａ・Ｂ類？	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(幅)4.8 (高)2.5	外:突帯貼付後ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:2.5Y7/3灰黄 内:2.5Y8/2灰白	胴部 小片	天地不明 小孔(径約0.8cm)
183	046 -06	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｃ類	Ｃ区	－	SR8 北	(残存幅) 4.0	外:突帯貼付後ナデ 内:ナデ	密	外:10YR8/3浅黄橙 内:10YR8/4浅黄橙	胴部 小片	赤彩:胴部外面
184	011 -05	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｃ類	Ａ区	j9	SD4	(幅)4.9 (高)2.6	外:突帯貼付後ナデ 内:－	密	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:10YR6/3にぶい黄橙	突帯部 小片	赤彩:外面 厚み:1.6cm
185	043 -06	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｃ類	Ｃ区	－	SR8 北	(残存幅) 5.8	外:突帯貼付後ナデ 内:－	密	外:7.5YR7/6橙 内:10YR8/3浅黄橙	胴部 小片	
186	009 -05	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｃ類	Ａ区	－	SD4	(幅)6.1 (高)1.9	外:突帯貼付後ナデ 内:－	密	内外:2.5Y7/2灰黄	突帯部 小片	赤彩:外面 厚み:1.0cm
187	043 -04	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｃ類	Ｃ区	－	SR8 北	(残存幅) 6.9	外:突帯貼付後ナデ 内:－	密	外:2.5YR5/6明赤褐 内:7.5YR7/4にぶい橙	突帯部 小片	赤彩:外面
188	010 -06	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｃ類	Ａ区	－	SD4	(幅)3.5 (高)2.0	外:突帯貼付後ナデ 内:－	密	外:7.5YR7/3にぶい橙 内:2.5Y7/2灰黄	突帯部 小片	赤彩:外面 厚み:1.4cm
189	010 -05	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｃ類	Ａ区	j9	SD4	(幅)5.0 (高)2.1	外:突帯貼付後ナデ 内:－	密	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR8/3浅黄橙	突帯部 小片	赤彩:外面 厚み:0.9cm
190	010 -04	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｃ類	Ａ区	－	SD4	(幅)6.2 (高)2.3	外:突帯貼付後ナデ 内:－	密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	突帯部 小片	赤彩:外面 厚み:0.9cm
191	043 -05	円筒埴輪	円筒Ａ～Ｃ類	Ｃ区	－	SR8 北	(残存幅) 5.9	外:突帯貼付後ナデ 内:－	密	外:7.5YR7/6橙 内:10YR6/4にぶい黄橙	突帯部 小片	赤彩:外面
192	024 -04	古式土師器	高坏	Ａ区	SD2 上面	包含層	(脚柱)2.2	外:ハケメ 内:シボリメ	やや粗	内外:7.5YR8/4浅黄橙	脚頭部 9/12	
193	015 -06	古式土師器	高坏	Ａ区	g6	包含層	(脚柱)2.9	外:ナデ？ 内:シボリメ	密	内外:7.5YR8/4浅黄橙	脚部 6/12	風化著しい
194	024 -03	古式土師器	高坏	Ａ区	g3	SD1 暗灰色土	(脚柱)2.4	外:ハケメ→直線文？ 内:シボリメ	やや密	内外:7.5YR86/3にぶい褐	脚頭部 6/12	
195	026 -06	古式土師器	高坏	Ａ区	f6	墳丘裾	(脚頭)2.4	外:ミガキ→直線文？ 内:シボリメ	やや粗	内外:7.5YR6/4にぶい橙	脚頭部 6/12	
196	012 -06	古式土師器	小型丸底壺	Ａ区	g3	包含層	(底)6.0	外:ナデ 内:ナデ	密	内外:7.5YR6/6橙	底部 3/12	
197	026 -01	古式土師器	壺	Ａ区	－	SD上面	(口)17.8	外:板ナデ→口縁端部ヨコナデ 内:板ナデ・ハケメ→口縁端部ヨコナデ	やや密	内外:5YR7/6橙	口縁部 2/12	
198	016 -06	古式土師器	甕	Ａ区	g6	SD1 暗灰色土	(口)15.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	やや粗	内外:10YR7/2にぶい黄橙	口縁部 2/12	赤彩:口縁部内外面
199	002 -01	円筒埴輪	朝顔形	Ａ区	f4	包含層	(胴)30.0	外:タテハケ→突帯貼付後ヨコナデ 内:ヨコハケ→ナデ→ヨコハケ	やや密	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:10YR7/4にぶい黄橙	胴部 2/12	
200	029 -04	土師器	小皿	Ａ区	f4	墳丘裾	(口)8.0 (高)1.5	外:オサエ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:10YR6/4にぶい黄橙	口縁部 2/12	中世前期
201	029 -05	土師器	小皿	Ａ区	－	包含層	(口)8.4 (高)1.2	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	内外:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部 1.5/12	中世前期
202	030 -02	土師器	小皿	Ａ区	－	SD1	(口)8.6 (高)1.35	外:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:7.5YR8/4浅黄橙 内:10YR8/3浅黄橙	口縁部 1.5/12	中世前期
203	030 -01	土師器	小皿	Ａ区	－	SD1	(口)12.7	外:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:10YR7/2にぶい黄橙 内:2.5Y6/1黄灰	口縁部 1/12	中世前期
204	033 -04	陶器 (山茶碗)	椀	Ａ区	－	廃土	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	内外:5Y7/1灰白	高台部 12/12	尾張第３～４型式　猿投か
205	029 -06	陶器 (山茶碗)	椀	Ａ区	f3	SD1 暗灰色土	(口)15.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	内外:2.5Y5/2暗灰黄	口縁部 1/12	渥美か
206	033 -05	陶器 (山茶碗)	椀	Ａ区	－	包含層	(口)15.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	内外:7.5Y5/1灰	口縁部 1/12	渥美か
207	029 -07	陶器 (山茶碗)	皿(山皿)	Ａ区	f4	SD1 暗灰色土	(口)8.0 (高)1.75 (底)4.7	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	内外:2.5Y7/1灰白	口縁部 2/12	尾張第５～６型式　猿投・知多
208	030 -03	陶器 (山茶碗)	皿(山皿)	Ａ区	－	SD1	(口)8.1 (高)2.25 (底)4.2	外:ロクロナデ→糸切 内:ロクロナデ・内面研磨	密	内外:2.5Y7/1灰白	底部 12/12	尾張第５型式
209	039 -01	陶器 (山茶碗)	椀	Ｂ区	－	SR8 北	(口)16.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	内外:2.5Y7/2灰黄	口縁部 1/12	尾張第５型式か
210	030 -06	陶器 (山茶碗)	椀	Ａ区	m14	SR3	(口)16.0 (高)5.0 (高台)6.8	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	内外:2.5Y7/1灰白	高台部 12/12	籾殻痕あり 尾張第５型式　知多・猿投
211	030 -04	陶器 (山茶碗)	椀	Ｂ区	－	包含層	(高台)7.1	外:ロクロナデ→糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	内外:2.5Y6/1黄灰	高台部 12/12	籾殻痕あり 尾張第５型式　猿投
212	028 -01	陶器 (山茶碗)	椀	Ａ区	試掘	№7	(底)7.8	外:ロクロナデ→底部糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ・内面研磨	密	内外:N7/1灰白	底部 4/12	尾張第５型式　知多・猿投
213	028 -02	陶器 (山茶碗)	椀	Ａ区	試掘	№5	(底)6.4	外:ロクロナデ→底部糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	内外:N7/0灰白	底部 2/12	籾殻痕あり 尾張第６型式　知多・猿投
214	029 -02	陶器 (山茶碗)	椀	Ａ区	土層 断面	南壁	(底)10.6	外:ロクロナデ→底部糸切・高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	内外:5Y7/1灰白	底部 1/12	尾張第６型式　猿投・知多
215	029 -03	陶器 (山茶碗)	椀	Ａ区	g3	包含層	(口)13.9	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	内外:2.5Y8/1灰白	口縁部 1/12	尾張第６型式
216	030 -05	陶器 (山茶碗)	椀	Ｂ区	－	包含層	(口)13.6 (高)5.0 (底)5.6	外:ロクロナデ→高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	外:2.5Y7/1灰白 内:2.5Y7/2灰黄	口縁部 2/12	尾張第８型式　瀬戸？
217	029 -08	磁器	青磁 碗	Ａ区	f6	SD1 暗灰色土	(口)19.0	外:ロクロナデ→釉 内:ロクロナデ→釉	密	素地:5Y5/2灰オリーブ 釉:7.5Y7/1灰白	口縁部 1/12	龍泉窯Ｉ－１

Ⅴ　自然科学分析

1　赤色顔料同定分析の経緯

飛塚古墳から出土した家形埴輪・円筒埴輪は、外面に赤彩が施されていた。この赤彩について、三重県立博物館で蛍光Ｘ線分析装置を用いた元素同定による分析調査を実施し、顔料がベンガラ・水銀朱のいずれかであるかの判別を試みた。分析対象資料は家形埴輪３片を含む13点である（第７表）。

朱は、鉱物である辰砂（HgS）を磨り潰して粉にしたもので、目視ではショッキングピンク色に近い色調である。水銀朱の場合、蛍光Ｘ線分析では水銀（Hg）が検出される。ベンガラは、赤鉄鉱（Fe203）を粉にする、褐鉄鉱・磁鉄鉱・磁硫鉄鉱を焼成して赤鉄鉱を作った上で粉にする、鉄細菌や鉄さびを焼成して粉にするなど原料は多様で、色調も暗赤色や紫色など様々である。[1] 今回は生物顕微鏡での観察は行っていないため、ベンガラの粒子形態は確認しておらず、原材料が鉄鉱石か鉄細菌は不明である。

2　赤色顔料同定の結果

分析は、三重県立博物館の間渕創氏に依頼した。使用機器は携帯型蛍光Ｘ線分析装置（Thermo Scientific社製 NITON XL3t-950S）で、資料の赤彩部分の定性分析をおこなった。

結果、赤彩部分の定性分析のスペクトルでは、分析対象13点すべてで鉄（Fe-K α：6.40keV、-K β：7.06keV）が検出されたが、水銀（Hg-L α：9.99keV、-L β：11.82keV）は検出されなかった。次に、赤彩の施されていない埴輪の内面を分析したところ、鉄（Fe）のみが確認され、この鉄（Fe）は赤彩部分とほぼ同じ比率であった。[2]

したがって、飛塚古墳出土埴輪の赤彩顔料は、水銀系赤色顔料（水銀朱）ではなく、ベンガラ系赤色顔料であると推定される。

3　他遺跡との比較

次に、同時代の赤色顔料蛍光Ｘ線分析結果を見ていく。まず飛塚古墳の家形埴輪と類似した形態をとる大阪府美園古墳出土家形埴輪の顔料は、ベンガラである。[3] 伊勢湾沿岸地域の事例では、５世紀前半の桑名市高塚山古墳[4]や愛知県青塚古墳[5]で埴輪にベンガラが用いられている。一方で、墳墓主体部では愛知県東之宮古墳で朱とベンガラが、岐阜県象鼻山１号墳・矢道長塚古墳で朱が使用され、その入手に畿内とのつながりが指摘されている。[6]

飛塚古墳の埴輪は、三重県丹生鉱山や畿内（大和・阿波産朱）との関わりではなく、より身近で一般的な顔料を用いており、これは埴輪生産が在地主体で行われていたことを裏付けるものといえよう。

〔 註 〕

（１）志賀智史・本田光子 2006「五色塚古墳出土埴輪に付着する赤色顔料について」『史跡五色塚古墳　小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会

（２）ベンガラは鉄（Fe）の酸化物であるため、蛍光Ｘ線分析で鉄が検出された場合はベンガラの利用が推測されるが、鉄は土器の胎土など自然界に一般的に認められるものであるため注意が必要である。

（３）財団法人大阪文化財センター1985『美園』

（４）桑名市教育委員会 2006『三重県桑名市　高塚山古墳基礎調査報告書』

（５）永井康次 2001「犬山市青塚古墳出土の土器胎土分析～壺と埴輪の比較」『青塚古墳』犬山市教育委員会

（６）志賀智史 2014「東之宮古墳出土の赤色顔料について」『史跡東之宮古墳』犬山市教育委員会

第７表　蛍光Ｘ線分析結果一覧表

報告番号	実測番号	器種	赤彩	結果		赤色顔料の種類
				水銀	鉄	
7	03-03	家形埴輪	○	×	○	ベンガラ？
8	03-02	家形埴輪	○	×	○	ベンガラ？
9	03-01	家形埴輪	○	×	○	ベンガラ？
24	06-04	壺形埴輪	○	×	○	ベンガラ？
65	01-01	円筒埴輪	○	×	○	ベンガラ？
69	04-01	円筒埴輪	○	×	○	ベンガラ？
87	01-02	円筒埴輪	○	×	○	ベンガラ？
88	04-03	円筒埴輪　外面	○	×	○	ベンガラ？
88	04-03	円筒埴輪　内面	×	×	○	－
124	04-02	円筒埴輪	○	×	○	ベンガラ？
158	06-01	円筒埴輪	○	×	○	ベンガラ？
160	01-03	円筒埴輪	○	×	○	ベンガラ？
161	05-01	円筒埴輪	○	×	○	ベンガラ？
破片ａ	なし	円筒埴輪　外面	○	×	○	ベンガラ？
破片ａ	なし	円筒埴輪　内面	×	×	○	－

Ⅵ　調査のまとめ

1　飛塚古墳とその周辺の変遷

縄文時代　今回の調査では、縄文時代の遺構・遺物は見つかっていない。菰野町域の当該期の集落は、六谷遺跡・大久保遺跡・下江平遺跡のように比較的上流域に立地しているが、沖積地の飛塚古墳周辺においても、段丘上で見つかる可能性がある。

弥生時代～古墳時代初頭　弥生時代後期後半の山中式併行期に、竪穴住居ＳＨ５が作られる。１棟のみ存在していた可能性は低いため、周囲には複数棟の竪穴住居があったことが想定されよう。

弥生時代から古墳時代中期において、菰野町域の様相は不明瞭である。遺構は今まで発見されていないが、竹谷川上流の大久保遺跡で平成25年度に行われた範囲確認調査では、弥生土器もしくは古式土師器の頸部片が確認されている。[(1)]

北勢地域における弥生時代後期の集落は、海岸を見下ろす標高20～40ｍの台地上に点在する。三滝川流域には、上畑遺跡[(2)]・永井遺跡[(3)]が存在する。朝明川流域の丘陵部では、西ヶ広遺跡[(4)]で山中Ⅰ・Ⅱ式期、北山城跡・中野山遺跡[(5)]で山中式から廻間式期の集落が確認され、八王子古宮式に遡りうる一群も出土している。北奥遺跡[(6)]は、山中Ⅱ式から廻間Ⅰ式期頃の集落である。飛塚古墳ＳＨ５出土高坏は、これら集落出土の高坏と比べて、坏部外面をヨコミガキする点、脚柱部に櫛描直線文がなく透孔径が小さい点など、北勢の土器様相と若干の差異が見出されるが、小地域差と言えるかは不明である。

古墳時代　飛塚古墳が築造される。墳丘の下層から竪穴住居が検出されたことから、更地の状態から盛土を積み上げて築造したことがわかる。

弥生時代同様、この時代の集落様相はよくわかっていない。飛塚古墳は沖積地の中央に位置しており、母集団の生産基盤となる土地は周囲の平坦地と考えられるが、やや高地に位置する菰野町の耕作土は隣接する鈴鹿市などに比べ肥沃ではなく、現在でも穀物の生産量が少ないとされる。したがって、古墳周辺に拠点集落となるような大集落が営まれた可能性は低く、古墳築造の背景を考えるにあたっては、より小さなまとまりを想定する必要があろう。

中期古墳は、広古墳群・北山Ｃ遺跡など朝明川中流域に集中する。今回調査で１点のみ出土した朝顔形埴輪は飛塚古墳に伴う埴輪群とは様相が異なり、窯で焼成されていることから、時期は中期と考えられる。朝顔形埴輪は自然流路を下って流れてきたことが推測されるため、飛塚古墳より更に上流部に５世紀代の埋没古墳がある可能性が高い。『菰野町史』[(7)]には中期古墳は認められないが、今後竹谷川上流域の音羽地区や潤田地区を調査する際は注意が必要であろう。

後期には、丘陵部に群集群が数多く築造されるが、菰野町域にはそれに対応する集落を見出すことはできない。北勢の古墳の多くは朝明川中流域に集中しており、おそらく朝明川流域に沿って生産基盤となる集落が展開していると考えられる。

古代　今回の調査では、飛鳥・奈良・平安時代の遺構・遺物は見つかっていない。

中世～現代　墳丘北側を、ＳＤ１が東流する。流路からは中世前期の山茶碗や青磁碗が出土しており、この時期に墳丘が削られた可能性が高い。ＳＤ１は、その後ＳＲ２・ＳＲ３と現代に至るまで流路の位置を変えずに流れており、これは整備される前の竹谷川本流前に相当するものと思われる。

発掘調査の結果、墳丘裾部は近世に垂直に削られた痕跡が確認されたが、墳丘の大半は残されているといってもよい。昭和のほ場整備でも耕地化は墳丘の際でとまっており、どの時代の人びとも、その時々で若干墳丘を削りつつも、古墳そのものを残そうという意識はあったようである。飛塚古墳は、現代においても「あの古墳に近づいたら祟られる」等の言い伝えが残っており、崇敬や畏怖とともに、地域のなかで長い間守られてきたのである。

2　飛塚古墳の復元

（１）墳丘の復元

規模　ここでは、調査成果を元に、現段階で考えら

れる墳丘形態と周溝の復元を試みる。復元値は以下のとおりである。

全　長　39.4ｍ（復元）
※造り出し付円墳の場合、墳長42.0ｍ（復元）
墳丘径　35.0ｍ（復元）
墳丘高　2.9ｍ（現況とＢ区検出面の比高差）
　　4.0ｍ（復元）
墳頂径　21.8ｍ（現況）
周溝幅　2.2ｍ
周溝深　0.6ｍ

最も基準となるラインは、Ａ区とＢ区で検出されたＳＤ４である。Ｂ区の調査において、墳丘の裾は近世に掘削されたことが確認され、墳頂も明治時代に削平されたと伝わっているため、墳丘高と傾斜は全体的に不確かである。[8] 特に、墳頂は掘削を受けたにも関わらずその痕跡は残っておらず、墳頂平坦面の高さが築造当時のままなのか、埋葬施設ごと大幅に削平されたのかは疑問が残る。ただし、飛塚古墳の墳丘は、同時期の古墳と比べて墳丘高に対して墳頂径が広く、全体的につぶれたような形状をしているため、元々の墳丘高はもう少し高かった可能性があり、復元案（第24図）では埋葬施設を含めて約１ｍ削平されたと仮定して図化した。

（２）墳丘の形状

今回発掘調査を行った範囲では、周溝が中世以降に削平されていたため、詳細な墳形を検討することができなかった。ここでは、調査の成果を元に、２つの復元案を提示する。

円墳　まず、現況と同じく「円墳」の場合である（第24図上半）。Ａ区で検出された裾部の高まりは墳丘裾の一部と考えられ、その場合の墳丘径などは前述した通りである。墳丘の築成は１段、ないしは墳丘裾テラスをもつ２段であるが、第24図では１段の復元案を図化した。

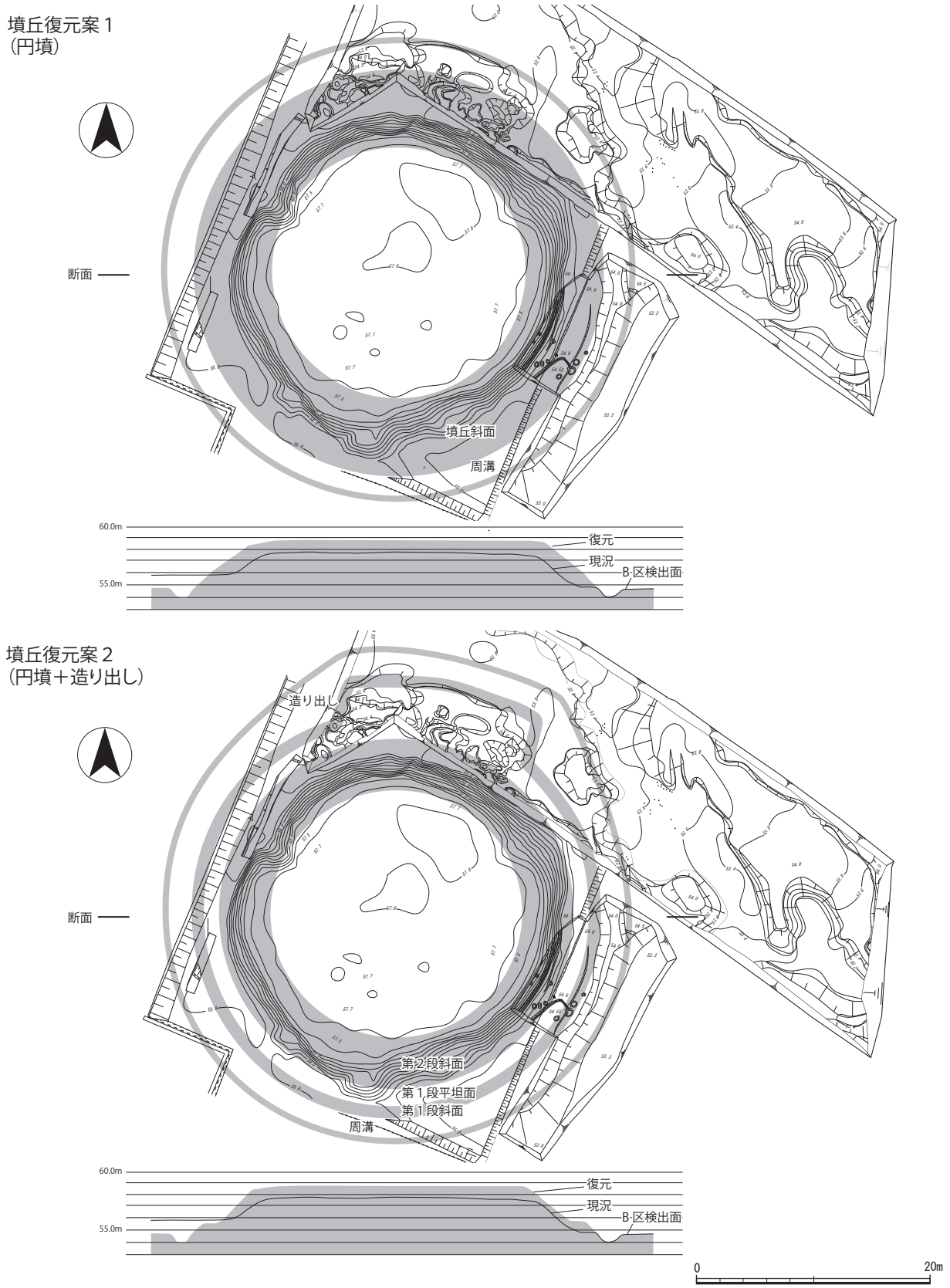
造り出し付円墳　次に、Ａ区の墳丘裾部北側で検出された短小な突出部を造り出しとする「造り出し付円墳」案を示す（第24図下半）。この墳形は、「帆立貝形古墳」「帆立貝式古墳」とも呼ばれ、前方後円墳とは異なる意味をもった墳形と認識されるが、墳丘形態の比率の区分は議論がわかれている。[9] 県内では松阪市宝塚２号墳で同様の墳形がみられる。[10]

飛塚古墳の場合は、円墳部に直接突出部が付属するタイプと考えられ、「造り出し」想定位置周辺からは、最も多くの円筒埴輪が出土している。墳丘を裁ち割る調査区を設定していないため傾斜変換点は不明であるが、兵庫県尼塚古墳[11]のような円墳第１段平坦面が突出部に接続する構造と、それに墳丘裾テラスが伴う２段築成を想定しておきたい。復元案では、造り出し部平坦面の幅を4.2ｍとした。周溝の復元ラインは、墳丘裾部に沿うような形状になるか、馬蹄状になるのかはわからない。

ただし、飛塚古墳を「造り出し付円墳」とした場合、この形態の代表例である奈良県乙女山古墳[12]や前述の尼塚古墳・宝塚２号墳は中期の築造であるため、もし飛塚古墳が類型に相当するならば、遺物の年代観と若干齟齬が生じることとなり、築造時期は５世紀に下る可能性が高くなる。したがって、現時点では、遺物の年代観から墳丘復元案の第一候補を「円墳」としておきたい。

写真10　墳丘裾部北側（北から）

写真11　墳丘南側のキツネの巣穴（南から）



第 24 図　墳丘復元図（1：500）

盛土　墳丘下層から弥生時代後期の竪穴住居を検出したため、墳丘は地山削り出しではなくすべて盛土と考えられるが、周溝掘削土を墳丘盛土に転用したとしても、周溝のそれだけでは圧倒的に土量が足りないため、古墳周辺から運び込む必要がある。

（３）埴輪の配置

発掘調査では現位置を保った状態の埴輪は１本も確認されておらず、どこに、どの程度の間隔で並べられていたかは不明である。

出土埴輪全体の量は、約 40 kgである。壺形・円筒埴輪の口縁部破片点数は、実測した総数が 83 点である。このうち、周溝ＳＤ４出土資料は比較的まとまって出土しており、検出面積がわずかであるにも関わらず遺物量が多い。ＳＤ４出土の口縁部数は、壺形埴輪２点、円筒埴輪３点である。したがって、埴輪列は少なくとも墳丘裾を取り囲む１列があった可能性が高く、その列には壺形・円筒埴輪が混合していた可能性が高い。

壺形埴輪の口縁部点数は円筒埴輪に比べて少なく、調査全体で 16 点である。この数は、松阪市深長古[13]墳のように墳丘のまわりを取り囲めるような量ではないため、円筒埴輪列のなかに点的に配置されるか、もしくは墳頂に配置されていたと考えられる。

同時期の古墳である犬山市青塚古[14]墳では、点数の少ない樽形埴輪は後方部の墳頂部だけに配置され、点数の多い壺形埴輪は墳丘裾を巡るように配置されていたと推測されている。飛塚古墳の場合は、家形埴輪・壺形埴輪・円筒埴輪Ａ・Ｂ類の点数が少ないため、墳丘裾には比較的点数の多い円筒埴輪Ｃ・Ｄ類が主体となって配置されていたと考えられよう。

３　飛塚古墳の埴輪

（１）家形埴輪

三重県内の家形埴輪　県内における当該期の器財埴輪は、伊賀では石山古墳、北勢では高塚山古墳・能褒野王塚古墳・名越古墳、南勢では宝塚１号墳などで出土しているが、全体的に量は少ない。このうち、家形埴輪は石山古墳・宝塚１号墳で見つかっている。

同時期の家形埴輪　飛塚古墳の家形埴輪は、庇をもつ構造から、入母屋造りの高床式住居を模したものと考えられるが、残念ながら破片資料であるため、全体像を把握できるものではない。そのため、古墳時代前期末から中期前半の類例をもとに、全体像の大まかな復元を試みたい。

当該期における同形式の家形埴輪のうち、全体像の復元が可能なものは、大阪府美園古[15]墳（方墳・７ｍ）、大阪府高廻２号[16]墳（方墳・15 ｍ）、伊賀市石山古[17]墳（前方後円墳・120 ｍ）で、松阪市宝塚１号[18]墳（前方後円墳・全長 111 ｍ）は時期がやや新しくなる。

美園古墳の築造時期は４世紀末頃で、家形埴輪は入母屋造１棟・切妻造１棟が確認される。このうち入母屋造の高床式住居（２×２間）を模した家形埴輪が飛塚古墳と類似する。家形埴輪は最大高約 70 ㎝、棟の最大長は推定約 75 ㎝、平側最大長約 55 ㎝、妻側最大長約 45 ㎝である。外面全体にベンガラが塗布され、線刻で鋸歯文の施された盾が描かれている。

高廻２号墳の築造時期は５世紀前半で、家形埴輪は入母屋造・切妻造などである。入母屋造の家形埴輪は２×２間で、最大高約 54 ㎝、平側最大長約 35 ㎝、妻側最大長約 24 ㎝である。

石山古墳の築造時期は４世紀末で、家形埴輪のほか多数の器財埴輪・円筒埴輪が出土しており、墳丘上の埴輪祭祀が復元されている。入母屋造の家形埴輪は、遺物実測図がないため正確な法量は不明であるが、最大高は 73 ㎝で美園古墳とほぼ同じである。

宝塚１号墳の築造時期は５世紀前半である。造り出し部から船形埴輪をはじめ多くの器財埴輪・家形埴輪が出土している。家形埴輪は７個体以上が出土し、大半が入母屋造である。このうち、鰹木の残る個体は最大高（棟まで）が復元 76 ㎝、平側最大長約 42 ㎝、妻側最大長約 33 ㎝である。

刳り抜きの比較　上端一辺の長さは、飛塚古墳が 17.7 ㎝である。美園古墳は平側 11.2 ㎝・妻側 7.2 ㎝、高廻２号墳は平側復元 9.0 ㎝・妻側 8.0 ㎝、宝塚１号墳は平側 7.0 ㎝・妻側 4.5～8.5 ㎝である。平側の刳り抜きと刳り抜きの間は、美園古墳が 8.0 ㎝、高廻２号墳が 5.8 ㎝、宝塚１号墳が 8.5 ㎝である。

家形埴輪の復元　唯一正確に測ることができる刳り抜き一辺の幅を比較すると、飛塚古墳が最も大きいことがわかる。したがって、美園古墳と同じような規格であると仮定した場合、よほど刳り抜きが横長

でない限り、全長は美園古墳より大きくなる可能性が高い。比較的大きい美園古墳・石山古墳・宝塚古墳の家形埴輪は、最大高 70～76 ㎝、平側 42～55 ㎝程度であるため、飛塚古墳の家形埴輪は概ね以下のように復元される。

構　造　　入母屋造・高床式か
全　長　　75 ㎝以上（推定）
平側幅　　55 ㎝以上（推定）

家形埴輪の点数　家形埴輪の点数は、５世紀代までは古墳に多数樹立するパターンが主流とされるため、[19] 飛塚古墳にも複数棟あった可能性がある。前述した類例を見ると、入母屋造のほか切妻造も確認されているが、同じ伊勢平野の宝塚古墳では入母屋造が極端に多いという指摘[20]がある。

（２）二重口縁壺と壺形埴輪

伊勢湾沿岸地域における壺と壺形埴輪　墳丘に二重口縁壺もしくは壺形埴輪を巡らせる手法は、弥生時代終末期の壺形土器の供献からつながる伝統的な儀礼であり、旧来からの在地的首長の儀礼様式として捉えられている。[21]

この風習は、前期には深長古墳・向山古墳、中期には宝塚１・２号墳や坊山２号墳を代表例とし、小規模な古墳には中期後葉まで残存する。濃尾平野では可児市西寺山古墳（前方後方墳・60 m）・犬山市青塚古墳（前方後円墳・123 m）・春日井市高御堂古墳（前方後方墳・63 m）・同市天王山古墳（円墳・28 m）がある。三河では、西尾市善光寺沢南古墳（円墳か方墳・33 m）・豊橋市権現山１号墳（前方後円墳・38 m）で壺形埴輪が確認される（第 25 図）。

飛塚古墳では、墳丘上もしくは墳丘裾に壺形埴輪を巡らせており、多数出土した円筒埴輪についても口縁部の形は壺状を呈しているため、壺形埴輪・円筒埴輪ともに「壺を巡らせる」という意識が強かったことがうかがわれる。１点のみではあるが底部穿孔が施された壺が出土している点も、伝統的な葬送儀礼を重視していたと捉えることができよう。

壺形埴輪Ａ・Ｂ類の類例　飛塚古墳出土の壺形埴輪Ａ１類は、いわゆる伊勢型二重口縁壺である。伊勢の二重口縁壺形埴輪の母体となる伊勢型二重口縁壺は、頸部から口縁部が外反し、一次口縁の端部を擬口縁として二次口縁端部が上方に突出する形態を呈する。出現は廻間Ⅰ式後半段階で、その系譜・分布や製作技法が伊藤裕偉[22]氏、新名強[23]氏、川崎志乃[24]氏、穂積裕昌[25]氏によって提示されている。

伊勢型二重口縁壺の主要分布域は伊勢平野の中勢地域である。伊勢型二重口縁壺もしくはそれと同様の製作技法を用いた壺型埴輪を供する古墳は、大足１号墳・前田町屋１～３号墓を初めとして深長古墳・大足２号墳・坂本山６号墳・西野３号墳・堀田遺跡出土資料など、廻間Ⅲ式～松河戸式併行期の津市から松阪市にかけての地域に分布が集中する。北勢の墳墓出土例では鈴鹿市門山遺跡に分布が認められるが、鈴鹿以北は飛塚古墳のみである。伊勢型二重口縁壺そのものは一般集落でも出土する器種であり、集落では上惣作遺跡・辻子遺跡・久留倍遺跡で確認される。辻子遺跡では胎土分析の結果から北勢の在地産であることが指摘されているため、[26] 北勢地域北部においても伊勢型二重口縁壺が一定量製作されていること、そして飛塚古墳の壺類が在地産であることが推測されよう。

なお、壺形埴輪Ａ２類は、Ａ１類に比べてよりぶ厚く埴輪に近い胎土を持つが、その口縁部の形態は宝塚１号墳よりわずかに古いと考えられ、壺形埴輪が大型化・長胴化し粗製化される直前段階の資料といえる。

壺形埴輪Ｃ・Ｄ類の類例　飛塚古墳で壺形埴輪Ｃ・Ｄ類と分類した一群は、口縁部が壺状で胴部が樽状を呈し、突帯間隔が幅広で方形ないしは三角形の透孔をもつ。また、器面の最終調整にハケ調整を施さない。これらは、赤塚次郎氏の分類する「樽形埴輪」に相当すると考えられる。[27]

いわゆる「樽形埴輪」は、畿内の円筒埴輪の影響とは表現できない形態を呈し、東海地域で拡散した壺形埴輪の亜流ともいうべき一群である。その受容の在り方によって多様な地域型があると考えられており、４世紀代の愛知県青塚古墳、５世紀代の長野県新井原２号墳（下伊那型埴輪）で出土が確認され、長野県森将軍塚古墳でも影響を見てとることができる。[28] 樽形埴輪は北近畿系壺形埴輪の影響下で製作されたと考えられており、[29] その系譜や方向性はいまだ定まっているものではないが、いずれにしても飛塚

古墳が畿内大和方面ではなく伊勢湾沿岸地域と強く結びついていたことを示す資料と言えよう。

（３）円筒埴輪

時期　当該期における伊勢地域の円筒埴輪は、竹内英昭氏[30]、和気清章氏[31]、穂積裕昌氏[32]、豊田祥三氏[33]によって研究されているが、飛塚古墳の円筒埴輪は地域色が強く、従来の円筒埴輪編年との対応が難しい。ただし、透孔の形状や共伴した二重口縁壺の口縁部形態から、川西編年[34]Ⅱ期後半段階に相当するものと考えられ、家形埴輪の編年観とも合致する。

円筒埴輪Ｃ類の類例　円筒埴輪は、在地の土器工人が製作した点、口縁部は壺状で胴部は樽状を呈する点が最大の特徴である。[35]

口縁部を直口壺状に成形する円筒埴輪Ｃ・Ｄ類は、伊勢湾の東西に類例が求められる。

まず、口縁が外に開く形態は南勢地域の松阪市坊山１号墳[36]（円墳・40 m）や松阪市高田２号墳[37]（円墳・27 m）と類似する。これらは、奈良盆地東南部の埴輪の古い要素と地域的変容をもつ一群とされる。[38]

次に、西三河地域の岡崎市には、口縁部形態とやや寸胴の胴部が類似する古墳が３基認められる。於新造古墳[39]（帆立貝形前方後円墳・42 m）は矢作川最古級の古墳で、４世紀後半の築造と推測される。埴輪の器面調整は内外面とも板ナデで、口縁部は短く外反して薄く尖る。突帯断面形は三角形が多く、透孔は巴形である。甲山１号墳[40]（円墳・約 60 m）は、４世紀後半の築造と推測される。埴輪は外面がタテハケ調整で、突帯断面形は方形、透孔は大きな方形である。和志山古墳[41]（前方後円墳・60 m）は４世紀末から５世紀初頭頃の築造で、埴輪は口縁部が外反し、外面に赤彩が施されている。内外面ともにヨコナデ調整で、突帯断面形は三角形を呈する。

上に述べた矢作川中流域の古墳は、矢作川に面した丘陵上に位置しており、被葬者には水上交通を掌握した首長が想定されている。また、大和東南部系の古い要素と在地的な変容の両方を含んだ形態であることから、高田２号墳・坊山１号墳といった南勢地域と「海上の道」を介してつながっていたことが指摘される。[42]飛塚古墳の築造時期は、矢作川中流域の古墳と同時期もしくは若干時期が遡る可能性があり、南勢地域から西三河地域へと情報が伝播した時期に前後する。ただし、西三河地域の埴輪と比較すると、プロポーションや口縁部断面形態は類似するが、西三河地域の埴輪は器壁が厚く、突帯断面形も方形もしくは台形状で、断面形が三角形のものもヨコナデをしっかり行っている。また、胎土も粗く径が広いことから、南勢地域と同じく埴輪工人による製作が想定される。すなわち、埴輪のプロポーションとしては同一の系譜と言うことができるが、細部を見ていくと飛塚古墳のほうがより在地的・土器的である。したがって、南勢地域から西三河地域への伝播経路としては、北勢地域の飛塚古墳を介すのではなく、従来通り海上交通で東から西へと直線的に移動したとみるほうがよいであろう。

（４）埴輪の系譜

埴輪の生産体制　高橋克壽氏は、畿内において鰭付円筒埴輪と定型化した家形・器財埴輪を代表例とした斉一的な埴輪生産が確立するのが４世紀後半段階であるとし、畿内縁辺地では５世紀前半段階においても、家形埴輪や靫形埴輪といった複雑な形象埴輪に限って畿内と区別がつかないものが樹立され、簡単な器財埴輪や円筒埴輪には同時期の畿内中枢には見られない強い個性が読み取れるとした。[43]

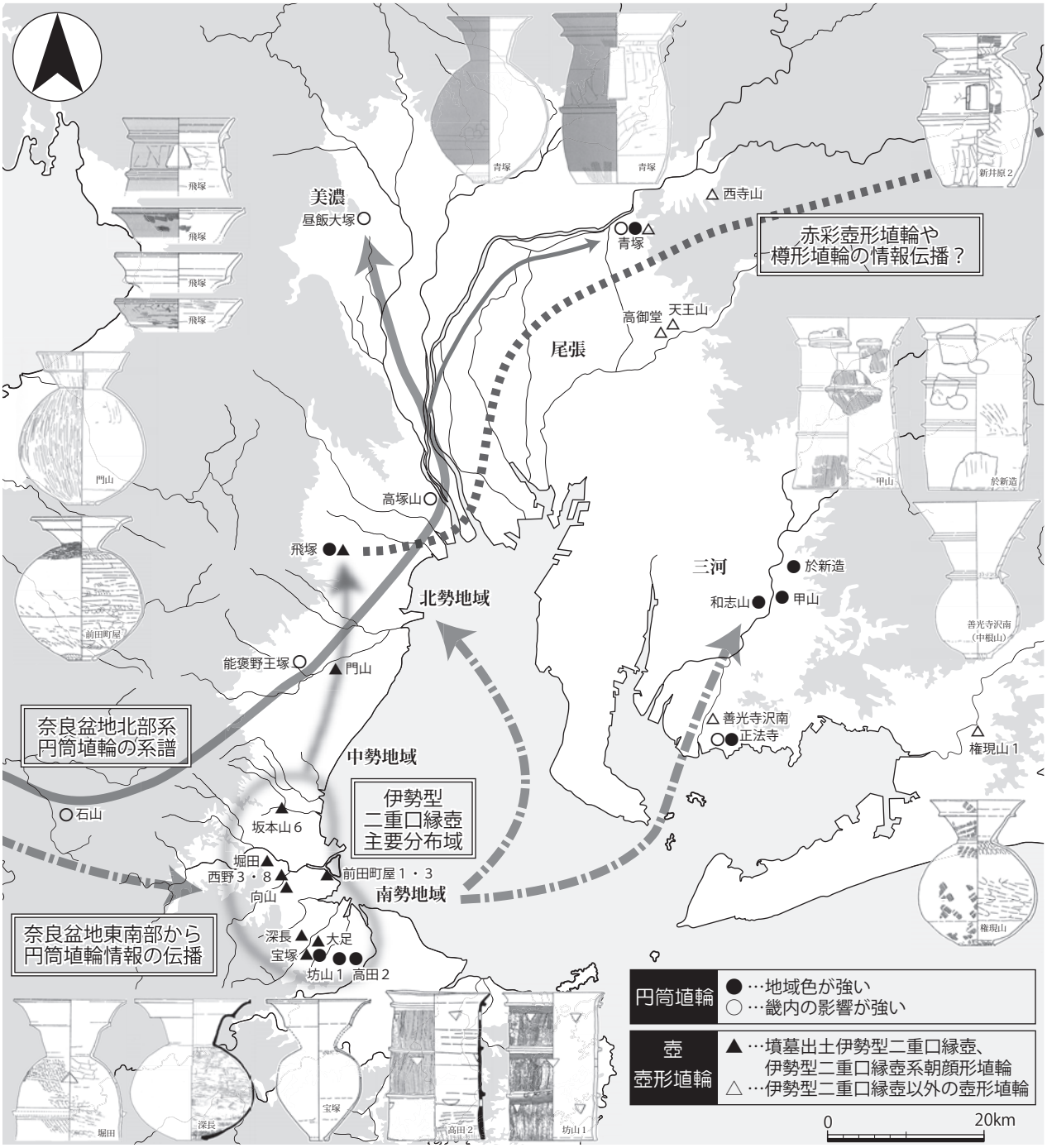
この傾向は松阪市宝塚古墳[44]でも見てとることができる。宝塚古墳では、家形埴輪など限られた器財埴輪についてのみ専門工人が来たことが指摘されており、墳丘を囲う壺形埴輪は地域色の強いものが採用されている。また、伊勢湾を介して対岸の西尾市正法寺古墳[45]（前方後円墳・91 m）出土円筒埴輪には畿内の埴輪との共通性の高い一群と在地的な要素の強い一群がある。これは、地域において初めて生じた大規模生産に際して、外来の工人と在地的技術をもった工人が製作に携わり、基本的に形象埴輪は外来工人が中心となって製作したという指摘[46]を反映していると考えられている。

飛塚古墳の場合、円筒埴輪は畿内に連なるような埴輪製作集団は想定できず、南勢地域や西三河地域に類例が見てとれる在地色の強いものであった。したがって、畿内と在地といった２つの系統を見てとることはできない。

ただし、家形埴輪は大阪府美園古墳に類するようなしっかりとした造りであった。飛塚古墳は大型の前方後円墳ではないため宝塚古墳・正法寺古墳と一概に比較はできないが、複雑な器財埴輪に関しては畿内から専門工人が来ていたという事例とは合致するように思われる。

また、前期の埴輪生産体制については「墓の造営ごとに製作にあたる人々が組織され、終われば解体されるというような一回性の埴輪生産であった」という指摘がある。[47] 飛塚古墳の埴輪生産体制も、まさにこのような一回性のものであったと推測されよう。

葬送儀礼と埴輪の系譜　しかしながら、同時期の北勢地域には、畿内の斉一的な埴輪も認められる。桑名市高塚山古墳・亀山市能褒野王塚古墳は大型の前方後円墳で、奈良盆地北部に特有の鰭付円筒埴輪や器財埴輪が出土しており、伊賀市石山古墳を介して奈良盆地北部から美濃の昼飯大塚古墳への伝播経路上に位置付けられている。[48] このような斉一的な埴輪



第 25 図　伊勢湾沿岸地域の特色ある埴輪群（1：800,000、遺物のスケールは任意）

と地域色の強い埴輪について、高橋克壽氏は、斉一的な円筒埴輪の分布が新興の大和北部勢力と美濃とのつながりを表し、一方、古い様相を示す円筒埴輪は「地域首長間の私的な交渉によって埴輪の製作が広まっていった」ものであり、奈良盆地南東部勢力から中・南勢地域へと波及したと指摘している。[49] また、赤塚次郎氏は、古代東山道沿いの前方後円墳には畿内色の強い埴輪が採用され、その他の特定地域にはやや個性的な埴輪（なかには壺形埴輪）が大型の円墳を中心に採用されると指摘している。[50]

飛塚古墳の多様な埴輪群には、伊勢湾を介して隣接する様々な地域とのつながりが見てとれる。壺形埴輪・円筒埴輪は南勢地域や尾張・西三河地域と、伊勢型二重口縁壺は中・南勢地域との関わりが想定される。そこには、畿内からの一方的な波及ではなく、まさに隣接地から隣接地へと、首長間の私的なつながりがあったようすがうかがわれる。

4　飛塚古墳の位置付け

（1）北勢地域北部における当該期の古墳と集落

飛塚古墳の周辺は前期から中期古墳の空白地域にあたる。本項では、北勢地域北部の４世紀後半から５世紀前半における古墳造営の動向と集落の様相を概観する。なお、ここで言う北勢地域とは、現在の桑名市から鈴鹿市にかけての地域を指し、そのなかでも員弁川・朝明川・海蔵川流域を北部とした。

海蔵川・三滝川流域　４世紀末から５世紀初頭には、海蔵川上流域に飛塚古墳、下流域に四日市市志氐神社古墳が存在し、５世紀代の古墳は認められない。沿岸部の宮ノ前遺跡では、溝状の落ち込みから埴輪片が出土しているが、時期は不明である。[51]

志氐神社古墳[52]は、４世紀後半の前方後円墳もしくは後方墳で、当該地域ではほとんどみられない大型の前方後円墳であることから、首長墓と考えられる。後円部は神社によって削平されており、くびれ部がわずかに残る。後円部は径 30 m、高さ 5.3 mで、墳麓に段築が見られ、墳頂部の各所には葺石と思われる角礫が散在している。志氐神社古墳の出土遺物は、内行花文鏡１点・車輪石１点、管玉２点、ガラス製小玉４点である。

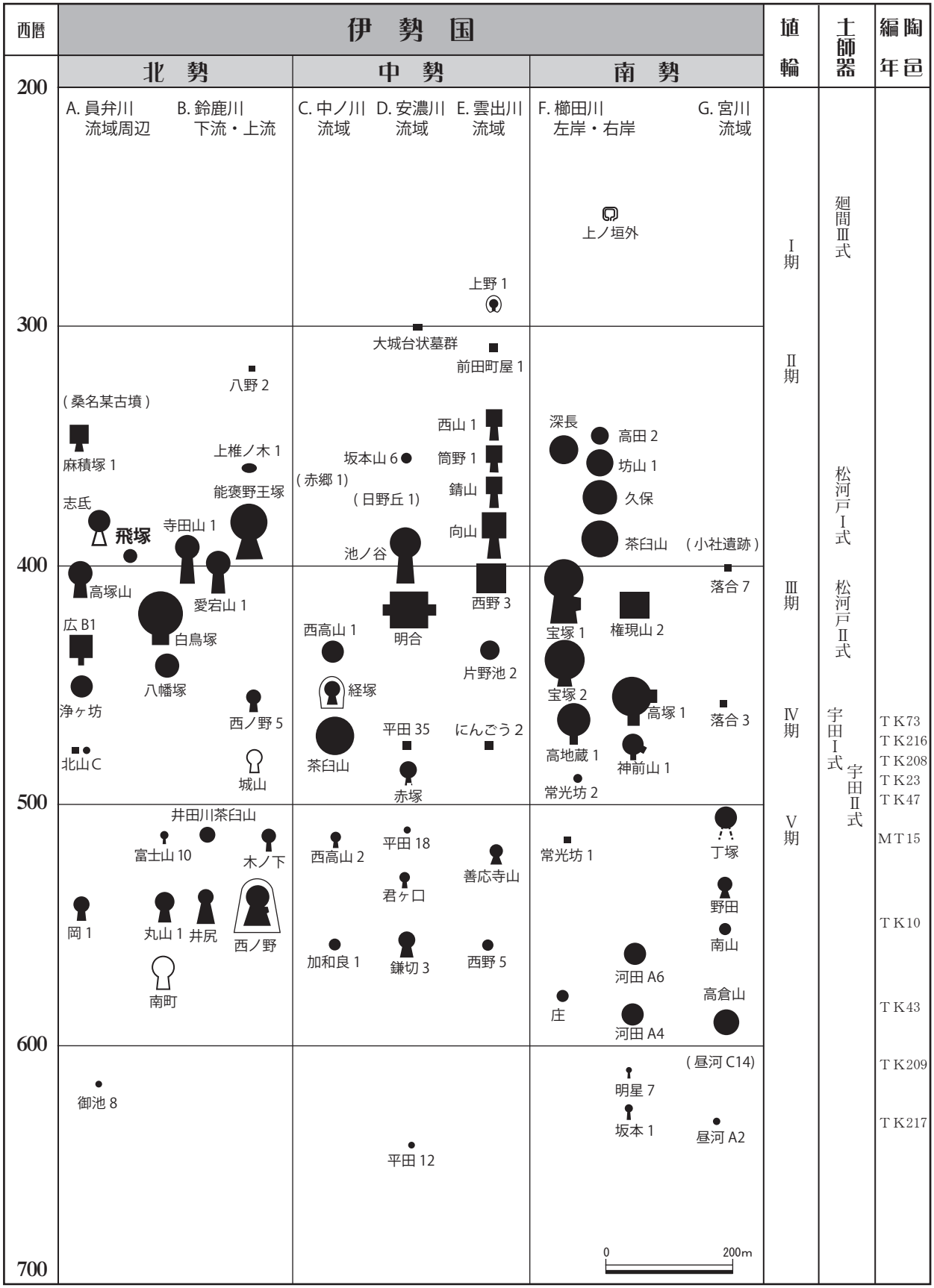
集落動向を見ていくと、まず沿岸部の上野遺跡で竪穴住居が 11 棟確認され、赤彩を施した壺や伊勢型二重口縁壺が出土している。[53] 三滝川中流域の永井遺跡では、遺構には伴わないものの少量の古式土師器が出土しており、Ｓ字甕Ｃ類と台付甕のほか、上野遺跡と同じく赤彩を施した二重口縁壺が認められる。[54] 海蔵川の南を流れる鹿化川の右岸には、伊勢湾をのぞむ標高 40 mの丘陵東北端に東日野遺跡がある。弥生時代後期の竪穴住居などから、台付甕をはじめとした古墳時代前期の土師器が出土している。[55]

朝明川流域　４世紀代の古墳はなく、５世紀の古墳は四日市市北部に集中する。広古墳群は一辺 16 mの方墳で、築造時期は５世紀中頃とされる。北山Ｃ遺跡では、５世紀中頃から後半の方墳がまとまって検出されている。[56] 当該地域には、前方後円墳のような首長墓はみられないが、方墳を中心とした墓域が展開していたようである。

集落は、まず飛塚古墳から北東に直線距離で約４㎞先に小牧南遺跡[57]がある。遺跡の時期は、廻間Ⅱ式期後半が主体で、松河戸Ⅰ式前半併行期まで継続し、掘立柱建物や竪穴住居が数多く見つかっている。しかしながら、飛塚古墳とは距離が離れていることから、古墳築造の母集団としては位置付けることはできない。下流域の沿岸部には、里之内遺跡があり、体部下半が大きく膨らんだ形状を呈するＳ字甕Ｃ類が出土している。[58]

員弁川流域　まず員弁川流域の造墓活動を見ていくと、いなべ市麻生田に麻績塚古墳がある。全長 43 mの前方後方墳で、未調査であるが４世紀中頃の築造と考えられる。麻績塚古墳とは員弁川を挟んで対岸に位置する宮山遺跡では、前方後方墳状の周溝墓と考えられる墳墓が確認される。

北岸の丘陵上には、高塚山古墳がある。高塚山古墳は５世紀初頭の前方後円墳で、復元墳丘長は約 56 mである。平成 16 年度の調査で盾形埴輪と蓋形埴輪の器財埴輪などが出土し、円筒埴輪と朝顔形埴輪の特徴が佐紀盾列古墳群出土に類似することが指摘される。[59] なお、静岡県ＭＯＡ美術館には、伝桑名町出土とされる３面の鏡が所蔵され、いずれも三角縁神獣鏡で舶載鏡とされる。これらが出土した古墳は、従来高塚山古墳が候補とされてきたが、築造時期から高塚山古墳ではなく他の古墳と考えられ、桑名市



※ 白抜き古墳は想定規模。(　　) 内の古墳は、墳形不明。

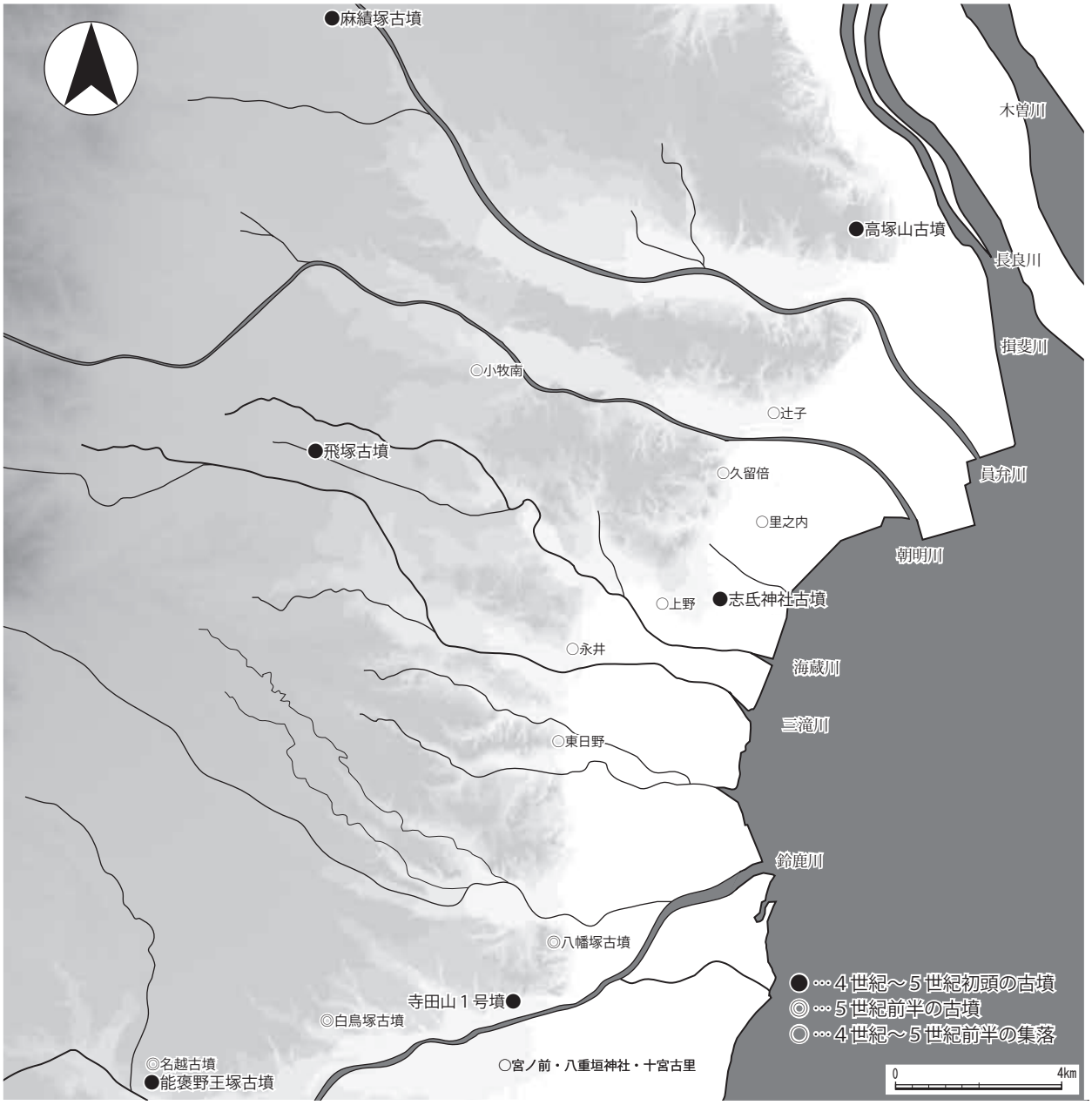
古墳の編年と暦年代は、岡田登 2012『伊勢市史』(伊勢市) を参考にした。
土師器・須恵器・埴輪の編年は、中井正幸・鈴木一有 2011「東海」(『講座日本の考古学 7　古墳時代 (上)』青木書店) を参考にした。

第 26 図　伊勢・志摩主要古墳編年表

域にこのような鏡が出土する古墳があったことが推測されている。[60]

北勢地域北部のなかの飛塚古墳　古墳時代前期後半になると、伊勢・伊賀地域の各地に定型化した大型古墳が出現する。中・南勢地域では、前方後方墳や、大型の前方後円墳ないしは造り出しをもつ大型円墳が多くみられる。北勢地域南部の鈴鹿川流域では、４世紀末の能褒野王塚古墳を筆頭に、寺田山１号墳・愛宕山１号墳・白鳥塚古墳といった前期末から中期前半の古墳が水系に沿って築造される。

しかしながら、北勢地域北部では、北勢地域南部や中・南勢地域のような継続した首長系譜を追うことはできない。麻績塚古墳・志氐神社古墳・飛塚古墳・高塚山古墳はいずれも単独墳で、やや離れた位置に１基のみ独立して築造されている。四日市市内に古墳が少ない点は、沖積地の形成がゆっくり進み海岸平野の形成が未発達であったため生産基盤が少ないことに起因するという指摘[61]があるが、集落の様相を見ても古墳時代前期後半段階の大規模な集落は見当たらず、当該地域に継続して大型古墳を築造するような勢力は認められない。したがって、前期古墳の立地から見ると、４世紀段階の北勢地域北部に



第 27 図　北勢における前期末から中期前半の古墳（1：150,000）（国土地理院数値地図・カシミール３Ｄを使用）

は、流域の上流・下流ごとに小規模な集団の領域があり、古墳の造営に関しては一代限りであったことが推測されよう。

（２）被葬者像

飛塚古墳の被葬者像　沖積平野の中央部に立地する点から、飛塚古墳の被葬者がこの耕地を支配領域として掌握する首長であったことは容易に想像できる。

墳丘の規模は、全長約 40 m とさほど大きくなく、墳丘の形態は円墳もしくは造り出し付き円墳である。海上交通を掌握していた首長の墓と考えられている志氐神社古墳・高塚山古墳が大型の前方後円墳であることを考慮すると、北勢地域北部のなかでは、集団としての勢力がやや弱い状況がうかがわれる。

出土遺物の構成要素は、非常に特徴的である。埴輪群から、伊勢湾沿岸地域、なかでも南勢地域とのつながりが強かったと考えられる。また、壺や壺形埴輪を墳丘に巡らせるという手法を採用していることから、伝統を重視した集団であったといえよう。

ほぼ同時期に築造された高塚山古墳からは畿内の影響下にある埴輪が出土しているにも関わらず、飛塚古墳の埴輪は在地色が強い。この差は、沿岸部と内陸という集団領域と古墳の立地そのものに起因していると思われる。当時の主要ルートから外れていた内陸の飛塚古墳造営集団は、埴輪の器種や形態を隣接地から見様見真似で習得し、土器製作工人の手によって円筒埴輪を製作したと考えられる。ただし、家形埴輪に関しては専門工人が来て製作した可能性があるため、飛塚古墳の被葬者が畿内と一切縁がなかったとは言い難い。

以上をまとめると、畿内勢力の拡大ルート上ではない内陸地の飛塚古墳では、古墳時代前期に畿内縁辺地で見られるような「一回限りの円筒埴輪生産」が行われており、器財埴輪については畿内の助力を得ていたことが想定される。埴輪の形状や葬送儀礼は伊勢湾沿岸地域の伝統に根ざしたものを採用しており、中・南勢地域や尾張・西三河地域と関係性が強い。このような状況から、飛塚古墳の被葬者は、菰野町という比較的海から離れた範囲を領域としながらも、畿内や伊勢湾沿岸の各地の首長と私的なつながりを持っていた人物であったといえよう。

5　今後の課題

飛塚古墳円筒埴輪の系譜については、それを指摘するに留まり、時期的な影響関係まで踏み込むことはできなかった。唯一出土した器財埴輪である家形埴輪は、製作技法を他の類例と比較することはできなかった。また、古墳時代中期の朝顔形埴輪が１点だけ出土しているが、この埴輪を伴っていた古墳が菰野町域に見つかった意義については検討していない。これらは今後の課題としたい。

今回の事業によって、墳丘上に茂っていた木々が伐採され、墳丘そのものが日の目を浴びることとなったが、工事竣工後は墳丘の上に高架が建築されるため、広い扇状地のなかに１基のみ残された姿を見ることはできなくなる。しかしながら、人工の覆屋の下ではあるものの、その存在と価値を地域に残すことができた意義は大きい。飛塚古墳が、北勢地域で最も古い古墳のひとつとして守られていくことを期待したい。

〔 註 〕

（１）三重県埋蔵文化財センター2014『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』

（２）四日市市 1988『四日市市史』第２巻史料編 考古Ⅰ

（３）四日市市教育委員会 1973『永井遺跡発掘調査報告』

（４）三重県教育委員会 1970「西ヶ広遺跡」『日本道路公団東名阪道路埋蔵文化財調査報告』／四日市市教育委員会 1972『西ヶ広遺跡発掘調査報告　－Ｄ地区－』／三重県埋蔵文化財センター2006『西ヶ広遺跡（第３・４次）発掘調査報告』

（５）三重県埋蔵文化財センター2013『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』、前掲註（１）。

（６）四日市市教育委員会 2003『一般国道１号線北勢バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ　北奥遺跡Ⅰ』／同 2004『一般国道１号線北勢バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ　北奥遺跡Ⅱ』

（７）菰野町教育委員会 1987『菰野町史』（上巻）

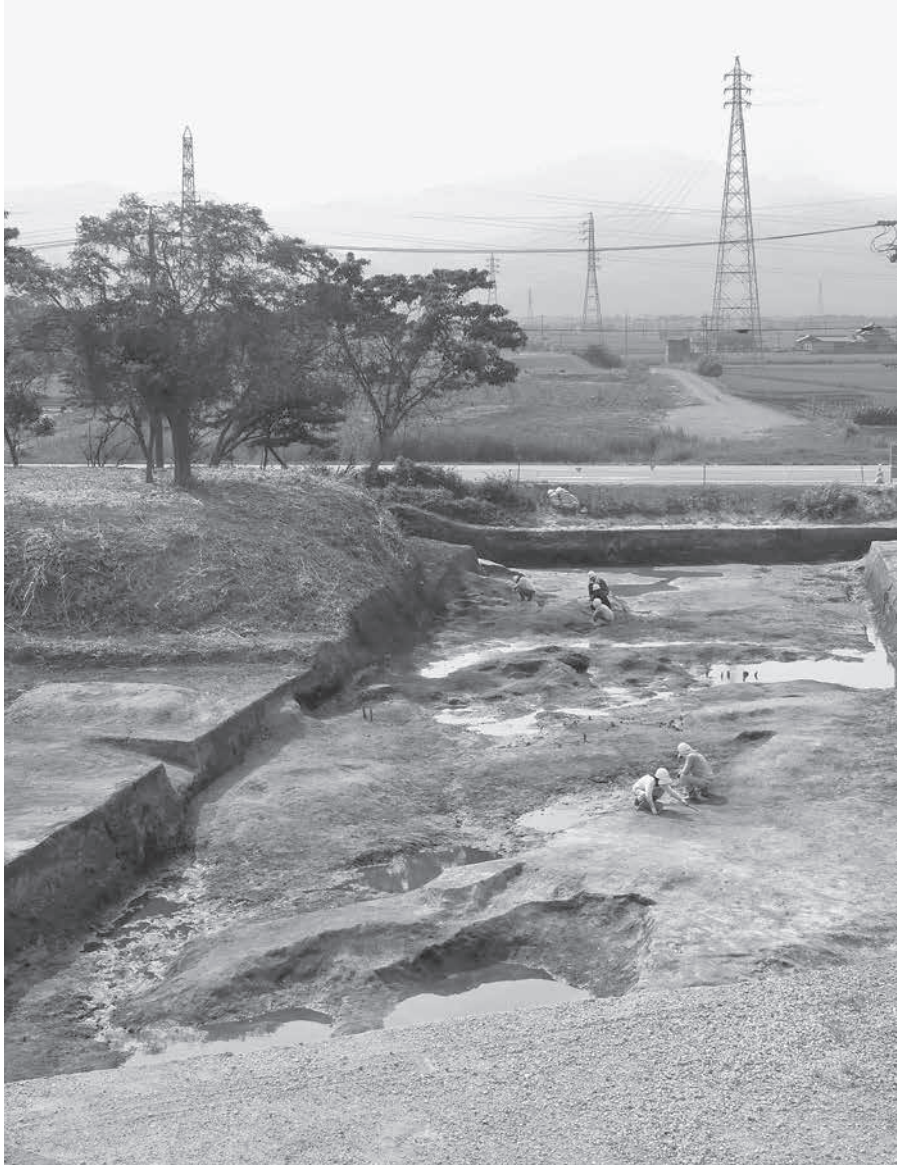
（８）墳丘の南側には、小さな造り出しのようなテラスが５m間隔に３箇所認められるが、これはキツネの巣穴である。営巣時に中の土を外にかき出して穴を掘っているため、巣穴の手前に土溜まりが形成されている。なお、第１次調査直前まで巣穴にキツネが棲んでいたことが目視されている。

（９）宇野隆志・奥田智子・森下章司 2012「造り出し付円墳と帆立貝式古墳」『加古川市西条古墳群　尼塚古墳』尼塚古墳発掘調査会・加古川市教育委員会

(10) 宝塚２号墳は５世紀半頃の古墳である。墳丘部は３段築成で、突出部は２段築成である。松阪市教育委員会・松阪市文化財センター2005『史跡 宝塚古墳』
(11) 兵庫県尼塚古墳は古墳時代中期中頃の古墳で、墳丘部は２段築成で、突出部を第１段平坦面につくる墳形をしている。尼塚古墳発掘調査会・加古川市教育委員会 2012『加古川市西条古墳群　尼塚古墳』
(12) 河合町教育委員会 1988『史跡　乙女山古墳　付高山２号墳－範囲確認調査報告－』
(13) 三重県教育委員会 1989「深長古墳」『昭和 61 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』
(14) 犬山市教育委員会 2001『史跡　青塚古墳調査報告書』
(15) 財団法人大阪文化財センター1985『美園』、渡辺昌宏 1982「大阪府美園遺跡１号墳出土の埴輪」『考古学雑誌』第 67 号第４巻
(16) 大阪市文化財協会 1991『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ
(17) 京都大学文学部博物館 1993『紫金山古墳と石山古墳』
(18) 前掲註（10）に同じ。
(19) 青柳泰介 2002「器物を模した埴輪」『季刊考古学』第 79 号
(20) 高橋克壽 2004「埴輪の成立と展開」『畿内の巨大古墳とその時代』季刊考古学・別冊 14 雄山閣
(21) 八賀晋 2005「古墳時代遺跡概観」『三重県史』考古１
(22) 伊藤裕偉 1991「古墳時代前期における土器製作技法の検討－伊勢地域における事例を通して－」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会
(23) 新名強 1999「三重県出土の二重口縁壺について」『研究紀要』第８号 三重県埋蔵文化財センター、同 2014「三重県の様相」『東生』３　東日本古墳確立期土器検討会
(24) 川崎志乃 2002「伊勢型二重口縁壺の基礎的研究」『Mie history』vol.13　三重歴史文化研究会
(25) 穂積裕昌 2002「伊勢における初期埴輪の成立過程」『Mie history』vol.13　三重歴史文化研究会
(26) 三重県埋蔵文化財センター2004『辻子遺跡発掘調査報告』
(27) 赤塚次郎 2001「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳調査報告書』犬山市教育委員会
(28) 飯田市教育委員会 2007『飯田における古墳の出現と展開』
(29) 前掲註（27）に同じ。
(30) 竹内英昭 1991「伊勢地方の埴輪事情」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会
(31) 和気清章 1994「伊勢湾西岸における埴輪の素描」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
(32) 穂積裕昌 1997「三重県の埴輪」『三重県の埴輪』三重県埋蔵文化財センター
(33) 豊田祥三 2001「伊勢における円筒埴輪の生産と展開」『研究紀要』三重県埋蔵文化財センター
(34) 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 号第２巻 日本考古学会
(35) 土師器と同じ製作技法で作られた埴輪は、前述した樽形埴輪の一群や、北武蔵の埼玉県川輪聖天塚古墳など、壺状の形態を呈した埴輪に見ることができる。菅谷浩之 1989「北武蔵における古式古墳の成立－小玉地方からみた北武蔵の古式古墳－」児玉町教育委員会・児玉町史編纂委員会
(36) 松阪市教育委員会 1986『坊山１号墳発掘調査報告書』
(37) 松阪市 1978『松阪市史』第２巻 資料編 考古
(38) 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第 41 巻第２号 考古学研究会
(39) 愛知県史編さん委員会 2005『愛知県史』資料編３考古３古墳／新編岡崎市編さん委員会 1989『新編岡崎市史』史料 考古下 16
(40) 前掲註（38）、北村和宏 2009「甲山１号墳の再検討」『三河考古』No.20　三河考古刊行会
(41) 前掲註（38）、斎藤嘉彦 2004「於新造古墳出土の円筒埴輪」『岡崎市史研究』第 25 号
(42) 藤井康隆 2003「伊勢湾東岸の古墳と埴輪」『東海の埴輪と宝塚古墳』第３回松阪はにわシンポジウム松阪市・松阪市教育委員会
(43) 前掲註（38）に同じ。
(44) 前掲註（10）に同じ。
(45) 吉良町教育委員会 2005『史跡　正法寺古墳　範囲確認調査報告書』
(46) 古谷毅編 2003『埴輪工人の移動からみた古墳時代前半期における技術交流の政治的研究』東京国立博物館
(47) 前掲註（38）に同じ。
(48) 前掲註（38）、豊田祥三 2008「伊勢北部における埴輪の受容と展開」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
(49) 前掲註（38）に同じ。
(50) 赤塚次郎 1992「円筒埴輪　東海」『古墳時代の研究』９　古墳Ⅲ埴輪 雄山閣
(51) 四日市市教育委員会 1991『四日市市文化財年報１』
(52) 三重県 2005『三重県史』資料編考古１
(53) 四日市市教育委員会 1991『上野遺跡』
(54) 前掲註（３）に同じ。
(55) 前掲註（３）に同じ。
(56) 前掲註（１）に同じ。
(57) 前掲註（１）に同じ。
(58) 前掲註（53）に同じ。
(59) 桑名市教育委員会 2006『三重県桑名市　高塚山古墳基礎調査報告書』
(60) 前掲註（59）に同じ。
(61) 四日市市 1993『四日市市史』第３巻 史料編 考古Ⅱ

※上記文献のほか、以下の報告書から図版を転載した。
・三重県埋蔵文化財センター2002『堀田第３～５次調査』
・三重県埋蔵文化財センター1999『前田町屋遺跡第２次調査－前田地区・大明神地区－』
・吉良町教育委員会 1989『中根山遺跡発掘調査報告書』
・豊橋市教育委員会 1997『権現山』
・鈴鹿市考古博物館 2013『鈴鹿市考古博物館年報』第 14 号

写　真　図　版



飛塚古墳とＡ区（南東から）

伐採・草刈り前風景（東から）

Ａ区調査前風景（南から）

写真図版２

草刈り後近景・遠景

草刈り後近景（東から）

草刈り後遠景（北東から）

A区全景（南東から）

A区全景（南から）

写真図版４

A区墳丘裾部(1)

A区墳丘裾部（北西から）

A区墳丘裾部（北から）

墳丘裾部（南・墳丘上から）

墳丘裾部（南東から）

写真図版６

ＳＤ４古墳周溝

ＳＤ４古墳周溝（東から）

ＳＤ４埴輪出土状況（北東から）

家形埴輪出土状況（南西から）

墳丘裾部検出状況（北から）

墳丘裾部遺物出土状況（北から）

調査区内南北土層断面（ｂ－ｂ’）（北から）

作業風景（北東から）

写真図版８

伐採後風景（東から）

Ｂ・Ｃ区調査前風景（南から）

B・C区全景（南から）

B区全景（北東から）

写真図版 10

SH5

ＳＨ５（南東から）

ＳＨ５遺物出土状況（南東から）

ＳＨ５（北から）

ＳＲ８（北東から）

Ｂ区測量風景（東から）

B区墳丘土層断面（東から）

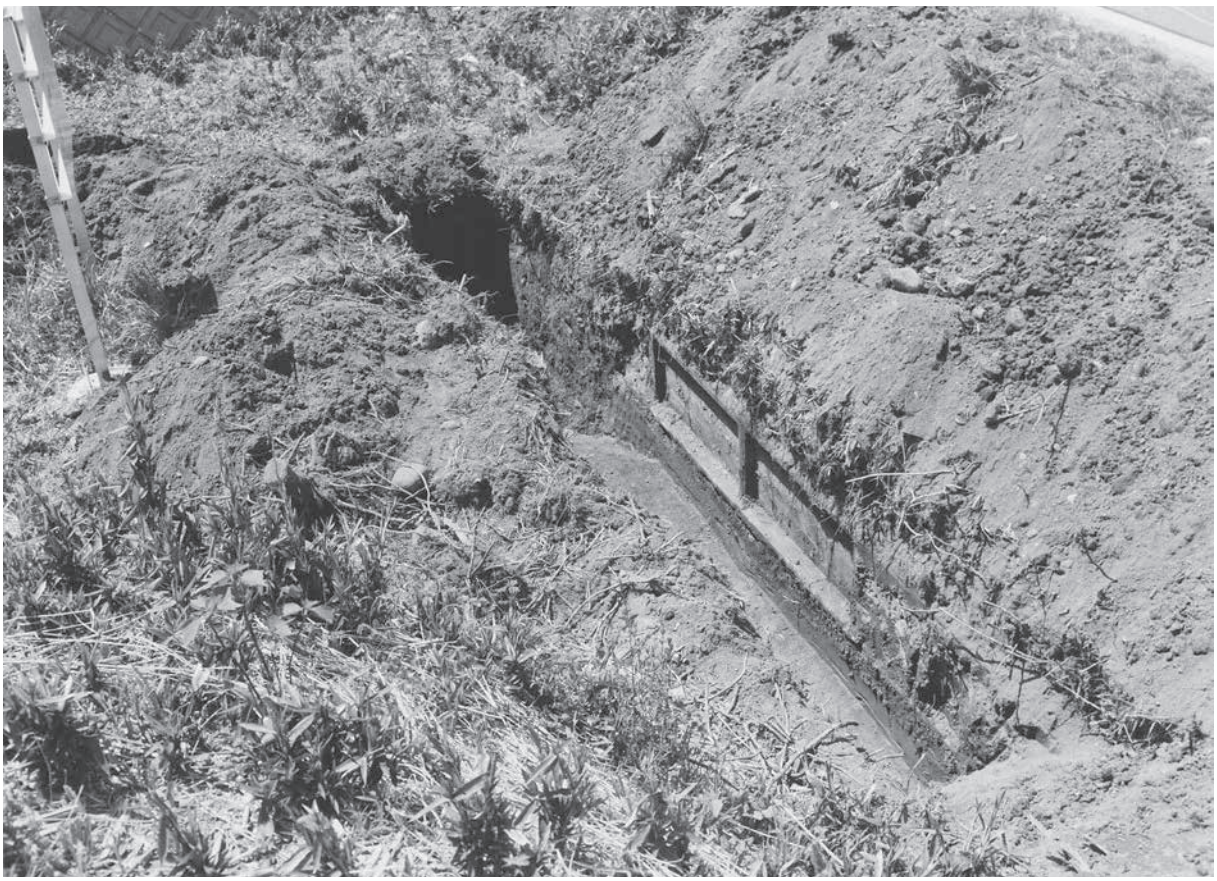
D区調査前風景（南から）

写真図版 12

D区全景

D区全景（南から）

D区全景（北から）



ＳＤ９（北東から）

出土遺物(1)

1

3

2

5

4

6

8

9

写真図版 14

7 外面

7 内面

8 外面

8 内面

9 外面

9 内面

10

12 外面

11

12 内面

13 外面

21

13 内面

23

16

24 外面

17

24 内面

19

25

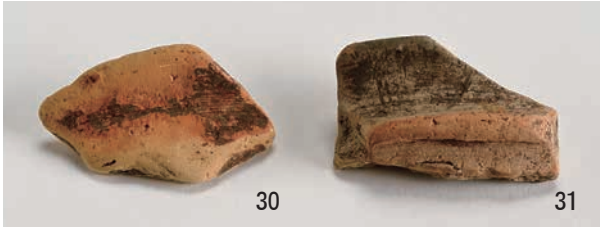
写真図版 16

26

27

28

29


30 31

32

33

35

36

48

63

58

64

60

65

62

66

写真図版 18

67

87 外面

87 内面

68

88

69

89

86

91

92

104

107

159 ヘラ記号

160

161

166

写真図版 20

49
105
108
176
180
179
181
52
107
174
177
182
53
109
175
179

192
193
194
195

198

196
197

208

199

210

報 告 書 抄 録

ふりがな	とびづかこふんはっくつちょうさほうこく
書名	飛塚古墳発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	355
編著者名	相場さやか
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　　ＴＥＬ　0596-52-1732
発行年月日	西暦2015（平成27）年２月13日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	次数	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号						
飛塚古墳（とびづかこふん）	三重郡菰野町大強原（みえぐん こものちょう おおごはら）	24341	22	35°02’07”	136°53’20”	１次	20120522～20120831	736	平成24～26年度一般国道477号四日市湯の山道路国補道路改築事業
						２次	20130828～20131022	191	
						３次	20140415	13	

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古墳	弥生時代 古墳時代 鎌倉時代	竪穴住居１棟 古墳１基 自然流路	弥生土器 埴輪・古式土師器 土師器・山茶碗・青磁碗	

要約

飛塚古墳は、海蔵川の支流にあたる竹谷川の北岸に位置する。現在地表面に残る墳丘径は約30mである。第１～３次発掘調査の結果、周溝の一部を確認した。検出された周溝から、墳丘径35.0m、全長39.4mの円墳であった可能性が高い。出土遺物は、赤彩が施された家形埴輪・壺形埴輪・円筒埴輪で、築造時期は古墳時代前期末と考えられる。

墳丘の下層から弥生時代後期の竪穴住居を１棟検出し、古墳が造られる前段階に集落が展開していたことが確認された。このほか、古墳時代中期と考えられる朝顔形埴輪片が１点出土した。

三重県埋蔵文化財調査報告 355

飛塚古墳発掘調査報告

２０１５年２月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　光出版印刷株式会社